

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	アジア先史文化特論	集中	集中	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-佐川 正敏	1年		

学びの準備	ねらい 古代東アジアの仏教寺院、ことに百済や統一新羅時代の寺院の調査・研究成果について紹介し、そしてその影響を受けて成立し、展開した日本の古代寺院に関する考古・歴史・思想史・建築史・美術史学的研究や学術論争について講義する。また、古代東アジアにおける日本の寺院の伽藍配置や塔心礎の設置形式、舍利奉安形式の特徴を比較・考察しながら報告する。	メッセージ
	到達目標 ①仏教寺院を通じた古代東アジア史のグローバルな動向を学修できる。 ②中国と朝鮮半島の寺院や塔、舍利奉安形式との比較によって日本の寺院の特徴を学修できる。 ③考古学の成果を歴史学、思想史学、建築史学、美術史学との学融合によって解釈する学際研究の方法について学修、応用できる。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	中国最初の仏教寺院と南北朝時代の寺院・塔・舍利奉安	
	2	隋唐遼宋時代の寺院・塔・舍利奉安	
	3	高句麗と渤海の寺院・塔・舍利奉安	
	4	百済の寺院・塔・舍利奉安	
	5	新羅～高麗の寺院・塔・舍利奉安	
	6	飛鳥寺ー日本最初の本格的寺院と舍利埋納、瓦生産ー	
	7	吉備池廃寺と山田寺ー日本最初の勅願寺と同時期の氏寺ー	
8	若草伽藍と法隆寺ー再建論争の現在		
9	二つの薬師寺と移建論争ー藤原京から平城京へー		
10	平城京外京の寺院と奈良ー興福寺、元興寺、東大寺ー		
11	陸奥国の寺院の展開(1)ー寺院造営と蝦夷支配ー		
12	陸奥国の寺院の展開(2)ー山岳寺院と磨崖仏ー		
13	平泉と寺院ー仏国土誕生への道ー		
14	古代東アジアにおきる日本の寺院の特徴		
15	古代東アジアにおきる日本の塔と舍利奉安の特徴		
16	テスト		
実践	テキスト・参考文献・資料など 森郁夫2009年『日本古代寺院の造営の諸問題』雄山閣 テキストの各章末の参考文献や鈴木靖民編2010年『古代東アジアの仏教と王権』勉誠出版などのコピーを講義の進行に合わせて適宜配布します。		
	学びの手立て		
	評価 達成目標①～③に関連するレポートによってのみ評価します		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	家族社会学特論 I	前期	木 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	澤田 佳世	1年	k.sawada@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>本演習の目的は、(1)質的調査法及び質的調査を用いた〈人口・家族・ジェンダー〉に関する文献を精読し、(2)その成果から問題設定・調査の企画設計・質的調査法と質的データの分析手法、データの理論化の手法を学び、(3)各自の研究テーマへの実践的な応用力を涵養することである。</p>	<p>皆さんにとって身近な家族・人口をめぐる様々な問題群。社会現象としての人口・家族変動について、ジェンダーの視点から質的調査を軸に考察していきましょう。</p>
到達目標	<p>上記目的の基本文献を講読対象とし、各文献に示された人口・家族・ジェンダー研究の知見を習得するとともに、各文献で採用されている問題設定・調査の企画設計・質的調査法と質的データ分析手法の特性、データの理論化の過程を検討する。これらの知見を応用して、質的調査法による各自の研究テーマへの具体的適用を図ることを到達目標とする。</p>	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>【授業の展開計画】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション：本演習の目的と進め方 2. 質的調査法とは何か：質的調査の特性と種類（聞き取り調査、参与観察法、ドキュメント分析、フィールドワーク、ライフヒストリー分析）、その魅力と問題点 3. フィールドワークとは何か (1) 4. フィールドワークとは何か (2) 5. 聞き取り調査の方法 (1) 6. 聞き取り調査の方法 (2) 7. 質的データの整理と分析の手法：質的データ分析ソフト《Max QDA》の活用 8. データから理論へ 9. 質的調査による〈人口・家族・ジェンダー〉の社会学(1)：基本文献（著書）の購読 10. 質的調査による〈人口・家族・ジェンダー〉の社会学(2)：基本文献（著書）の購読 11. 質的調査による〈人口・家族・ジェンダー〉の社会学(3)：基本文献（論文）の購読 12. 質的調査による〈人口・家族・ジェンダー〉の社会学(4)：基本文献（論文）の購読 13. フィールドワークとインタビュー調査の個別テーマへの応用実践(1)：受講生の個人発表と指導 14. フィールドワークとインタビュー調査の個別テーマへの応用実践(2)：受講生の個人発表と指導 15. 統括：質的調査法と〈人口・家族・ジェンダー〉の社会学 16. 統括：質的調査法と〈人口・家族・ジェンダー〉の社会学
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>教科書は指定しない。人口・家族・ジェンダーに関する講読文献は履修者の研究関心に応じて選定する。質的調査については、佐藤郁哉『フィールドワーク（増補版）』『実践 質的データ分析入門』、桜井厚『インタビューの社会学』、山中速人編『マルチメディアでフィールドワーク』、ホルスタイン『アクティブ・インタビュー』、戈木クレイグヒル滋子『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』などを参照する。その他参考文献については授業時に適宜紹介する。</p>
	<p>学びの手立て</p>
	<p>評価</p> <p>出席回数、購読文献の発表、応用実践の発表、討論の参加姿勢と貢献度で総合的に評価する。</p>

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>家族社会学特論 II</p>
-------	--------------------------------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	家族社会学特論Ⅱ	後期	木5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	澤田 佳世	1年	k.sawada@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	人口・家族をめぐる様々な問題群を、ジェンダー・エスニシティ・階級の観点から考察する。特に、社会現象としての人口・家族変動（出生力、家族計画、結婚・離婚、国際・国内人口移動、人口増加、人口転換、少子化・高齢化、生殖医療技術、家族政策、育児・介護、仕事と家庭の両立、再生産領域のグローバル化等）に関する研究について理解を深めると同時に、各自の研究の進展をはかる。	身近な家族・人口をめぐる問題群について、世界の状況と比較しながら、皆さんの経験と痛みをアカデミックに言語化していきましょう。
到達目標	(1) 現代社会における人口・家族をめぐる問題群に関する文献を講読し、受講生による報告を行ったうえで議論、ジェンダー・エスニシティ・階級といった観点から考察を深める。(2) 各自の研究課題にそくした報告・議論を行い、それぞれの研究の進展をはかる。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	イントロダクション	授業内で指示する
	2	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	3	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	4	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	5	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	6	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	7	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	8	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	9	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	10	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	11	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	12	受講生による報告と議論	授業内で指示する
	13	受講生による報告と議論	授業内で指示する
14	受講生による報告と議論	授業内で指示する	
15	まとめ	授業内で指示する	
16	予備日	授業内で指示する	
実践	テキスト・参考文献・資料など	受講生及び担当教員の研究関心に応じて選定する。	
	学びの手立て		
	評価	報告の内容、議論への参加姿勢と貢献度、出席で総合的に評価する。	

学びの継続	次のステージ・関連科目 家族社会学特論Ⅰ（関連科目）
-------	-------------------------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	現代社会文化特論	集中	集中	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-北村 毅	1年	授業の教室で対応する	

学びの準備	ねらい いわゆる「知識人」だけではなく、一般の人たちが「戦後」をどう生きてきたのか、「戦後」とどう向き合ってきたのか、戦争体験を踏まえてそこから何を見出そうとしてきたのかを考えるために、フィールドワークやオーラル・ヒストリーの手法を取り入れながら、沖縄戦の記憶や戦跡について考える。	メッセージ 沖縄戦にかかわる多様な問題群について幅広い関心をもつことが望ましい。
	到達目標 フィールドとしての「戦後」について思考する方法を学び、そのために必要とされるフィールドワークについて、具体的な事例を通して理解をする。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	イントロダクション	
	2	戦争体験を聞くということ	
	3	沖縄戦の記憶（1）	
	4	沖縄戦の記憶（2）	
	5	沖縄の「戦跡」（1）	
	6	沖縄の「戦跡」（2）	
	7	「戦死者」とは誰か？（1）	
	8	「戦死者」とは誰か？（2）	
9	摩文仁の丘のフィールドワーク（1）		
10	摩文仁の丘のフィールドワーク（2）		
11	平和の礎のフィールドワーク（1）		
12	平和の礎のフィールドワーク（2）		
13	プレゼンテーション&ディスカッション（1）		
14	プレゼンテーション&ディスカッション（2）		
15	プレゼンテーション&ディスカッション（3）		
16	まとめ		
実践	テキスト・参考文献・資料など 特定の教科書は指定しない。参考文献等は授業の中で提示する。		
	学びの手立て 共同でフィールドワークを行ったうえで、その内容に関するプレゼンテーションとディスカッションを求めます。その課題に主体的に取り組む心構えをもって履修すること。		
	評価 課題の取り組み状況をふまえて総合的に評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

※ポリシーとの関連性 これまでの研究史をしっかりと確認する作業を徹底的に行ない、これに自らの研究課題を位置付けた研究論文の作成をめざす。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	考古学特論 I	前期	木 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-池田 栄史	1年	y-ikeda@ll.u-ryukyu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	現在の考古学研究は、文化人類学的傾向をもつアメリカ考古学的方法と歴史学的傾向を持つ中国や日本などの東洋考古学的方法の二つのあり方が認められる。沖縄の考古学はこの双方の考古学研究方法が混在する地域であり、その境界領域とも言える。本講義ではこのような双方の考古学研究方法の理論と研究事例を確認し、これが沖縄の考古学研究にどのような影響を及ぼしているかを検証する。	本授業の目的は修士課程で取り組もうとする研究課題に対して、どのような研究手法が望ましいか、研究史を振り返ることで見つけ出す手伝いをするにある。
到達目標	自らの研究課題とその研究手法をしっかりと確立する。	

学びの実践	学びのヒント
	授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む)
	基本的に講義形式の授業を行なう。 ただし、内容に応じて、先行する論文や研究書を輪読しながら、これを素材として講義を進めることもある。 大きくは考古学研究史、研究方法論、時代各説、研究特論という順序で、一年間を通した講義を進める。 講義の最後に質問を含めた討議の時間を設ける。
	テキスト・参考文献・資料など 特に指定しない。講義の中で、随時、紹介する。
学びの手立て	大学院生活はまずは自分で問題を発見し、解決する能力を身に着けること。
評価	出席と受講生の関心の度合いを見て評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目 修士論文指導教官の授業との関連を確認して履修すること。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	考古学特論Ⅱ	後期	木6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-池田 栄史	1年	緊急の場合は、y-ikeda@ll.u-ryukyu.ac.jpに連絡すること。	
学びの準備	ねらい	メッセージ		
	現在の考古学研究は、文化人類学的傾向をもつアメリカ考古学的方法と歴史学的傾向を持つ中国や日本などの東洋考古学的方法の二つのあり方が認められる。沖縄の考古学はこの双方の考古学研究方法が混在する地域であり、その境界領域とも言える。本講義ではこのような双方の考古学研究方法の理論と研究事例を確認し、これが沖縄の考古学研究にどのような影響を及ぼしているかを検証する。	前期の授業からの展開を図るので、連続して履修することが望ましい。		
到達目標	自らの研究課題と研究手法を確立すること。			
学びの実践	学びのヒント			
	授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）			
	基本的に講義形式の授業を行なう。 ただし、内容に応じて、先行する論文や研究書を輪読しながら、これを素材として講義を進めることもある。 大きくは考古学研究史、研究方法論、時代各説、研究特論という順序で、一年間を通した講義を進める。 講義の最後に質問を含めた討議の時間を設ける。			
	テキスト・参考文献・資料など 特に指定しない。講義の中で、随時、紹介する。			
学びの継続	学びの手立て			
	自ら学ぶ姿勢を確立すること。			
評価				
出席と受講生の関心の度合いを見て評価する。				
学びの継続	次のステージ・関連科目			
	修士論文指導教員の授業との関連を考えて履修すること。			

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	国語教育学特論 I	前期	木 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	田場 裕規	1年	ytaba@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 本講は、田中実『小説の力 新し作品論のために』（大修館書店）を読むことを通して、国語科における文学的文章教材の在り方を考察する。また田近洵一『創造の〈読み〉新論—文学の〈読み〉の再生を求めて』（東洋館出版）と読み比べることによって、国語科における文学作品の位置付けを考察する。	メッセージ
	到達目標 国語科教育における、読みの問題について関心を持ち、国語科教材としての文学を検討できる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画	
	回	テーマ
	1	ガイダンス
	2	〈読みのアナキー〉＝「還元不可能な複数性」を越えて
3	批評する〈語り手〉—芥川龍之介『羅生門』	
4	多層的意識構造のなかの〈劇作家〉—森鷗外『舞姫』	
5	『こゝろ』という掛け橋—夏目漱石『こゝろ』	
6	お話（プロット）を支えるカー太宰治『走れメロス』	
7	〈自閉〉の咆哮—中島敦『山月記』	
8	戦争と川端文学—川端康成『ざくろ』	
9	「個」に生きた〈作家〉 山川方夫—山川方夫『夏の葬列』	
10	《他者》という出口—井伏鱒二『山椒魚』	
11	新しい〈作品論〉のために	
12	創造の〈読み〉の理論	
13	創造の〈読み〉の視角	
14	〈読み〉の教育の実践的課題	
15	総括	
16		
	テキスト・参考文献・資料など 田中実『小説の力 新し作品論のために』（大修館書店）¥2100・田近洵一『創造の〈読み〉新論—文学の〈読み〉の再生を求めて』（東洋館出版）¥2800 全国大学国語教育学会編『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』	時間外学習の内容
	学びの手立て 毎回、指定された章の要旨をまとめ、私見をまとめてください。授業は、その内容を、研究討議の形式で進めていきます。	
	評価 出席を重視する。また、1～14回において扱った文学作品について、①教材研究資料、②受講者の問題意識に応じたレポートを課し、授業参加状況等を含めて総合的に評価する。	

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	国語教育学特論Ⅱ	後期	木5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	田場 裕規	1年		

学びの準備	ねらい 本講は、田近洵一『戦後国語教育問題史』（大修館書店）を読み、国語科教育学における、授業論、指導論、教材論、学習者論を考えていく。特に文学教育論を中心に行う。	メッセージ
	到達目標 戦後文学教育の問題史を検討し、文学教育の要件について考察する力を身に付ける。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス	
	2	戦後国語教育の出発点の問題	
	3	「言語教育と文学教育」論争	
	4	現実認識の文学教育	
	5	問題意識喚起の文学教育	
	6	「主観主義と客観主義」論争	
	7	十人十色の文学教育	
	8	状況認識の文学教育	
9	関係認識・変革の文学教育		
10	戦後教育としての国語単元学習		
11	戦後国語教育史の人びと（1）・・・古田擴		
12	戦後国語教育史の人びと（2）・・・増淵恒吉		
13	戦後国語教育史の人びと（3）・・・渡辺茂		
14	戦後国語教育史の人びと（4）・・・倉澤栄吉		
15	まとめ		
16			
	テキスト・参考文献・資料など 田近洵一『増補版戦後国語教育問題史』（大修館書店）2400円		
	学びの手立て 毎回、指定された範囲の要旨をまとめ、私見をまとめて発表してもらい、それを研究討議、検討することによって授業を進めていく。		
	評価 (出席点+レジュメ点+レポート点) ÷ 3 = 評点		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

※ポリシーとの関連性 グローバルな視点を持って地域社会の課題に取り組むことで、沖縄の自立と国際社会の発展に貢献できる人材を育成する。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	国際社会学特論	前期	月6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-新垣 誠	1年	makoto@ocjc.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>国際社会に山積する問題を社会学の観点から見つめてみると、地域社会との関連性が見えてくる。目まぐるしく変化する東アジア情勢の中であって沖縄もその例に漏れない。難民や労働移民などの人口移動が近代国民国家にどのような影響を及ぼしてきたのか。これからの多文化共生社会の可能性を、沖縄を通して考える。</p>	<p>沖縄を取り巻く国際情勢は、日夜激しく変化している。国際テロリズムや難民の問題は、決して対岸の火事ではなく、私たち一人ひとりが自身の課題として受け止める必要がある。そのためには、どのような理論や知識、視点が重要となってくるのだろうか。その答えを共に見つけよう。</p>
到達目標	<p>①アメリカの対中東政策や新世界秩序の歴史を理解する。②それを背景として、現在アラブ諸国で起こっている様々な現象（「アラブの春」、シリア難民、イスラミックステイトなど）について分析、自らの意見を述べるようになる。③沖縄における多文化共生の実情や日本の難民受け入れ、外国人労働者の現状について概説できるようになる。④沖縄移民の歴史を理解し、その現状を説明できるようになる。</p>	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス、グローバリゼーションとは	グローバル化の定義を調べる。
	2	近代における人口移動	沖縄移民について調べる。
	3	沖縄の労働移民	移民の定義を調べる。
	4	プッシュ・プル要因～労働市場と移民政策	労働移民の歴史を調べる。
	5	ホスト国での移民コミュニティ	労働移民の歴史を調べる。
	6	近代国家とマイノリティー	マイノリティーの定義を調べる。
	7	人種・民族・エスニシティ	エスニシティの定義を調べる。
8	近代国民国家とアイデンティティ	アイデンティティの定義を調べる。	
9	「世界のウチナーンチュ・ネットワーク」	沖縄移民の歴史を調べる。	
10	アメリカと移民の歴史	アメリカ移民の歴史を調べる。	
11	アメリカの中東政策	米中東関係について調べる。	
12	ヨーロッパにおける植民地主義と移民問題	植民地主義について調べる。	
13	シリア難民とイスラムフォビア	シリア難民について調べる。	
14	国際テロリズム	国際テロについて調べる。	
15	沖縄そして地球社会における多文化共生とは	学びの総括をする。	
16			
実践	テキスト・参考文献・資料など	特定の教科書は使用せず、課題としてプリントや資料を、担当教員がそのつど準備する。	
学びの手立て	履修の心構えとして、積極的に授業に参加しディスカッションを行うこと。学びを深めるために、毎回与えられた課題を予習し、授業内でのディスカッションに備えること。		
評価	ディスカッションにおけるパフォーマンス50%、期末レポート50%（ディスカッションにおいては、あらかじめ読んできた課題の理解度と、理論的に議論を構築できるか、質問に適切に答えられるか、批判的思考に基づいて意見を述べることができるか、などを評価する。期末レポートにおいては、テーマの理解度と批判的思考能力、意見のオリジナリティーを評価する。）		

学びの継続	次のステージ・関連科目
	学んだことをもとに、多文化共生社会実現に向けてのアクションを起こすことを視野に入れて欲しい。地域行政への政策提言を行ったり、グローバル化を意識した上で自らのライフスタイルを見直すことも期待する。

科目基本情報	科目名 社会学研究法特論	期別	曜日・時限	単位
	担当者 桃原 一彦	前期	水6	2
		対象年次	授業に関する問い合わせ	
		1年	講義終了後またはメール等で問い合わせください。	

学びの準備	ねらい 本科目は、社会調査に基づいた研究テーマを有する大学院生が社会調査の企画と設計、調査の実施、分析・集計に関する知識と技能を実践的に習得することを目的とするものである。とくに、社会調査の技法に関する初歩から、研究テーマと方法論との論理構成上の積み上げ、さらに社会調査の実践等に関して指導していくものとする。調査方法論の基礎や調査倫理はもちろんのこと、質的調査の技法	メッセージ 学部で学んだ社会調査法を修士論文レベルで考え、使用し、マスターするための科目です。本科目は専門社会調査士資格の認定科目です。資格取得を目指す大学院生は、必ず履修してください。
	到達目標 社会調査の基本的な知識と技能を修士論文に使用できるようにマスターする。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	社会調査の初歩（社会調査の企画・設計に向けたオリエンテーション）	社会調査の種類について調べる
	2	社会調査と調査倫理	調査の倫理的問題の事例を調べる
	3	研究方法とデータ収集法との論理的関係（個別具体的テーマから概念構成と仮説提示の論理へ）	修士論文の論理展開を考える
	4	社会調査の入口（学術情報ネットワークの活用術、CiNii等）	学術情報の検索、収集の実践
	5	社会調査の種類—質的調査①（参与観察法と非参与観察法）	参与観察法の事例を調べる
	6	社会調査の種類—質的調査②（ドキュメント分析と生活史法）	ドキュメント分析の事例を調べる
	7	社会調査の実践I—質的調査の実践（個別テーマに則し質的調査を用いてデータ収集を実践する）	論文での質的調査の可能性を考える
	8	社会調査の種類—量的調査①（概念構成および仮説提示から変数構築に向けて）	論文研究におけるキー概念の構築
	9	社会調査の種類—量的調査②（調査票の作成方法：ワーディング等の基本ルール）	調査票作成の実践
	10	社会調査の種類—量的調査③（対象者・フィールドの選定法、およびサンプリングの理論と技法）	サンプリングの実践
	11	社会調査の実践II—量的調査の実践（個別テーマに則し簡単な調査票調査の実践）	調査票の事例を集める作業
	12	量的データの整理①（エディティング、コーディング、データクリーニング）	量的データ処理の基本を実践
	13	量的データの整理②（フィールドノート作成、コードブック作成）	フィールドノートの事例を調べる
	14	量的分析とグラフ作成（標本誤差と簡単な検定法、およびSPSS等のPC活用術）	量的データ処理の応用
15	まとめとふりかえり（量的調査の報告レポート、および質的・量的調査に関する総合的なまとめ）	修士論文の方法を確立する	
16	補習	ふりかえりと修士論文指導	
	テキスト・参考文献・資料など 大谷信介他編著、『社会調査へのアプローチ—論理と方法—』（第2版）、ミネルヴァ書房、2005年。 適宜紹介する。		
	学びの手立て 大学院教育の目標である修士論文の調査研究を前提とした講義になる。研究テーマの具体的な論理展開の参考に するように心がけてください。		
	評価 提出物（論文・レポートなど）、平常点（出席回数、発表やディスカッションへの取り組み姿勢）		

学びの継続	次のステージ・関連科目 比較社会文化特論 I
-------	---------------------------

科目基本情報	科目名 社会統計学特論	期別 後期	曜日・時限 火6	単位 2
	担当者 -原田 真知子	対象年次 1年	授業に関する問い合わせ machiko@okiu.ac.jp 講義時間の前後に相談に乗ります。	

学びの準備	ねらい この科目は、社会文化現象に関する概念モデルの計量的分析法を修得することを目的とします。複数の変数の因果関係やデータの構造を分析し、仮説に対する結論を導き出すための道具立てとして様々な多変量解析法が開発されてきました。社会学の研究で用いられることの多い離散データ（クロス集計表や2値データ）の分析技法を中心に、代表的な多変量解析法を紹介します。	メッセージ ○多変量解析法による仮説検証の醍醐味を味わえるよう、分析実習の時間を多くとります。課題に対して、履修生と講師が協同して仮説を検証する中で、分析の面白さや視点の広がりを感じてほしい。○履修生の研究テーマに関する論文（計量分析法による）を読解します。実証的研究の流れを先行研究に学ぶことは、論文執筆の際に学ぶことは、論文執筆の際に参考になるでしょう。
	到達目標 授業は次の3ステップを経て、計量モデルを用いた分析法を学び、コンピュータを用いて実際に分析することのできる能力を習得します。1) 多変量解析を学ぶために、数理統計学の理論的基礎が理解できること。統計パッケージソフト(SPSS)を用いてデータを処理しながら統計の基礎を復習します。2) 各々の多変量解析の特性と利用上の留意点が理解できること。社会調査データを用いて分析実習を行います。SPSSによる分析手順と結果の解釈法、分析結果の記述方法を実践的に学びます。3) 最後に、履修生の研究テーマに関する先行研究のなかから、授業で紹介した多変量解析法を用いた実証的研究を選定し、論文の読解を行います。仮説の構築、適切なデータ処理、結果の記述や考察までの「データ分析の流れ」が理解できるようになります。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	データの種類と多変量解析法の使い分け、統計パッケージソフトの基本的操作	統計学基礎の通読、基本操作の練習
	2	データの種類と多変量解析法の使い分け、統計パッケージソフトの基本的操作	基本操作の練習
	3	多変量データ行列と基本統計量（分散と共分散）、因果と相関の違い	統計学基礎を通読、基本分析の練習
	4	多変量データ行列と基本統計量（分散と共分散）、因果と相関の違い	基本分析の練習
	5	推定と仮説検定、サンプルと母集団について	仮説設定の練習、基本分析の練習
	6	クロス表の分析（1）・・・独立性の検定	教科書・該当章の通読、分析の練習
	7	クロス表の分析（2）・・・多重クロス表のログリニア分析	分析の練習
	8	分散分析（1）・・・平均と分散、交互作用	教科書・該当章の通読、分析の練習
	9	分散分析（2）・・・2因子の交互作用、一般線形モデルとは	分析の練習
	10	重回帰分析（1）・・・回帰分析の基本、モデルの評価	教科書・該当章の通読、分析の練習
	11	重回帰分析（2）・・・回帰モデルの比較検討、分析時の注意点 結果の記述方法(パス図)	分析の練習
	12	回帰分析の応用・・・独立変数に質的変数を含んだ回帰分析	教科書・該当章の通読、分析の練習
	13	ロジスティック回帰分析（1）・・・ロジット、係数の推定と検定、モデルの評価と解釈	教科書・該当章の通読、分析の練習
	14	ロジスティック回帰分析（2）・・・モデルの比較検討、分析時の注意点	分析の練習
	15	多変量解析法を用いた原著論文の読解、レポート作業の相談	分析の実施
16	多変量解析法を用いた原著論文の読解、期末レポート課題の発表	分析の実施	

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など 教科書は、履修生の学習歴を聞いてから選定します。また、分析に必要なデータや操作マニュアルを、電子ファイルで配布します。 ○太郎丸博 「人文科学 カテゴリカルデータ解析」ナカニシヤ出版 ○村瀬洋一ほか共編「SPSSによる多変量解析」オーム社 2800円 ○岩井紀子ほか「調査データ分析の基礎：JGSSデータとオンライン集計の活用」有斐閣 2800円 ○数理社会学会 監修 「社会の見方、測り方：計量社会学への招待」勁草書房
-------	--

学びの実践	学びの手立て 1) 第1回目の授業で関心や学習履歴などを調査し、教科書や実習内容を決定するので、必ず出席してください。 2) 分析ソフトを用いた統計解析という専門性を修得するには、学習の積み重ねが必要です。授業はすべて分析実習をとまなうので、できるだけ欠席はしないこと。 3) Excelで集計表を作成した経験があることが望ましい。高度な数学知識がなくともよい。意欲と関心を持って最後まで取り組める人を歓迎します。
-------	--

学びの実践	評価 宿題の提出40%、期末レポート40%、出席点20%・・・宿題は、授業内容に関する練習問題（コンピュータを使った分析）です。
-------	---

学びの継続	次のステージ・関連科目 本研究で学んだ知識や分析スキルを、修士課程の研究活動や職業に活かしてほしいと思います。単位修得後も、分析法に関して相談に乗ります。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	植民地社会特論 I	前期	金 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	鳥山 淳	1年		

学びの準備	ねらい 近代沖縄の経験を植民地問題の視点で捉え直し、さらに日本の植民地となった台湾や朝鮮半島、国際連盟の委任統治領として日本が統治した南洋群島などにおける支配構造にも視野を広げる。それらを通して、植民地主義として考察すべき問題についての理解を深めることを目的とする。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） (1) 沖縄の「併合」と分島問題（第1回～第3回） (2) 徴兵制をめぐる確執（第4回～第5回） (3) 砂糖経済の行き詰まりと沖縄救済論（第6回～第8回） (4) 移民・出稼ぎと同郷意識（第9回～第10回） (5) 生活改善と戦時動員（第11回～第13回） (6) 戦場における軍隊と住民（第14回～第15回）
	テキスト・参考文献・資料など 特定のテキストは指定せず、テーマごとに輪読する複数のテキストを提示する。 講義の中で適宜提示する。
	学びの手立て
	評価 輪読するテキストに関する報告内容を中心に評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	植民地社会特論Ⅱ	後期	金 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	鳥山 淳	1年		

学びの準備	ねらい 米国統治下におかれた沖縄の経験を植民地問題の視点によって捉え、さらに同時代のミクロネシアや朝鮮半島などに視野を広げながら、脱植民地化の時代における植民地主義について考察することを目的とする。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） (1) 固定化される軍事基地（第1回～第3回） (2) 沖縄の帰属問題と対日講和条約（第4回～第6回） (3) 占領批判と反共主義（第7回～第9回） (4) 復帰をめぐる問い（第10回～第12回） (5) 核軍拡競争と信託統治領（第13回～第15回）
	テキスト・参考文献・資料など 特定のテキストは指定せず、テーマに応じて複数のテキストを提示する。 講義中に適宜提示する。
	学びの手立て
	評価 テキストの輪読における報告内容を中心に評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名 南島芸能特論 I	期別	曜日・時限	単位
	担当者 -波照間 永吉	前期	木6	2
		対象年次	授業に関する問い合わせ	
		1年	授業終了後に教室で受け付けます。	

学びの準備	ねらい 組踊テキストを原本コピーを用いて読んでいく。その上で、組踊詞章の発音、語彙の解釈、詞章全文の通釈・鑑賞が出来るようになることを目指す。そのためには変体仮名や漢字の草書体などがしっかりと読めるようになる必要がある。と同時に、琉球古典語についての知識も必要である。	メッセージ 変体仮名や漢字草書体を学ぶことは、新しい文字世界に入ることである。けっして難しいことではない。要は慣れであり、数多く文字にふれることである。また、組踊語をととして琉球語についての知識も学んでもらいたい。この講座の学習を通して琉球古典文学の世界を味わっていただきたい。
	到達目標 この講座では琉球古典語による作品を読み、組踊という琉球古典芸能への知識を深めることを目指している。組踊はユネスコの世界無形文化遺産にも登録される琉球・沖縄の貴重な文化である。本講座はこのような文化への理解を深める糸口となるだろう。また、変体仮名・漢字草書体の読解能力を身に着けることは、大学院を修了して地域の古い文献の調査事業に従事するとき、必ずや有効な技術となる筈である。役に立つスキルを身につけて欲しい。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	琉球文学と組踊について講義。使用する辞典類の解説も行う。	辞典類の準備・くずし字の翻字
	2	組踊本テキストの解説と作品解説。変体仮名について「字典」で学ぶ。	くずし字の翻字と語義の調べ
	3	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	4	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	5	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	6	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	7	組踊見学。	くずし字の翻字と語義の調べ
	8	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	9	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	10	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	11	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	12	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	13	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	14	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
15	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ	
16	予備日（補講日）	IIに向けた取り組み	
実践	テキスト・参考文献・資料など ・「尚家組踊集」の中から「二山和睦」を取り上げる。テキストはコピーを準備する。 ・参考文献は以下のとおり。 『沖縄古語大辞典』沖縄古語辞典編集委員会 角川書店 1995年 『沖縄語辞典』国立国語研究所 大蔵省印刷局 1963年 『伊波普猷全集』（第3巻）伊波普猷 平凡社 1974年 『近世古文書解説字典』若尾俊平・浅見恵・西口雅子編 柏書房 1972年。本書は必携（購入のこと） ※国語辞典・古語辞典（持ち運びの出来る程度のものでよい）		
	学びの手立て 組踊を初めとする琉球・沖縄の芸能に数多くふれておいてほしい。講義の一環として組踊の舞台を見学する機会を設定するが、それ以外にもビデオやその他の媒体で沖縄の芸能に親しんでおいて欲しい。それと、変体仮名や漢字草書体になれない間にも習もなかなか難しいと思われるが、数多く触れることによって、新しい知見が得られるはずである。是非、困難に立ち向かって欲しい。		
	評価 本講義では、組踊テキストを読み、組踊語彙の語義を説明し、通釈・鑑賞することが出来ることを目指す。従って上記の作業が十分にできるようになったかを評価していく。評価の配点としてはレポート40点、平常点60点。レポートはテキスト「二山和睦」の翻字と語釈・通釈をまとめて提出する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 「南島文学特論ⅠA・ⅠB」、「南島文学特論ⅡA・ⅡB」、「南島方言学特論Ⅰ・Ⅱ」「南島言語文化特殊研究Ⅰ・Ⅱ」、「南島言語文化特論（集中講義）」等が関連科目である。
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島芸能特論Ⅱ	後期	木6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-波照間 永吉	1年	授業終了後に教室で受け付けます。	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	組踊テキストを原本コピーを用いて読んでいく。その上で、組踊詞章の発音、語彙の解釈、詞章全文の通釈・鑑賞が出来るようになることを目指す。そのためには変体仮名や漢字の草書体などがしっかりと読めるようになる必要がある。と同時に、琉球古典語についての知識も必要である。	変体仮名や漢字草書体を学ぶことは、新しい文字世界に入ることである。けっして難しいことではない。要は慣れであり、数多く文字にふれることである。また、組踊語をととして琉球語についての知識も学んでもらいたい。この講座の学習を通して琉球古典文学の世界を味わっていただきたい。
到達目標	この講座では琉球古典語による作品を読み、組踊という琉球古典芸能への知識を深めることを目指している。組踊はユネスコの世界無形文化遺産にも登録される琉球・沖縄の貴重な文化である。本講座はこのような文化への理解を深める糸口となるだろう。また、変体仮名・漢字草書体の読解能力を身に着けることは、大学院を修了して地域の古い文献の調査事業に従事するとき、必ずや有効な技術となる筈である。役に立つスキルを身につけて欲しい。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	2	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	3	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	4	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	5	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	6	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	7	組踊見学。	くずし字の翻字と語義の調べ
	8	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	9	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	10	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	11	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	12	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
	13	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ
14	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ	
15	組踊テキストの講読。	くずし字の翻字と語義の調べ	
16	予備日（補講日）	くずし字の翻字と語義の調べ	
テキスト・参考文献・資料など	<p>・「尚家組踊集」の中から「義臣物語」を取り上げる。テキストはコピーを準備する。</p> <p>・参考文献は次のとおり。『沖縄古語大辞典』沖縄古語辞典編集委員会 角川書店 1995年</p> <p>『沖縄語辞典』国立国語研究所 大蔵省印刷局 1963年『伊波普猷全集』（第3巻）伊波普猷 平凡社 1974年</p> <p>『近世古文書解読辞典』若尾俊平・浅見恵・西口雅子編 柏書房 1972年。本書は必携（購入のこと）</p> <p>※国語辞典・古語辞典（持ち運びの出来る程度のものでよい）</p>		
学びの手立て	<p>組踊を初めとする琉球・沖縄の芸能に数多くふれておいてほしい。講義の一環として組踊の舞台を見学する機会を設定するが、それ以外にもビデオやその他の媒体で沖縄の芸能に親しんでおいて欲しい。それと、変体仮名や漢字草書体になれない間は予習もなかなか難しいと思われるが、数多く触れることによって、新しい知見が得られるはずである。是非、困難に立ち向かって欲しい。</p>		
評価	<p>本講義では、組踊テキストを読み、組踊語彙の語義を説明し、通釈・鑑賞することが出来ることを目指す。従って上記の作業が十分にできるようになったかを評価していく。評価の配点としてはレポート40点、平常点60点。レポートはテキスト「義臣物語」の翻字と語釈・通釈をまとめて提出する。</p>		

学びの継続	次のステージ・関連科目
	「南島文学特論ⅠA・ⅠB」、「南島文学特論ⅡA・ⅡB」、「南島方言学特論Ⅰ・Ⅱ」「南島言語文化特殊研究Ⅰ・Ⅱ」、「南島言語文化特論（集中講義）」等が関連科目である。

※ポリシーとの関連性

1. 南島文化の専門的な知識を系統的に深めてその課題を見出し、解決に向けて対話的な指導を行う特殊研究科目の提供。

[/演習]

科目 基本 情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島言語文化特殊研究 I	通年	月 6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	狩俣 恵一	1年	karimata@okiu.ac.jp	

学 び の 準 備	ねらい	メッセージ
	沖縄の民俗芸能・古典芸能（宮廷芸能）・商業芸能（沖縄芝居）は、ジャンルは異なるものの密接な関係性があることを考慮し、琉球語及び琉球文で育まれた芸能について考える。	沖縄の祭り、御嶽、首里城等のグスクなどを見学して欲しい。

到達目標	沖縄の芸能を通して、琉球沖縄の風土・精神性について考えることができること。
------	---------------------------------------

学 び の 実 践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>第1回 神歌と踊り</p> <p>第2回 近代における沖縄の民俗芸能概説</p> <p>第3回～第8回 民俗芸能（村踊り）</p> <p>竹富島の種子取際、名護市屋部の八月踊り、多良間島の八月踊り、黒島の豊年祭、小浜島の結願祭、伊江島の村踊りなどのビデオ鑑賞を行いつつ、それぞれのムラにおける民俗芸能について考える。</p> <p>第9回 沖縄芝居の誕生</p> <p>第10回～第15回 雑踊り及び沖縄歌劇</p> <p>「泊阿嘉」「奥山の牡丹」「薬師堂」「伊江島ハンドー小」などの近代沖縄芸能について考える。</p> <p>第16回 全体のまとめ、レポート提出</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>テキスト：なし</p> <p>参考文献：矢野輝雄著『沖縄芸能史話』</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>沖縄の祭りと信仰、御嶽と首里城等の景観などについて調査し、芸能のあり方について考える。</p>
	<p>評価</p> <p>レポート・出席・発表内容</p>

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島言語文化特殊研究 I	通年	月 7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	西岡 敏	1年	研究室番号：5402 E-mail：nishioka@kiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 琉球列島で話されている琉球語諸方言の研究に取り組み、その構造を明らかにする。琉球語研究が琉球文学の読解に結びつくことにも注意をはらう。さらに、危機言語とされる琉球語の再生のために必要な試みについて考える。	メッセージ 院生は各人のテーマに従い、修士論文の枠組を構築する。担当教員は、適宜、修論指導を行う。なお、機会をみて、方言調査等のフィールドワークを行う予定である。
	到達目標 琉球語諸方言を調査・研究することができ、それを基盤として学术论文が書けるようになる。	

学びの準備	到達目標 琉球語諸方言を調査・研究することができ、それを基盤として学术论文が書けるようになる。
-------	--

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	琉球語諸方言の概説	レジュメの作成・準備
	2	琉球語諸方言の概説	レジュメの作成・準備
	3	琉球語諸方言の概説	レジュメの作成・準備
	4	琉球語諸方言の概説	レジュメの作成・準備
	5	琉球語諸方言の研究史	レジュメの作成・準備
	6	琉球語諸方言の研究史	レジュメの作成・準備
	7	琉球語諸方言の研究史	レジュメの作成・準備
	8	琉球語諸方言の研究史	レジュメの作成・準備
	9	琉球語諸方言と琉球文学	レジュメの作成・準備
	10	琉球語諸方言と琉球文学	レジュメの作成・準備
	11	琉球語諸方言と琉球文学	レジュメの作成・準備
	12	琉球語諸方言と琉球文学	レジュメの作成・準備
	13	危機言語とその再活性化	レジュメの作成・準備
	14	危機言語とその再活性化	レジュメの作成・準備
	15	危機言語とその再活性化	レジュメの作成・準備
	16	危機言語とその再活性化	レジュメの作成・準備
	17	方言調査のフィールドワーク	レジュメの作成・準備
	18	方言調査のフィールドワーク	レジュメの作成・準備
	19	方言調査のフィールドワーク	レジュメの作成・準備
	20	方言調査のフィールドワーク	レジュメの作成・準備
	21	フィールドワークのまとめ	レジュメの作成・準備
	22	フィールドワークのまとめ	レジュメの作成・準備
	23	フィールドワークのまとめ	レジュメの作成・準備
	24	フィールドワークのまとめ	レジュメの作成・準備
	25	琉球語諸方言についての研究発表および質疑応答	レジュメの作成・準備
	26	琉球語諸方言についての研究発表および質疑応答	レジュメの作成・準備
	27	琉球語諸方言についての研究発表および質疑応答	レジュメの作成・準備
	28	琉球語諸方言についての研究発表および質疑応答	レジュメの作成・準備
	29	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成・準備
30	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成・準備	
31	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成・準備	
		総括	

学 び の 実 践	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>『沖縄語辞典』（国立国語研究所[編]、1963年、財務省印刷局）。</p> <p>『沖縄古語大辞典』（沖縄古語大辞典編集委員会[編]、1995年、角川書店）。</p> <p>その他、適宜、指示する。</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>毎回、レジュメを作成、準備すること。</p>
	<p>評価</p> <p>研究レポートを提出する。</p> <p>出席はもちろんのこと、発表者側の発表内容、聴き手側の質問・コメント等、各自が行う授業への積極的な関わり方を評価する。</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>南島言語文化特殊研究Ⅱ、南島文学特論ⅡA、ⅡB。</p>

※ポリシーとの関連性

1. 南島文化の専門的な知識を系統的に深めてその課題を見出し、解決に向けて対話的な指導を行う特殊研究科目の提供。

[/演習]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島言語文化特殊研究Ⅱ	通年	月6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	狩俣 恵一	2年	karimata@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 沖縄の民俗芸能・古典芸能（宮廷芸能）・商業芸能（沖縄芝居）は、ジャンルは異なるものの密接な関係性があることを考慮し、琉球語及び琉球文で育まれた芸能について考える。	メッセージ 沖縄の祭り、御嶽、首里城等のグスクなどを見学して欲しい。
	到達目標 沖縄の芸能を通して、琉球沖縄の風土・精神性について考えることができること。	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>第1回 オモロと踊り 第2回 宮廷芸能（御冠船踊） 第3回 宮廷芸能の古典化 第4回～第11回 古典組踊詳論 「執心鐘入」「銘苺子」「孝行之巻」「女物狂」「万歳敵討」「花売りの縁」「手水の縁」などを鑑賞し、古典組踊の特質について考える。 第12回 村踊りの組踊 第13回 沖縄芝居と組踊 第14回～第15回 古典舞踊と雑踊り 第16回 全体のまとめ、レポート提出</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>テキスト：なし 参考文献：矢野輝雄著『組踊への招待』『組踊を聴く』</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>沖縄の祭りと信仰、御嶽と首里城等の景観などについて調査し、芸能のあり方について考える。</p>
	<p>評価</p> <p>レポート・出席・発表内容</p>

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島言語文化特殊研究Ⅱ	通年	月 7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	西岡 敏	2年	研究室番号：5402 E-mail：nishioka@kiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 琉球列島で話されている琉球語諸方言の研究に取り組み、その構造を明らかにする。琉球語研究が琉球文学の読解に結びつくことにも注意をはらう。さらに、危機言語とされる琉球語の再生のために必要な試みについて考える。	メッセージ Ⅱ（修士2年以上）院生は、修士論文の完成に向けて取り組む。担当教員は、適宜、修論指導を行う。なお、機会をみて、方言調査等のフィールドワークを行う予定である。
	到達目標 琉球語諸方言を調査・研究することができ、それを基盤として学术论文が書けるようになる。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	琉球語諸方言の概説	レジュメの準備、作成
	2	琉球語諸方言の概説	レジュメの準備、作成
	3	琉球語諸方言の研究史	レジュメの準備、作成
	4	琉球語諸方言の研究史	レジュメの作成、準備
	5	琉球語諸方言と琉球文学	レジュメの作成、準備
	6	琉球語諸方言と琉球文学	レジュメの作成、準備
	7	危機言語とその再活性化	レジュメの作成、準備
	8	危機言語とその再活性化	レジュメの作成、準備
	9	方言調査のフィールドワーク	レジュメの作成、準備
	10	方言調査のフィールドワーク	レジュメの作成、準備
	11	フィールドワークのまとめ	レジュメの作成、準備
	12	フィールドワークのまとめ	レジュメの作成、準備
	13	琉球語諸方言についての研究発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	14	琉球語諸方言についての研究発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	15	修士論文についての参考文献の整理	レジュメの作成、準備
	16	修士論文についての参考文献の整理	レジュメの作成、準備
	17	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	18	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	19	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	20	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	21	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	22	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	23	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	24	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	25	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	26	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	27	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	28	修士論文についての発表および質疑応答	レジュメの作成、準備
	29	修士論文についての発表および質疑応答	修士論文のまとめ
30	修士論文のまとめ	修士論文のまとめ	
31	修士論文の製本・提出		

学	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>『沖縄語辞典』（国立国語研究所[編]、1963年、財務省印刷局）。</p> <p>『沖縄古語大辞典』（沖縄古語大辞典編集委員会[編]、1995年、角川書店）。</p> <p>その他、適宜、指示する。</p>
び の 実 践	<p>学びの手立て</p> <p>毎回、レジュメを作成、準備すること。</p>
	<p>評価</p> <p>修士論文を提出する。 出席はもちろんのこと、発表者側の発表内容、聴き手側の質問・コメント等、各自が行う授業への積極的な関わり方を評価する。</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>修士論文中間発表会、修士論文最終発表会、学会での発表。</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島史学特論 I A	前期	火 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-豊見山 和行	1年		

学びの準備	ねらい	メッセージ
	主に1609年から1879年までの琉球史について、国内史における次の諸点の検証を通して琉球史像の再構成をねらいとする。第1は、琉球における百姓・職人・海人等の生業に関する基本史料（羽地仕置、諸間切法式帳、農務帳、御教条、等）の再検証。第2は、百姓の負担体系（年貢・夫遣い・所遣い）の歴史的変遷の検証。第3は、開墾（仕明）の歴史的發展について検証する。	身近な地域の歴史（史跡や旧跡）に関心をもつことによって、琉球史を実感をもって捉えることができると思います。博物館や資料館などで実物や原史料を目にすることで歴史認識がより深まります。積極的に歴史の現場に出向くことを推奨します。
到達目標	琉球史における基本的な歴史用語や概念を正確に認識すること、さらに諸史実の検証を通して受講生の歴史認識を深めることを目標とする。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	全体の導入。基本文献や基本史料の紹介と配布。	
	2	生業関係史料の検討1（受講生へ割り当て、読解・検証する）	
	3	生業関係史料の検討2（〃）	
	4	生業関係史料の検討3（〃）	
	5	生業関係史料の検討4（〃）	
	6	百姓の負担体系の検討1（〃）	
	7	百姓の負担体系の検討2（〃）	
	8	百姓の負担体系の検討3（〃）	
	9	百姓の負担体系の検討4（〃）	
	10	仕明地の検討1（〃）	
	11	仕明地の検討2（〃）	
	12	仕明地の検討3（〃）	
	13	仕明地の検討4（〃）	
14	関連テーマに関する受講生の報告レポートと討議1		
15	関連テーマに関する受講生の報告レポートと討議2		
16			
実践	テキスト・参考文献・資料など テキストおよび関連文献等は教員が用意し配布する。参考文献については適宜、紹介する。		
	学びの手立て 基本文献や参考論文を事前に読み込むことで、講義の内容を深く理解することができます。積極的に歴史書や論文を読解しましょう。		
	評価 毎回のわりあて担当の発表と報告レポートを総合して評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島史学特論ⅡA	前期	木5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-来間 泰男	1年	授業中に受け付けます。	

学びの準備	ねらい 原始から現代までの南島史=沖縄史を学びつつ、史料や論文を批判的に扱う方法を学ぶ。	メッセージ 既存の記述を鵜呑みにせず、常に批判的に考えよう。
	到達目標 原始から現代までの南島史=沖縄史を学ぶことによって、沖縄という社会のあり方や特質を理解し、現状の把握と、将来への展望を描くことができるようになる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	沖縄への人類の到来	
	2	旧石器時代・縄文時代	
	3	弥生・古代の日本／弥生～平安並行時代の沖縄	
	4	グスクと按司Ⅰ	
	5	グスクと按司Ⅱ	
	6	琉球王国の成立	
	7	琉球王国の「確立」	
	8	琉球王国成立後の海外交易の展開	
	9	琉球王国の苦悶	
	10	薩摩藩支配下の琉球王国—政治	
	11	薩摩藩支配下の琉球王国—社会	
	12	薩摩藩支配下の琉球王国—経済	
	13	幕末・維新の日本	
	14	琉球処分前後	
	15	旧慣存続期	
	16	テスト	
	テキスト・参考文献・資料など 特にない。		
	学びの手立て 関係図書を1冊でも多く精読し、並行して論文を書き続けること。		
	評価		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名 南島史学特論ⅡB	期別 後期	曜日・時限 木5	単位 2
	担当者 -来間 泰男	対象年次 1年	授業に関する問い合わせ	
			授業中に受け付けます。	

学びの準備	ねらい 原始から現代までの南島史=沖縄史を学びつつ、史料や論文を批判的に扱う方法を学ぶ。	メッセージ 既存の記述を鵜呑みにせず、常に批判的に考えよう。
	到達目標 原始から現代までの南島史=沖縄史を学ぶことによって、沖縄という社会のあり方や特質を理解し、現状の把握と、将来への展望を描くことができるようになる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	土地整理事業と杣山処分	
	2	ウェーキ=シカマ関係	
	3	日露戦争から第一次大戦へ	
	4	いわゆる「そてつ地獄」	
	5	沖縄県振興計画	
	6	準戦時期から戦時期へ	
	7	アメリカ軍の占領開始	
	8	アメリカ軍の占領支配の確定	
	9	1950年代の沖縄	
	10	政策の転換	
	11	1960年代の沖縄	
	12	日本復帰への道	
	13	日本復帰の諸問題	
	14	アメリカ軍基地をめぐる諸問題	
	15	経済・社会をめぐる諸問題	
	16	期末テスト	
	テキスト・参考文献・資料など 特にない。		
	学びの手立て 関係図書を1冊でも多く精読し、並行して論文を書き続けること。		
	評価		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島社会特論 I	前期	月 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-石原 昌家	1年	my-ishii@nirai.ne.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	現在の沖縄を南西諸島の島々からなる琉球弧という視点からとらえ、琉球国時代を経て、明治国家への併合から、米国の占領統治、さらには日本復帰という形で日本国家に組み込まれた歴史の変遷を平和学の視点で概略的にまずみていく。明治・大正・昭和戦前期の帝国日本による沖縄人観、軍事化の具体化と沖縄の伝統的平和志向との相克を経ながら、歴史的未曾有の沖縄戦の住民体験の意味を探る	戦後71年目が新たな戦前といわれ始めた今日、徴兵制度の施行も視野に入れて、温故知新、ふるきをたずね新しきを知ることが喫緊の課題である。少なくとも、大学図書館で、戦前・戦中・戦後70年にわたる新聞のそれぞれ一部だけでも触れ、時代の空気を疑似体感すべくタイムスリップして頂きたい。各市町村史の新聞資料編をひもとくのも便宜的だが、新聞の現物・コピーにふれてほしい。
到達目標	<p>常々受講生に述べていることは、あくまでもそれぞれの専門分野の修士論文を書くためのヒントになることを念頭に入れて授業を進めている。したがって、授業スタート時には、受講生各自の研究テーマを報告させ、講義の中でテーマに関連する部分では、資料提供の意味を込めて重点的に話していくことにもなる。それは他のテーマの受講生にとっても参考になっているだろう。この講義は多岐にわたる具体的内容の聴き取りと自分の体験をふまえてはなしていくので、他分野でそれぞれテーマが異なっている受講生にとっても、それぞれにインスパイアされているものと思っている。この講義の到達目標は、個々の研究テーマにもヒントが得られるような知識とともに、配付資料を通してそれぞれの生き方にも考えるヒントが含まれていると考えている。</p>	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	琉球国時代の平和思想①	配布資料読み込み
	2	琉球国時代の平和思想②	以下 同上
	3	昭和戦前期の平和思想	
	4	沖縄社会の軍事的地位①	
	5	沖縄社会の軍事的地位②	
	6	沖縄社会の軍事的地位③	
	7	軍部の沖縄人観①	
	8	軍部の沖縄人観②	
	9	軍部の沖縄人観③	
	10	戦中の歴史体験①	
	11	戦中の歴史体験②	
	12	戦中の歴史体験③	
	13	戦後の歴史体験①	
	14	戦後の歴史体験②	
15	戦後の歴史体験③		
16	まとめ		

テキスト・参考文献・資料など
 講義開始時に紹介する。さらに、毎回の講義時に資料を配布したり、参考文献を紹介していく。

学びの手立て
 配付資料が多いため、講義時間内では、つねに積み残しが増えている。可能な限り、時間外学習として通読することを期待。

評価
 講義中の意見。出席状況。レポート提出などによって評価。

学びの継続
 次のステージ・関連科目
 南島社会特論IIを受講していただきたい。また、講義内容に関連する学内外におけるシンポジウム、講演会などで講義内容との関連性を見出したりするなど、学びの継続を期待。

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島社会特論Ⅱ	後期	月5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-石原 昌家	1年	my-ishi@nirai.ne.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	現在の沖縄を南西諸島の島々からなる琉球弧という視点からとらえ、琉球国時代を経て、明治国家への併合から、米国の占領統治、さらには日本復帰という形で日本国家に組み込まれた歴史の変遷を平和学の視点で概略的にまずみていく。明治・大正・昭和戦前期の帝国日本による沖縄人観、軍事化の具体化と沖縄の伝統的平和志向との相克を経ながら、歴史的未曾有の沖縄戦の住民体験の意味を探る	戦後71年目が新たな戦前といわれ始めた今日、徴兵制度の施行も視野に入れて、温故知新、ふるきをたずね新しきを知ることが喫緊の課題である。少なくとも、大学図書館で、戦前・戦中・戦後70年にわたる新聞のそれぞれ一部だけでも触れ、時代の空気を疑似体感すべくタイムスリップして頂きたい。各市町村史の新聞資料編をひもとくのも便宜的だが、新聞の現物・コピーにふれてほしい。
到達目標	常々受講生に述べていることは、あくまでもそれぞれの専門分野の修士論文を書くためのヒントになることを念頭に入れて授業を進めている。したがって、授業スタート時には、受講生各自の研究テーマを報告させ、講義の中でテーマに関連する部分では、資料提供の意味を込めて重点的に話していくことにもなる。それは他のテーマの受講生にとっても参考になっているだろう。この講義は多岐にわたる具体的内容の聴き取りと自分の体験をふまえてはなしていくので、他分野でそれぞれテーマが異なっている受講生にとっても、それぞれにインスパイアされているものと思っている。この講義の到達目標は、個々の研究テーマにもヒントが得られるような知識とともに、配付資料を通してそれぞれの生き方にも考えるヒントが含まれていると考えている。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		時間外学習の内容
	回	テーマ	
	1	琉球国時代の平和思想①	配布資料読み込み
2	琉球国時代の平和思想②		以下 同上
3	昭和戦前期の平和思想		
4	沖縄社会の軍事的位置①		
5	沖縄社会の軍事的位置②		
6	沖縄社会の軍事的位置③		
7	軍部の沖縄人観①		
8	軍部の沖縄人観②		
9	軍部の沖縄人観③		
10	戦中の歴史体験①		
11	戦中の歴史体験②		
12	戦中の歴史体験③		
13	戦後の歴史体験①		
14	戦後の歴史体験②		
15	戦後の歴史体験③		
16	まとめ		
実践	テキスト・参考文献・資料など	講義開始時に紹介する。さらに、毎回の講義時に資料を配布したり、参考文献を紹介していく。	
	学びの手立て	配付資料が多いため、講義時間内では、つねに積み残しが増えている。可能な限り、時間外学習として通読することを期待。	
	評価	講義中の意見。出席状況。レポート提出などによって評価。	

学びの継続	次のステージ・関連科目
	南島社会特論Ⅱを受講していただきたい。また、講義内容に関連する学内外におけるシンポジウム、講演会などで講義内容との関連性を見出したりするなど、学びの継続を期待。

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島社会文化特殊研究 I	通年	木 6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	澤田 佳世	1年	k.sawada@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 本演習では、社会文化領域にて修士論文を執筆するための基盤づくりとして、社会科学における学術論文を執筆するための基礎的な作業方法を学びながら、①研究テーマの設定、②先行研究の整理・検討、③研究の目的・意義の検討、④調査研究方法の検討を行う。	メッセージ 自らの問題設定に基づいて、真摯に知的格闘に挑んでください。
	到達目標 前期は「研究テーマの設定」「先行研究の整理・検討」「研究の目的・意義の検討」を到達目標とする。後期は「参考文献リスト作成」「研究目的の再検討」「調査研究方法の決定」および「研究の進捗状況報告」を重ね、「修士論文の概要作成」を最終目標とする。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） 【前期】 ①応募時の研究計画書と卒業論文の知見を整理し、研究テーマを設定する。 ②先行研究をリストアップ、その内容・意義・課題を報告し、体系的に整理する。 ③先行研究の整理に基づいて、研究の目的・意義を検討する。 ④夏期休暇中の研究計画を提出する。 【後期】 ①夏期休暇中の研究計画の実施状況と研究成果を報告する。 ②先行研究の整理に基づいて、参考文献リストを作成し、研究目的を再検討する。 ③研究目的の達成に必要なデータ・資料を検討し、調査研究手法を決定する。 ④研究の進行状況を逐次報告する。 ⑤1年間の研究の進行状況をまとめ、修士論文の概要を作成する。 ⑥春期休暇中の研究計画を提出する。
	テキスト・参考文献・資料など 各自の研究テーマに応じて適宜紹介する。
	学びの手立て
	評価 修士論文作成過程、報告内容および討論への参加によって評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目 南島特殊研究Ⅱ（担当・澤田佳世）
-------	---------------------------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島社会文化特殊研究 I	通年	火 7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	鳥山 淳	1年		

学びの準備	ねらい 修士論文執筆に向けた準備段階として、学術論文を作成するための基礎的な作業方法を身に付ける。各受講者の研究テーマに沿って研究計画を作成し、具体的な調査および資料収集を進める。	メッセージ
	到達目標	

学びの準備	
-------	--

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 研究計画書を作成し、1年間の作業スケジュールを確認する。 ② テーマに関連する論文のリストアップし、その内容を把握する。 ③ テーマに適った調査および資料収集方法を考察する。 ④ 夏期休暇中の具体的な研究計画を作成する。 ⑤ 夏期休暇中の研究成果をまとめる。 ⑥ 研究の進捗状況と課題を把握し、論文構想の具体化を図る。 ⑦ 修士論文の章立て案を作成する。
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>必要に応じて指示する。</p>
	<p>学びの手立て</p>
	<p>評価</p> <p>報告内容および議論への参加によって評価する。</p>

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島社会文化特殊研究Ⅱ	通年	木6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	澤田 佳世	2年	k.sawada@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 本演習では、「特殊研究Ⅰ」における成果を引きつぎながら、設定した研究テーマについて、①研究史上での位置づけ・意義・独自性の確認、②論文全体構成の確定、③中間発表、④草稿の逐次提出と推敲を経て、修士論文を完成させる。	メッセージ 自らの問題設定に基づいて、真摯に知的格闘に挑んでください。
	到達目標 前期は「研究の先行研究上の位置づけと意義・独自性の確認」「全体構成の確定」「中間発表」「細部見直し・今後の課題確認」を到達目標とする。後期は「指導教員への各章の草稿提出」「コメントに基づく論文推敲」「査読教員への草稿提出」「コメントに基づく修正」を経て、「修士論文の完成」と「最終試験・口頭発表」を最終目標とする。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） 【前期】 ①春期休暇中の研究計画の実施状況と研究成果の報告 ②研究の研究史上での位置づけを再確認、その意義・独自性について報告 ③中間発表に向けて論文の全体構成を確定 ④中間発表での指摘をふまえ細部の見直し、今後の課題の確認 ⑤夏期休暇中の具体的な研究計画の作成 【後期】 ①夏期休暇中の研究計画の実施状況と研究成果の報告 ②論文の各章の草稿を逐次指導教員に提出、チェックを受ける ③指導教員からのコメントに基づいて論文を推敲 ④論文全体の草稿を作成、査読教員の助言を受け修正 ⑤完成論文の提出前に指導教員に提出、最終的なチェックを受けて本提出 ⑥完成論文の提出後、最終試験と発表会の準備を実施
	テキスト・参考文献・資料など 各自の研究テーマに応じて、適宜紹介する。
	学びの手立て
	評価 修士論文作成過程、報告内容および討論への参加、提出論文によって評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目 南島社会文化特殊研究Ⅰ（関連科目・澤田佳世担当）
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島社会文化特殊研究Ⅱ	通年	火7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	鳥山 淳	2年		

学びの準備	ねらい 前年度の研究成果を確認しながら修士論文の執筆に向けた取り組みを進め、報告を重ねながら論文として完成させる。	メッセージ
	到達目標	

学びの準備	
-------	--

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） ①前年度の取り組みをふまえて論文提出までの作業計画を作成する。 ②中間報告に向けて論文の構成を確定させる。 ③中間報告での指摘をふまえて細部の見直しを行い、夏期休暇中の課題を確認する。 ④夏期休暇中の成果をまとめ、論文執筆を進める。 ⑤指導教員のチェックを受けながら論文の完成度を高める。 ⑥下書き原稿を提出し、本提出に向けて手直しを行う。 ⑦本提出後、最終試験と発表会の準備を行う。
	テキスト・参考文献・資料など 必要に応じて指示する。
	学びの手立て
	評価 報告内容および提出論文によって評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島先史文化特殊研究 I	通年	土 2	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上原 静	1年	研究室5-417 E-mail sizuka@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 琉球列島に形成された先史、原史文化の諸要素を個々に取りあげ、周辺地域との交流がどの様に関与したかを考える。その際には隣接科学の多様な研究成果をも取り入れる。修士論文の作成に必要な専門語や基本的な考古学的思考法の概念について整理を行う。	メッセージ
	到達目標 研究史の理解、立論の合理性と適格性、実証の正確性を自己のものとする。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） 修士論文の作成に必要な専門語や基本的な考古学的思考法の概念について整理を行う。 第1週 講義の趣旨、進め方などのガイダンス 第2週～第7週 新石器文化に関する多様な研究報告を素材に講義 第8週～第15週 問題の背景説明 受講者による発表と討議
	テキスト・参考文献・資料など 講義時に提示する。
	学びの手立て 関連する様々学会、シンポジウムに積極的に参加すること。
	評価 各時限の報告（30%）、発言（20%）、レポートの内容（50%）によって評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目 関連科学の社会学、民俗（民族）学、心理学など、関連科学を広く学ぶ。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島先史文化特殊研究Ⅱ	通年	土2	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上原 静	2年	研究室5-417 E-mail sizuka@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 琉球列島に形成された先史、原史文化の諸要素を個々に取りあげ、周辺地域との交流がどの様に関与したかを考える。その際には隣接の科学の多様な研究成果をも取り入れることもする。	メッセージ
	到達目標 研究史の理解、立論の合理性と適格性、実証の正確性を自己のものとする。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス	
	2	修士論文のテーマ・課題の確定	
	3	修士論文の章立て確定	
	4	関係論文リストの作成1	
	5	関係論文リストの作成2	
	6	関係論文の購読1	
	7	関係論文の購読2	
	8	関係資料の分析1	
	9	関係資料の分析2	
	10	修士論文の中間報告 序章	
	11	修士論文の中間報告 第1章の内容	
	12	修士論文の中間報告 第1章の課題	
	13	修士論文の中間報告 第2章の内容	
	14	修士論文の中間報告 第2章の課題	
	15	修士論文の中間報告 第3章の内容	
	16	修士論文の中間報告 第3章の課題	
	17	修士論文の中間報告 第4章の内容	
	18	修士論文の中間報告 第4章の課題	
	19	修士論文の中間報告 第5章の内容	
	20	修士論文の中間報告 第5章の課題	
	21	修士論文の中間報告 結語の内容と課題	
	22	修士論文の中間報告 序章の再検討	
	23	修士論文の中間報告 第1章の再検討	
	24	修士論文の中間報告 第2章の再検討	
	25	修士論文の中間報告 第3章の再検討	
	26	修士論文の中間報告 第4章の再検討	
	27	修士論文の中間報告 第5章の再検討	
	28	修士論文の中間報告 結語の再検討	
	29	修士論文の中間報告 脚注などの吟味	
30	テーマの発展性について		
31	テスト		

学	<p>テキスト・参考文献・資料など 講義時に提示する。 随時、講義時に紹介する。</p>
び の 実 践	<p>学びの手立て 関連する様々学会、シンポジウムに積極的に参加すること。</p>
学 び の 継 続	<p>評価 レポートを提出し、授業における討議などを合わせて評価する。</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目 関連科学の社会学、民俗（民族）学、心理学など、関連科学を広く学ぶ。</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島先史文化特論 I	前期	水 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上原 静	1 年	研究室5-417 E-mail sizuka@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>琉球列島に展開した先史文化について講義を行う。旧石器時代については、アフリカの礫器文化から取りあげ、東進する伝播過程のなかで沖縄の石器文化を位置づけ紹介する。また、新石器時代についても、その編年的な大綱はできつつあるが、その系譜について幾つかの議論があることを取りあげる。さらに、旧・新石器時代、編年、文化など考古学用語における概念の形成過程について確認して</p> <p>到達目標 琉球列島の先史、原史文化の研究動向と、問題点を正確に認識した上で、広い視野から学界の進展に寄与しうる課題を発見し、その課題に関する研究論文を作成することができる。</p>	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む)</p> <p>修士論文の作成に必要な研究方法を習得し、他地域、他分野からの理解と知識を広げることを認識、実践してもらう。</p> <p>第1週 講義の趣旨、進め方などのガイダンス 第2週～第7週 旧石器文化の東進と沖縄 第8週～第15週 問題の背景説明 受講者による発表と討議</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>講義時に提示する。</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>関連する様々学会、シンポジウムに積極的に参加すること。</p>
	<p>評価</p> <p>各時限の報告 (30%)、発言 (20%)、レポートの内容 (50%) によって評価する。</p>

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島先史文化特論Ⅱ	後期	水6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上原 静	1年	研究室5-417 E-mail sizuka@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>琉球列島に展開した先史・原史文化について講義を行う。とくに新石器時代（縄文時代、弥生～平安並行時代）と原史時代（グスク時代）の編年的な大綱は提示されているが、その系譜や編年観について幾つかの議論があることを取りあげ講義を行う。</p>	
到達目標	正確な概念把握、立論の合理性と適格性、実証の正確性など科学的な表現を身につける。	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>修士論文の作成に必要な研究方法、また、他地域、他分野からの理解と知識を広げることを意識してもらう。</p> <p>第1週 講義の趣旨、進め方などのガイダンス 第2週～第7週 新石器文化や原史文化の系譜とその地域的展開 第8週～第15週 問題の背景説明 受講者による発表と討議</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>適宜指示する。</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>関連する様々学会、シンポジウムに積極的に参加すること。</p>
	<p>評価</p> <p>各時限の報告（30%）、発言（20%）、レポートの内容（50%）によって評価する。</p>

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>人間の社会文化に関わる科学をできるだ受講する。</p>
-------	---

※ポリシーとの関連性

専門職業人として社会貢献できる能力を習得させるための専門的な知識と実践的な経験に基づく資格科目の提供。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島地理学特論 I	前期	木 7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	小川 護	1年	メールでお願いします。 ogawa@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	人文地理学の基礎的な調査方法について学習し、実際の島嶼地域におけるフィールド実習を実施する中で、実践的な調査の企画・設計、調査結果の分析、集計を経験し、自ら調査できる技術習得を目指す。今年度の実習地域としては、次年度に引き続き、沖縄県国頭村を研究対象地域としてとりあげ、そこにおける人々の生業と社会組織、地域経済の振興についての地域調査を予定している。	地理的なものの見方、考え方を取得するように心がけてください。
到達目標	地理的な調査手法、分析、地理情報システム(GIS)の扱い方をマスターしてもらう。	

学びの実践	学びのヒント	授業計画	
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	人文地理学調査入門 地理学調査とは	配布プリントの復習
	2	調査倫理と調査企画・設計(1)	配布プリントの復習
	3	調査企画・設計(2)、仮設構成	配布プリントの復習
	4	調査票の作成(1)	配布プリントの復習
	5	調査票の作成(2)	配布プリントの復習
	6	国頭村の地域調査(1) サンプリング、フィールドの選定の実際	配布プリントの復習
	7	国頭村の地域調査(2) 実査(1)	調査準備
	8	国頭村の地域調査(2) 実査(2)	調査準備
	9	地域調査結果データの整理(1) (エディティング、コーディング)	調査データの整理
	10	地域調査結果データの整理(2) (データクリーニング、フィールドノート作成、コードブック作成)	調査データの整理
	11	地域調査結果データの整理(3) (量的分析とグラフ作成)	調査データの整理
	12	地域調査結果データの整理と質的な分析	調査データの整理
	13	報告書作成と地域調査報告会準備 (1)	レポート執筆
	14	報告書作成と地域調査報告会準備 (2)	レポート執筆
15	地域調査報告会	報告会	
16	全体のまとめ		
	テキスト・参考文献・資料など	浮田典良『ジオ・パル21 地理学便利帳』海青社、2001年。後藤真太郎・谷 謙二他『新版 MANDARAとEXCELによる市民のためのGIS講座ーフリーソフトでここまで地図化できるー』古今書院 2007年。谷 謙二『フリーGISソフトMANDARAパーフェクトマスター』古今書院 2011年。授業の中でその都度紹介する。	
	学びの手立て	積み上げ式の授業なので、休まないようにしてください。	
	評価	提出物(論文・レポートなど)と出席状況で総合的に判断する。	

学びの継続	次のステージ・関連科目 南島地理学特論 II
-------	---------------------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島地理学特論Ⅱ	後期	木7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	小川 護	1年	メールでお願いします。 ogawa@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 南島地理学Ⅱでは、南島地理学Ⅰを基本として、地理情報システムのしくみとその操作方法について学習する。最終的には、各種分布図が独力で作業できるようになることを目標としている。使用ソフトは「MANDARA」、「カシミール」、「地図太郎」など。	メッセージ 地理的なものの見方、考え方を習得するように心がけてください。
	到達目標 地理情報システム(GIS)の基本習得を目指す。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	地理情報システムとは①カシミール活用法	プリントによる復習
	2	地理情報システムとは②カシミール活用法	プリントによる復習
	3	MANDARAの特色と地図データーさまざまな地図の紹介ー	プリントによる復習
	4	MANDARAで地図をつくろう①階級区分図をつくる	プリントによる復習
	5	MANDARAで地図をつくろう②階級区分を考える	プリントによる復習
	6	コンビニエンスストアの分布図ー競合店の多いコンビニを探すー	プリントによる復習
	7	東京都の地価分布図の作成ー国土数値情報の地価公示データの利用ー	プリントによる復習
	8	東京都八王子市の土地利用の変化ー国土数値情報の土地利用メッシュデータの利用ー	プリントによる復習
	9	水質調査マップの作成	プリントによる復習
	10	ヒートアイランドに及ぼす環境パラメータの評価	プリントによる復習
	11	測地系と座標変換について	プリントによる復習
	12	緯度経度の取得方法、政府統計の活用窓口の利用	プリントによる復習
	13	白地図画像の地図データ化、地図太郎の利用①	プリントによる復習
	14	地図太郎の利用②	プリントによる復習
15	地図太郎の利用③	プリントによる復習	
16	まとめ	レポート作成	
	テキスト・参考文献・資料など 毎回、プリントを配布する。 MANDARAとEXCELによる市民のためのGIS入門、谷謙二、古今書院 地図太郎、カシミールソフトの各操作マニュアル		
	学びの手立て 積み上げ式の授業なので、休まないようにしてください。毎回授業で習ったGIS操作方法は必ずPC教室で復習すること。		
	評価 授業の出席率、課題の提出状況によって総合的に判断する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 南島地理学特論Ⅰ
-------	-------------------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島文学特論 I A	前期	火 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	狩俣 恵一	1年	karimata@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 南島の祈願詞・説話・歌謡・芸能について総合的に考え、修士論文執筆に活用する。	メッセージ 奄美・沖縄・宮古・八重山の祭りの由来伝承や芸能を中心に、民俗学的見地から総合的な研究力を養う。
	到達目標 修士論文執筆に向けての総合力を養う。	

学びの準備	到達目標 修士論文執筆に向けての総合力を養う。
-------	----------------------------

学びの実践	学びのヒント 授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む) 第1回 南島言語文化と民俗学 第2回 王府祭祀と伝承 第3回 村落祭祀と由来伝承 第4回 民間祭祀とユタ 第5回～第9回 呪言と歌謡の伝承 第10回～第15回 神話・伝説・昔話・世間話の伝承 第16回 総括とレポート提出
	テキスト・参考文献・資料など テキスト：なし 参考文献：その都度指示する。
	学びの手立て 王府祭祀と村落祭祀に関わる暦・陰陽五行・風水等について学ぶこと。
	評価 レポート

学びの継続	次のステージ・関連科目 修士論文
-------	---------------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島文学特論 I B	後期	火 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	狩俣 恵一	1年	karimata@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 南島の祈願詞・説話・歌謡・芸能について総合的に考え、修士論文執筆に活用する。	メッセージ 奄美・沖縄・宮古・八重山の祭りの由来伝承や芸能を中心に、民俗学的見地から総合的な研究力を養う。
	到達目標 修士論文執筆に向けての総合力を養う。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む) 第1回 王府の儀礼と村落祭祀の儀礼 第2回～5回 説話と歌謡 第6回～8回 説話と琉歌 第9回～15回 説話と組踊 第16回 総括とレポート提出
	テキスト・参考文献・資料など テキスト：なし 参考文献：その都度指示する。
	学びの手立て 王府祭祀と村落祭祀に関わる暦・陰陽五行・風水等について学ぶこと。
	評価 レポート

学びの継続	次のステージ・関連科目 修士論文
-------	---------------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島文学特論ⅡA	前期	月4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	西岡 敏	1年	研究室番号：5402 E-mail：nishioka@kiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 琉球語圏の会話や民話などに出てくる単語を分析・整理し、琉球語の表現について考察してゆく。また、会話や民話などに出てくる単語を索引化することも視野に入れる。	メッセージ 琉球語諸方言が日常的に使用されなくなり、それら言葉の記録と再活性化が急務となっている。この授業では、これまでに記録されたテキストを言語学的に分析して、琉球語に対する知識を深めるとともに、実際に会話や民話の語りなどを再現して、琉球語の再活性化に向けた糸口とする。
	到達目標 琉球語諸方言を分析して正確に理解でき、琉球文学として鑑賞できるようになる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション：琉球語テキストの選択	レジュメ（エクセル）の準備
	2	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	3	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	4	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	5	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	6	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	7	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	8	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	9	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	10	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	11	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	12	琉球語テキストの文法解析	レジュメ（エクセル）の準備
	13	琉球語テキストの文法解析	再現するための原稿の準備
	14	琉球語テキストの再現	再現するための原稿の準備
	15	琉球語テキストの再現	完成レポート、作品の提出
	16	予備日	
	テキスト・参考文献・資料など 『沖縄語辞典』（国立国語研究所[編]、1963年、財務省印刷局）。 そのほか、授業で適宜指示する。		
	学びの手立て 適当な会話集や民話集を選ぶ。各担当者で方言テキストを文節ないしは単語に区切ってエクセルの表に入れ、単語表を作成する。活用語には活用形を入れる欄を設けるなど、表には工夫を施す。これらの作業は各担当者が授業を受けるまでに準備しておく。実際の授業では、各担当者ごとに発表を行い、語の区切り方が正しいか、文法的分析が正しいかなどをチェックする。各担当者は、授業で検討した事項を復習し、単語表を修正する。以上の過程を繰り返し、方言テキストの索引を完成させる。文法解析、意味分析が一通り済み、全体の流れを把握した段階で、できれば会話や民話の語りなどを再現し、ビデオ撮影により記録する。記録したものには字幕を付ける。		
	評価 ①出席はもちろんのこと、発表者側の発表内容、聴き手側の質問・コメント等、各自が行なう授業への積極的な関わり方を評価する。 ②学期末に索引（データ）、方言による会話や語り（映像資料・字幕付）などを提出する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 南島文学特論ⅡB、南島言語文化特殊研究Ⅰ・Ⅱ。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島文学特論ⅡB	後期	月4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	西岡 敏	1年	研究室番号：5402 E-mail：nishioka@kiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	民話を題材にした琉球方言によるデジタル紙芝居に取り組む。琉球方言による音声とデジタル紙芝居の画像に字幕を付け、作品に仕上げ、DVD等に焼き付ける。各自が民話の中のキャストとなり、琉球方言で演じる。琉球語の世界に近づき、琉球語で表現する行為を考えてゆく。	最近では、パソコンのレベルでも、パワーポイントやフラッシュなどのソフトウェアで簡単な映像を作ることが可能になっている。それらの技術と琉球語諸方言を組み合わせることによって、汎用性のある言語作品（言語教材）を作っていくことができる。
到達目標	琉球語諸方言を一つの言語として表現でき、言語作品を構築することができる。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	再現民話の検討	再現したい民話を探す
2	再現民話の選択	翻訳の方言話者を探す	
3	琉球語への翻訳—台本作成—	翻訳台本の整理	
4	琉球語への翻訳—台本作成—	翻訳台本の整理	
5	翻訳台本の分析	翻訳台本の完成	
6	翻訳台本の分析	方言話者の発音を録音（お手本）	
7	翻訳台本の読み合わせ	方言セリフの発音練習	
8	翻訳台本の読み合わせ	方言セリフの発音練習	
9	配役の決定	方言セリフの発音練習	
10	デジタル紙芝居の絵の作成	方言セリフの発音練習・絵の作成	
11	デジタル紙芝居の絵の作成	方言セリフの発音練習・絵の作成	
12	スタジオ録音	録音テイクの選択	
13	スタジオ録音	録音テイクの選択・編集作業	
14	デジタル紙芝居の編集	編集作業	
15	デジタル紙芝居の編集	編集作業	
16	デジタル紙芝居の完成	関係先へ配布	
テキスト・参考文献・資料など	適宜指示する。過去の作品例として宮古語による「豊見氏親め大鯖魚退治」がある（日本語・英語字幕付）。		
学びの手立て	<p>①ある民話の共通語による台本を用意する。その民話が語られた地域の琉球方言に翻訳する（流暢な方言話者をお願いする）。翻訳された琉球方言の台本を分析し、ことばとして十分に理解する。</p> <p>②方言台本の読み合わせを行う（発音練習）。方言台本の配役を決める。デジタル紙芝居の構成・割付を考える。</p> <p>③スタジオで録音を行う。民話シーンの絵を描き、パソコンへ取り込む。</p> <p>④パソコン上で、方言による録音と民話シーンの絵をマッチングさせる。</p> <p>⑤作品完成。試写検討会を行なう。修正版を作成し、提出・配布する。</p>		
評価	前期「南島文学特論ⅡA」と同じ。完成した作品を提出する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 南島文学特論ⅡA（受講済）、南島言語文化特殊研究Ⅰ・Ⅱ。
-------	---

※ポリシーとの関連性

言語文化領域の基礎科目であり、琉球文学とも関連する。言葉は文化の基層をなすものであり、他の文化領域にも広く関わる。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島方言学特論 I	前期	金 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-野原 優一	1年	授業終了後、E-mail、携帯電話、いずれでも可	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>・音声学を学び、IPA（国際音声記号）表記ができるようになる。このことによって、琉球語に関する学術的文献等に記された方言の音声表記を正しく理解できるようになる。・音韻論について学び、日本語（共通語）と大きく異なる琉球諸語の特徴点について知識を深める。・琉球諸語の語彙について、言語地理学的分布を通して、ことばの地域差を広く理解する。</p>	<p>・音声のしくみなどを学びながら、IPA簡略表記ができるようになります。琉球諸語には、さまざまな音声の特徴をもつもの多く、言語に関する学術的論文などにはIPA表記が多く利用されています。これらの文献を正しく理解するためにもIPAの習得が望まれます。</p>
到達目標	<p>①琉球語に関するIPA表記が正しく読み書きできる。 ②琉球語の音声・音韻の特徴について、その知識が広く深められている。 ③琉球語と日本語、および琉球語の音韻変遷について理解を深める。 ④言語地理学の分布を通して、狭い地形ながら言葉の地域差や変化の多様さの富むことについて認識を深める。</p>	

学びの実践	学びのヒント																																																				
	授業計画																																																				
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>回</th> <th>テーマ</th> <th>時間外学習の内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>1</td> <td>ガイダンス</td> <td></td> </tr> <tr> <td>2</td> <td>日本語の区分と琉球語（琉球方言）</td> <td>『沖縄の言語史』を読む</td> </tr> <tr> <td>3</td> <td>日本祖語、原琉球語の分岐、言語年代学、言語地理学（分布図）</td> <td>自由課題</td> </tr> <tr> <td>4</td> <td>音声学とIPA ①</td> <td>『日本語の表現と構造』を読む</td> </tr> <tr> <td>5</td> <td>音声学とIPA ②</td> <td>自由課題</td> </tr> <tr> <td>6</td> <td>音声学とIPA ③</td> <td>『レッツトライうちな〜口』を読む</td> </tr> <tr> <td>7</td> <td>琉球語のモーラ（那覇方言、今帰仁方言）</td> <td>自由課題</td> </tr> <tr> <td>8</td> <td>琉球語の音韻 ①</td> <td>『琉球方言音韻の研究』を読む</td> </tr> <tr> <td>9</td> <td>琉球語の音韻 ②</td> <td>自由課題</td> </tr> <tr> <td>10</td> <td>琉球語の音韻 ③</td> <td>各自の課題、テーマ決定、資料収集</td> </tr> <tr> <td>11</td> <td>琉球語の音韻 ④</td> <td>課題取り組み</td> </tr> <tr> <td>12</td> <td>琉球語の音韻 ⑤</td> <td>課題取り組み</td> </tr> <tr> <td>13</td> <td>琉球の語彙と言語地図 ①</td> <td>『図説琉球語辞典』を読む</td> </tr> <tr> <td>14</td> <td>琉球の語彙と言語地図 ②</td> <td>課題取り組み</td> </tr> <tr> <td>15</td> <td>琉球の語彙と言語地図 ③</td> <td>課題取り組み</td> </tr> <tr> <td>16</td> <td>課題発表</td> <td>発表・レポート提出</td> </tr> </tbody> </table>	回	テーマ	時間外学習の内容	1	ガイダンス		2	日本語の区分と琉球語（琉球方言）	『沖縄の言語史』を読む	3	日本祖語、原琉球語の分岐、言語年代学、言語地理学（分布図）	自由課題	4	音声学とIPA ①	『日本語の表現と構造』を読む	5	音声学とIPA ②	自由課題	6	音声学とIPA ③	『レッツトライうちな〜口』を読む	7	琉球語のモーラ（那覇方言、今帰仁方言）	自由課題	8	琉球語の音韻 ①	『琉球方言音韻の研究』を読む	9	琉球語の音韻 ②	自由課題	10	琉球語の音韻 ③	各自の課題、テーマ決定、資料収集	11	琉球語の音韻 ④	課題取り組み	12	琉球語の音韻 ⑤	課題取り組み	13	琉球の語彙と言語地図 ①	『図説琉球語辞典』を読む	14	琉球の語彙と言語地図 ②	課題取り組み	15	琉球の語彙と言語地図 ③	課題取り組み	16	課題発表	発表・レポート提出	
	回	テーマ	時間外学習の内容																																																		
1	ガイダンス																																																				
2	日本語の区分と琉球語（琉球方言）	『沖縄の言語史』を読む																																																			
3	日本祖語、原琉球語の分岐、言語年代学、言語地理学（分布図）	自由課題																																																			
4	音声学とIPA ①	『日本語の表現と構造』を読む																																																			
5	音声学とIPA ②	自由課題																																																			
6	音声学とIPA ③	『レッツトライうちな〜口』を読む																																																			
7	琉球語のモーラ（那覇方言、今帰仁方言）	自由課題																																																			
8	琉球語の音韻 ①	『琉球方言音韻の研究』を読む																																																			
9	琉球語の音韻 ②	自由課題																																																			
10	琉球語の音韻 ③	各自の課題、テーマ決定、資料収集																																																			
11	琉球語の音韻 ④	課題取り組み																																																			
12	琉球語の音韻 ⑤	課題取り組み																																																			
13	琉球の語彙と言語地図 ①	『図説琉球語辞典』を読む																																																			
14	琉球の語彙と言語地図 ②	課題取り組み																																																			
15	琉球の語彙と言語地図 ③	課題取り組み																																																			
16	課題発表	発表・レポート提出																																																			
テキスト・参考文献・資料など	<p>・適宜資料を提示する。 ・参考文献：①『日本語音声学入門』 斎藤純男 三省堂 ②『琉球方言音韻の研究』 中本正智 法政大学出版局 ③『日本語教師のための言語学入門』 小泉 保 大修館書店</p>																																																				
学びの手立て	<p>・やむを得ず遅刻・欠席する場合は、事前に連絡すること。 ・課せられたことは充分果たすよう努めること。 ・電子辞書を利用することがあるので持参のこと。</p>																																																				
評価	<p>平常点30%、 課題実践10%、 レポート60%</p>																																																				

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>学んだ知識を、言語研究に活かしていく。また、琉球文学の古謡・おもろ・琉歌・琉球歌劇などのなかで更に深めていく。</p>
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島方言学特論Ⅱ	後期	金 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-野原 優一	1年	授業終了後、E-mail、携帯電話、いずれでも可	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>・琉球語の文法について学ぶ。沖縄方言の動詞の活用、形容詞の活用、助詞、助動詞について、先行文献から学ぶ。また、フィールドワーク形式で、所定の地域の動詞の活用についてインフォーマントから調査を行う。</p> <p>・琉球諸語の語彙について、言語地理学的分布を通して、地域差を見ていく。</p>	<p>琉球語の動詞の成り立ちは、共通語と全く異なる。その「うちなーぐち」の動詞の活用はどのようなものであるか。また、形容詞や助動詞の活用はどうかについて学ぶ。複雑な変化を見せるものの、そこに見られるルールをつかみたい。</p>
到達目標	琉球語の用言、付属語などについて、その成り立ちや語形変化がよく理解できている。助詞に関しても、共通語と異なる意味用法などがあることを特徴的なふるまいを認識できる。また語彙に関しては、日本語との関連などもふまえて認識している。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス、前期の総括	
	2	沖縄語の動詞（その成り立ちと活用） ①	『琉球方言文法の研究』を読む
	3	沖縄語の動詞の活用 ②	自由課題
	4	沖縄語の動詞の活用 ③	自由課題
	5	沖縄語の形容詞 ①	『沖縄語の入門』を読む
	6	沖縄語の形容詞 ②	自由課題
	7	沖縄語の助動詞	自由課題
8	那覇方言の助詞 ①	『新編琉球方言助詞の研究』を読む	
9	那覇方言の助詞 ②	自由課題	
10	那覇方言の接尾辞	各自の課題、テーマ決定、資料収集	
11	琉球語の語彙と言語地図 ①	『図説琉球語辞典』を読む	
12	琉球語の語彙と言語地図 ②	課題取り組み	
13	琉球語の語彙と言語地図 ③	課題取り組み	
14	方言調査 ①	課題取り組み	
15	方言調査 ②	課題取り組み	
16	課題発表	発表・レポート提出	
テキスト・参考文献・資料など	<p>・適宜資料を提示する。</p> <p>・参考文献：①『琉球方言文法の研究』 内間直仁 笠間書院 ②『新編琉球方言助詞の研究』 野原三義</p> <p>③『図説琉球語辞典』 中本正智 金鶏社</p>		
学びの手立て	<p>・やむを得ず遅刻・欠席する場合は、事前に連絡すること。</p> <p>・課せられたことは充分果たすよう努めること。</p> <p>・電子辞書を利用することがあるので持参のこと。</p>		
評価	平常点30%、 課題実践10%、 レポート60%		

学びの継続	次のステージ・関連科目
	学んだ知識を、言語研究に活かしていく。また、琉球文学の古謡・おもろ・琉歌・琉球歌劇などのなかで更に深めていく。

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島民俗宗教特論 I	前期	月 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-稲福 みき子	1年	minafuku@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 南島の民俗研究のなかで、民俗宗教に関する研究の蓄積はきわめて豊富である。伊波普猷・柳田國男・折口信夫をはじめとする先学の成果を通時的に追いつつ、南島民俗宗教の概要の把握に努める。先学の多様な研究の成果から各自の課題設定の手がかりや方法の検討に資する。	メッセージ 沖縄の民俗宗教研究において重要な役割を果たした諸先達を取り上げ、学問的方法、研究内容を時代的な背景を考慮しながら追い、その代表的な論文に触れる。そうした作業を通じて沖縄民俗宗教研究のエッセンスへ接近する。
	到達目標 南島の民俗宗教に関する基礎的な事項を学び、それぞれが今後取り組むべき研究課題へのアプローチおよび研究論文の読解法を習得する。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画	
	回	テーマ
	1	沖縄民俗研究の展開(1)：近世から明治期の沖縄民俗研究の萌芽
	2	沖縄民俗研究の展開(2)：大正期・昭和期の研究の組織化と進展
	3	竹田且「沖縄民俗の地位」を読む：民俗学と沖縄研究
	4	柳田国男と沖縄研究：柳田の沖縄研究への視点と方法
	5	折口信夫と沖縄研究：「沖縄の宗教」にみる視点と方法の特質
	6	伊波普猷と沖縄研究：「をなり神の島」にみる視点と方法
	7	佐喜真興英と沖縄研究：「シマの話」「霊の島々」にみる視点と方法
	8	比嘉春潮の沖縄研究：「翁長旧事談」にみる村落誌
	9	柳宗悦の沖縄研究：「方言論争」のかたるもの
	10	外国人による沖縄研究：戦前・戦後の外国人研究者の視点と方法
	11	W. リブラと沖縄研究：『沖縄の宗教と社会構造』にみる視点と方法
	12	馬淵東一と沖縄研究：オナリ神研究の展開と世界観研究の進展
	13	宮城栄昌の沖縄研究：『のろ調査資料』の展開
	14	竹田且の沖縄研究：祖先祭祀・比較民俗学の展開
	15	比嘉政夫の沖縄研究：祖先祭祀と親族組織研究の展開
	16	総括
	テキスト・参考文献・資料など 初回の講義で研究史を紹介し、その上で課題文献を提示する。	
	学びの手立て あらかじめ配布される資料、論文を丹念に読んで参加すること。	
	評価 議論への取り組みと内容。	

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島民俗宗教特論Ⅱ	後期	月6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-稲福 みき子	1年	minafuku@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	南島の民俗研究のなかで、民俗宗教に関する研究の蓄積はきわめて豊富である。このⅡでは近年の研究動向を踏まえ、祭祀儀礼や祭祀組織世界観、シャーマニズムなどのテーマを取り上げ、周辺地域を視野に入れた比較考察を目指す。	1から2週で沖縄の民俗文化・社会の理解の枠組みを取り上げたいえで、民俗社会の組み立て、村落、家族・親族の仕組みを理解し、社会諸制度の理解のもとで祭祀儀礼・祭祀組織・祭祀者、シャーマニズム、他界観などへの理解を深める。
到達目標	南島の民俗宗教に関する基礎的な事項を学び、それぞれが今後取り組むべき研究課題へのアプローチおよび研究論文の読解法を習得する。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	沖縄民俗文化・社会の理解のために(1):馬淵論文「沖縄文化論叢・解説」を読む	
	2	沖縄民俗文化・社会の理解のために(2):馬淵論文を読む	
	3	近年の沖縄研究の展開概要:1970年代以降を中心に	
	4	村落の仕組みと変容	
	5	家族の構造	
	6	親族組織:門中とウェーカ	
	7	祖先祭祀	
	8	村落祭祀(1):聖地と信仰	
	9	村落祭祀(2):年中行事	
	10	祭祀組織(1):ノロ制度	
	11	祭祀組織(2):カミンチュ組織	
	12	シャーマニズム(1):ユタをめぐる歴史	
	13	シャーマニズム(2):地域社会とユタ	
14	シャーマニズム(3):東アジアとシャーマニズム		
15	民俗宗教の変容		
16	総括		
実践	テキスト・参考文献・資料など 初回の講義で基礎となる論文を紹介し、その上でフィールドワークのデータを用いつつ、講義と演習形式を併用しつつ進める。		
	学びの手立て あらかじめ配布される資料、論文を丹念に読んで参加すること。		
	評価 議論への取り組みと内容。		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島民俗特論 I	前期	金 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-赤嶺 政信	1年	makamine@11.u-ryukyu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	本講義では、民俗学の視点からみた南島（沖縄）の社会と文化に関する諸課題についてとりあげ、講義を行います。最初に民俗学の方法論や日本民俗学の学史における沖縄の位置付けについて概説を行ったうえで、沖縄の民俗研究で論点となっている具体的な課題についてとりあげていきます。琉球国という国家体制が民俗の形成や変容等に及ぼした影響についても、受講生の注意を喚起します。	①沖縄の民俗文化について関心があり、それを学ぶ意欲のある学生の受講を歓迎します。 ②沖縄の祭祀を中心にした映像資料を積極的に活用します。 ③日帰りの久高島巡見を実施します。 ④沖縄における民俗研究と歴史研究の接点について注意を向けます。
到達目標	①民俗学の方法論や日本民俗学の学史における沖縄の位置付けについて理解できるようになること。 ②沖縄の民俗研究において論点となっているいくつかの課題について理解できるようになること。 ③琉球国という国家体制が民俗事象に及ぼした影響について理解できるようになること。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス	
2	日本民俗学の方法論		
3	柳田国男の民俗学と沖縄		
4	沖縄における祖先祭祀の成立		
5	久高島の祭祀（映像鑑賞）		
6	久高島巡見		
7	国家祭祀としての久高島のイザイホウ		
8	沖縄の神女組織		
9	沖縄の門中		
10	沖縄の津波に関する伝承		
11	八重山黒島の豊年祭		
12	村の掟と制裁		
13	沖縄の霊魂観と他界観		
14	仮面と来訪神		
15	海をめぐる民俗文化		
16	まとめ		
テキスト・参考文献・資料など	赤嶺政信『シマの見る夢ーおきなわ民俗学散歩ー』ボーダーインク		
学びの手立て	講義内容と関係する文献を適宜紹介して、理解の深化を促す。		
評価	出席率、課題レポート、受講態度によって評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島民俗特論Ⅱ	後期	金 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-赤嶺 政信	1年	makamine@11.u-ryukyu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	本講義では、民俗学の視点からみた南島（沖縄）の社会と文化に関わる諸課題についてとりあげ、講義を行います。最初に民俗学の方法論や日本民俗学の学史における沖縄の位置付けについて概説を行ったうえで、沖縄の民俗研究で論点となっている具体的な課題についてとりあげていきます。琉球国という国家体制が民俗の形成や変容等に及ぼした影響についても、受講生の注意を喚起します。	①沖縄の民俗文化について関心があり、それを学ぶ意欲のある学生の受講を歓迎します。 ②沖縄の祭祀を中心にした映像資料を積極的に活用します。 ③日帰りの久高島巡見を実施します。 ④沖縄における民俗研究と歴史研究の接点について注意を向けます。
到達目標	①民俗学の方法論や日本民俗学の学史における沖縄の位置付けについて理解できるようになること。 ②沖縄の民俗研究において論点となっているいくつかの課題について理解できるようになること。 ③琉球国という国家体制が民俗事象に及ぼした影響について理解できるようになること。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス	
2	民俗学の方法論－トウハシリを事例に－		
3	女性とケガレ		
4	民家等に見られる沖縄の世界観		
5	沖縄における祖先観の変遷－盆行事をめぐって－		
6	呪いの民俗		
7	久高島巡見		
8	ジェンダー的視点からみた沖縄の社会と文化		
9	鬼餅・正月行事の背景		
10	王権にまなざされた島－久高島－		
11	キジムナー伝説の諸相		
12	建築儀礼に見える自然観		
13	地割制社会における家－久高島の事例を通して－		
14	沖縄の婚姻習俗をめぐって		
15	沖縄の死生観		
16	まとめ		
テキスト・参考文献・資料など	赤嶺政信『シマの見る夢－おきなわ民俗学散歩－』ボーダーインク		
学びの手立て	講義内容と関係する文献を適宜紹介して、理解の深化を促す。		
評価	出席率、課題レポート、受講態度によって評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 出席率、課題レポート、受講態度によって評価する。
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島民俗文化特殊研究 I	通年	木 6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	石垣 直	1年	nishigaki@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>本ゼミの主眼は、南島民俗の研究史を概観して主要文献を精読し、「南島民俗文化」を研究するための基礎知識を身に着けることにあ る。こうした作業を通じて、各受講生の問題意識を深め、研究主題 と方法の確立をめざす。また、年度後半には翌年度の修士論文執筆 に向けた論文構想・構成についても講義し議論を深める。</p>	<p>論文執筆は決して容易な作業ではない。しかし、基礎知識の学習、 先行研究の読解、論文構想・構成、調査・データ収集、考察・分析 という系統的なプロセスを学ぶことは、各自の研究活動のみならず 、社会・文化を理解し行動する姿勢においても、極めて意義深いも のである。「南島民俗文化」の理解を、いかに発展させるかを常に 意識した学びを实践してほしい。</p>
到達目標	<p>本ゼミの到達目標は、「南島民俗文化」研究の基礎を学び、かつどのような調査研究手法・構想・構成によって修士論文を作成するこ とが可能なのかを理解し、実際に修士論文執筆のための下準備を進めることにある。</p>	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス	
	2	論文作成の作法（1）	
	3	論文作成の作法（2）	
	4	沖縄民俗研究史の概観（1）	
	5	沖縄民俗研究史の概観（2）	
	6	沖縄民俗研究史の概観（3）	
	7	文献資料読解（1）	
	8	文献資料読解（2）	
	9	文献資料読解（3）	
	10	文献資料読解（4）	
	11	先行研究研究文献読解（1）	
	12	先行研究研究文献読解（2）	
	13	先行研究研究文献読解（3）	
	14	先行研究研究文献読解（4）	
	15	まとめ	
	16	ガイダンス	
	17	調査成果報告（1）	
	18	調査成果報告（2）	
	19	調査成果報告（3）	
	20	先行研究研究文献読解（5）	
	21	先行研究研究文献読解（6）	
	22	先行研究研究文献読解（7）	
	23	修論構想（1）	
	24	修論構想（2）	
	25	修論構想（3）	
	26	修論論点整理（1）	
	27	修論論点整理（2）	
	28	修論論点整理（3）	
29	修論概要作成（1）		
30	修論概要作成（2）		
31	まとめ		

学	<p>テキスト・参考文献・資料など 講義の中で適宜、紹介する。</p>
び の 実 践	<p>学びの手立て 本ゼミは「南島民俗文化」に関する修士論文を作成するための基礎的な科目であるが、受講生には専攻・領域を問わず、南島文化研究科の関連諸科目を積極的に履修することを勧める。加えて、「南島民俗文化」に対する各受講生の理解を深化させることが、各自のキャリア形成においてどのような意味を持ち、そして沖縄の社会・文化へどのような貢献が可能かという問題意識を常にもちながら、本ゼミを履修してほしい。</p>
	<p>評価 受講生の真摯な研究態度と調査への取り組みが基本条件である。学期末に課題レポートを提出させるとともに、修士論文作成に向けた各受講生の学習・研究姿勢そして実際の取り組みを、総合的に評価する。期末レポート（修論概要+α 70%）、平常点（30%）</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目 南島民俗特論Ⅰ・Ⅱ、南島民俗宗教特論Ⅰ・Ⅱ、東アジア文化人類学特論ⅠA・ⅠB・Ⅱ・Ⅲほか。</p>

※ポリシーとの関連性 本ゼミは、「南島民俗文化特殊研究Ⅰ」で学んだ諸点を踏まえ、修士論文を完成させるための科目である。

[/演習]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島民俗文化特殊研究Ⅱ	通年	木6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	石垣 直	2年	nishigaki@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>本ゼミの内容は、修士論文作成のための指導が中心となる。前年度書いた「修士論文概要」に沿って、各受講生の研究テーマに関する先行文献や関連研究の読み込みを進め、調査内容および資料整理とその分析・提示・論旨展開等について、指導する。</p>	<p>論文執筆は決して容易な作業ではない。しかし、基礎知識の学習、先行研究の読解、論文構想・構成、調査・データ収集、考察・分析という系統的なプロセスを学ぶことは、各自の研究活動のみならず、社会・文化を理解し行動する姿勢においても、極めて意義深いものである。「南島民俗文化」の理解を、いかに発展させるかを常に意識した学びを実践してほしい。</p>
到達目標	<p>本ゼミの到達目標は、修士論文作成にある。事例報告・事例研究に止まらず、「南島民俗文化研究」の歴史の中で自身の研究がどのような位置づけにあり、今後どのような発展可能性をもっているのかを十分に意識した修士論文の完成を目指す。</p>	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス	
	2	論文作成の作法（1）	
	3	論文作成の作法（2）	
	4	調査成果報告・検討（1）	
	5	調査成果報告・検討（2）	
	6	調査成果報告・検討（3）	
	7	調査成果報告・検討（4）	
	8	修論構成検討（1）	
	9	修論構成検討（2）	
	10	修論構成検討（3）	
	11	中間報告会準備（1）	
	12	中間報告会準備（2）	
	13	中間報告会準備（3）	
	14	中間報告会準備（4）	
	15	まとめ	
	16	ガイダンス	
	17	補足調査成果報告・検討（1）	
	18	補足調査成果報告・検討（2）	
	19	補足調査成果報告・検討（3）	
	20	補足調査成果報告・検討（4）	
	21	修論草稿推敲・論旨検討（1）	
	22	修論草稿推敲・論旨検討（2）	
	23	修論草稿推敲・論旨検討（3）	
	24	修論草稿推敲・論旨検討（4）	
	25	修論仮提出原稿の検討（1）	
	26	修論仮提出原稿の検討（2）	
	27	修論仮提出原稿の検討（3）	
	28	修論仮提出原稿の検討（4）	
	29	修論最終試験対策（1）	
30	修論最終試験対策（2）		
31	修論最終試験対策（3）		

学	<p>テキスト・参考文献・資料など 講義の中で適宜、紹介する。</p>
び の 実 践	<p>学びの手立て 本ゼミは「南島民俗文化」に関する修士論文を作成するための基礎的な科目であるが、受講生には専攻・領域を問わず、南島文化研究科の関連諸科目を積極的に履修することを勧める。加えて、「南島民俗文化」に対する各受講生の理解を深化させることが、各自のキャリア形成においてどのような意味を持ち、そして沖縄の社会・文化へどのような貢献が可能かという問題意識を常にもちながら、本ゼミを履修してほしい。</p>
	<p>評価 受講生の真摯な研究態度と調査・論文執筆への取り組みが基本条件である。修士論文作成に向けた各受講生の学習・研究姿勢そして修士論文の最終的な内容をもとに、総合的に評価する。修士論文内容（70%）、平常点（30%）</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目 南島民俗特論Ⅰ・Ⅱ、南島民俗宗教特論Ⅰ・Ⅱ、東アジア文化人類学特論ⅠA・ⅠB・Ⅱ・Ⅲほか。</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島歴史文化特殊研究 I	通年	木6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	深澤 秋人	1年		

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>修論に向けて、沖縄の戦後史の概略を把握することに努める。それと同時に日本復帰運動について、運動の主力であった沖教組、高教組や官公労、全軍労など労働組合の運動史、組織論等々みていく。修論の各組織の集会でスローガンの変遷を見ていくうえで、その背景をしっかりと押さえておく必要がある。</p>	<p>関係論文の講読を中心に戦後史、復帰運動を見ていくが、可能な限り、当時のビラやチラシなどの資料を収集し、その分析についても考えたい。</p>
到達目標	戦後史の全体像を概観し、また復帰運動の中心的な各組織について調査研究していくことを通じて、修論の概要を整理し、より明確な輪郭が持てるようにする。資料についても、何を中心に収集するかなど一定のめど付けができるように努める。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	年間スケジュールの作成	
	2	戦後史の概観－主要論文の講読①	
	3	同 上	
	4	同 上	
	5	同 上	
	6	同 上	
	7	主要論文の講読②	
	8	同 上	
	9	同 上	
	10	同 上	
	11	同 上	
	12	復帰関連論文講読①	
	13	同 上	
	14	同 上	
	15	同 上	
	16	夏季休暇中の資料の収集などについて調整	
	17	夏季休暇中の収集資料について報告	
	18	今後の進め方について調整	
	19	修論テーマ、枠組みなど調整	
	20	修論テーマの点検	
	21	個別組合関連の書籍、論文の講読	
	22	同 上	
	23	同 上	
	24	同 上	
	25	同 上	
	26	同 上	
	27	同 上	
	28	同 上	
29	同 上		
30	同 上		
31	春季休暇中の計画など調整		

学	<p>テキスト・参考文献・資料など 講読する論文は調整しながら、選択する。</p>
び の 実 践	<p>学びの手立て 授業での論文講読だけでなく、広く関連書籍などに、目を通しておくことが望ましい。</p>
	<p>評価</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目 次年度のM2での修論執筆に向けて、継続的に、研究に取り組むこと。</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	南島歴史文化特殊研究Ⅱ	通年	木7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-田名 真之	2年		

学びの準備	ねらい 修士論文の作成に向け、定期的に進捗状況を発表させ、院生相互の質疑、応答を踏まえながら、指導助言を行う。可能な限り早めに論文執筆にとりかからせ、点検、修正のやり取りを通して、論文の完成を図る。	メッセージ 修論の完成に向けて、しっかりと計画を立て、目標を少しずつ達成しながら、取り組むこと。修論に取り組む態勢も整備して、集中して講読、執筆を行うこと。
	到達目標 修士論文の作成、完成が到達目標である。2年間の調査研究の成果をより良いものとするために、しっかりと、点検、修正を行う必要があり、早め早めに執筆を進めることが、求められる。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	修士論文の完成までのスケジュール作成	
	2	修士論文の内容の調整、確認	
	3	同上	
	4	進捗状況の報告	
	5	同上	
	6	同上	
	7	同上	
	8	同上	
	9	関連論文確認	
	10	同上	
	11	同上	
	12	中間発表の準備点検	
	13	同上	
	14	同上	
	15	同上	
	16	夏季休暇中の計画の作成、調整	
	17	夏季休暇中の進捗状況の報告	
	18	進捗状況の報告	
	19	同上	
	20	同上	
	21	同上	
	22	同上	
	23	同上	
	24	同上	
	25	同上	
	26	修論原稿の点検	
	27	同上	
	28	同上	
29	同上		
30	同上		
31	同上		

学	テキスト・参考文献・資料など
び の 実 践	<p>学びの手立て</p> <p>計画を着実に遂行するために、取り組みの態勢を整え、専念、集中すること。『歴代宝案』など漢文史料を扱うので、漢文読解の力量のアップに常日頃から取り組むこと。</p>
学 び の 継 続	<p>評価</p> <p>修士論文の完成。</p>
学 び の 継 続	次のステージ・関連科目

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本近現代文学特論 I A	前期	火 3	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	黒澤 亜里子	1年		

学びの準備	ねらい (1) 文献探索の基礎を学ぶ。 (2) 日本/沖縄の作家のテキストを読み、沖縄文学の現在とその可能性について考える。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む) ・発表、討議。 沖縄の近現代作家のテキストを取り上げる。
	テキスト・参考文献・資料など 必要に応じて指示する。
	学びの手立て 履修の心構え ・毎時間、発表担当者を設ける。
	評価 発表および文献探索法の基礎がどの程度身についているかによって評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本近現代文学特論 I B	後期	火 3	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	黒澤 亜里子	1年		

学びの準備	ねらい 日本／沖縄の作家のテキストを読み、沖縄文学の可能性について考える。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） ・発表、討議。 沖縄の近現代作家のテキストを取り上げる予定である。
	テキスト・参考文献・資料など 必要に応じて指示する。
	学びの手立て 履修の心構え ・毎時間、発表担当者を設ける。
	評価 発表および文献探索法の基礎がどの程度身についているかによって評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本言語文化特殊研究 I	通年	土 3	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	葛綿 正一	1年	kuzuwata@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 学術論文を作成するための基礎を学ぶ。文献探索、調査等の基礎研究を通じてテーマおよび方法を確定し、修士論文までの具体的な研究計画を作成する。紀要への投稿を目標とし、修士論文の一部となる論文を執筆する。	メッセージ 研究書を一週間に一冊ずつ読破していくと、論文執筆能力が身につくはずである。
	到達目標 修士論文概要をまとめ、論文の構成について考える。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） ①年間研究計画の作成（4月） ②調査、資料収集の方法 ③先行文献目録、研究史の作成 ④方法、視点の検討 ⑤夏期合宿で研究成果の中間発表を行う ⑥紀要論文の執筆、投稿（12月下旬提出） ⑦修士論文の概要を作成する（2月末）
	テキスト・参考文献・資料など 適宜、指示する。
	学びの手立て 日本国語大辞典など大きな事典類を引くこと。
	評価 ①研究計画に沿って着実に課題に取り組んでいるか。 ②中間発表および紀要論文（研究ノート）等。

学びの継続	次のステージ・関連科目 「日本言語文化特殊研究Ⅱ」では修士論文を完成させる。
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本語文化特殊研究 I	通年	火 4	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	黒澤 亜里子	1年		

学びの準備	ねらい 学術論文を作成するための基本を学ぶ。周辺の資料を探索し、発表し、テーマの決定を模索する。学年末の紀要論文への寄稿を目標とする。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） ① 1年を通しての研究計画の作成。 ② 調査、文献・資料収集の方法 ③ 参考文献、研究史の作成。 ④ 方法、視点を検討し、小テーマを設定する。 ⑤ 夏期合宿で中間発表会を行い、テーマの方向性を決定する。 ⑥ 多方面からの調査・検討を繰り返し、発表。 ⑥ 12月の紀要論文に向けテーマを設定し、執筆、手直し、推敲を重ねる。 ⑦ 論文合評会の反省点を踏まえて検討し、修士論文のテーマと概要を作成する（2月末提出）。
	テキスト・参考文献・資料など その都度指示する。
	学びの手立て 履修の心構え ・基本的に毎回発表を行い、進度を報告する。
	評価 ① 毎回個々に出した課題に取り組んでいるか。 ② 中間発表、年度末の論文（ノート）

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本語文化特殊研究Ⅱ	通年	土3	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	葛綿 正一	2年	kuzuwata@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 修士論文を完成させ、研究者としての方法論を身につける。	メッセージ 迷いが生じたときは、原点に立ち戻り、ひたすらデータを打ち込むこと。
	到達目標 修士論文を完成させる。	

学びの準備	到達目標 修士論文を完成させる。

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） ①年間研究計画の作成 ②前年度末に提出した論文概要をふまえ、詳細な構想表を作成する ③7月末の中間発表会に向けて研究成果をまとめる ④中間発表での指摘、反省点をふまえ、構成、内容、方法等を総合的に再検討する ⑤夏期合宿において研究成果を発表する ⑥12月の講義終了時までに修士論文の下書きを提出する ⑦全体を通して総点検を行い、論文を手直しする（1月下旬提出） ⑧最終試験、発表会に向けて準備を行う
	テキスト・参考文献・資料など 適宜、指示する。
	学びの手立て 日本国語大辞典など大きな事典類を引くこと。
	評価 ①中間発表 ②研究成果

学びの継続	次のステージ・関連科目 完成させた修士論文を踏まえ、論文を発表していく。
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本語文化特殊研究Ⅱ	通年	火4	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	黒澤 亜里子	2年		

学びの準備	ねらい 各自が設定したテーマに沿って、引き続き、調査、研究を行う。年間計画を立て、構想表を作成し、執筆、発表、検討を重ね、学位論文を完成する。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） ① 年間研究計画の作成。 ② 学位論文の構想表の作成と検討。 ③ 補足調査を行いながら、7月末の修士論文中間発表会に向けてのテーマを設定し、執筆する。 ④ 添付資料のあげ方、注記のつけ方、参考文献の選定に注意しながら、発表レジュメを完成する。 ⑤ 中間発表の反省点を踏まえ、夏休み明けまでに、学术论文の大まかな下書きをする。 ⑥ 下書きを元に、論文構成の補足、修正を行う。 ⑦ 1章ごとの検討を行いながら、12月の最終講義時までに修士論文を完了する。 ⑧ 全体を通してミスがないよう点検、完成する。 ⑨ 2月中旬の修士論文最終試験、論文発表会に向けての準備を行う。
	テキスト・参考文献・資料など その都度指示する。
	学びの手立て 履修の心構え ・基本的に毎回発表を行い、進度を報告する。
	評価 ① 毎回個々に出した課題に取り組んでいるか。 ② 学位論文。

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本古典文学特論 I A	前期	火 3	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	田場 裕規	1年		

学びの準備	ねらい 本講義は、万葉集歌を扱う。今から1300年ほど前を生きた万葉びとが詠んだ歌を、時代背景・作歌状況・作者の個性・習俗・ことば等々を踏まえながら、一首一首深く読み解く。	メッセージ
	到達目標	

学びの準備	到達目標
-------	------

学びの実践	学びのヒント 授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む) 第1回 『万葉集』とは何か (概説) 第2回 雄略天皇の歌 第3回 額田王の歌 第4回 有間皇子の歌 第5回 大津皇子・大伯皇女の歌 第6回 柿本人麻呂の歌 (1) 第7回 柿本人麻呂の歌 (2) 第8回 高市黒人・長意吉麻呂の歌 第9回 山部赤人の歌 第10回 山上憶良の歌 第11回 大伴旅人の歌 第12回 高橋虫麻呂の歌 第13回 大伴家持の歌 (1) 第14回 大伴家持の歌 (2) 第15回 東歌・防人歌 定期試験
	テキスト・参考文献・資料など 『万葉集必携』 稲岡耕二編、學燈社。 『万葉集必携II』 稲岡耕二編、學燈社。 適宜指示する。
	学びの手立て
	評価 授業態度 30 + テスト点 30 + レポート点 30 = 評価点

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など 『万葉集必携』 稲岡耕二編、學燈社。 『万葉集必携II』 稲岡耕二編、學燈社。 適宜指示する。
-------	---

学びの実践	学びの手立て
-------	--------

学びの実践	評価 授業態度 30 + テスト点 30 + レポート点 30 = 評価点
-------	--

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本古典文学特論 I B	後期	火 3	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	田場 裕規	1年		

学びの準備	ねらい 本講義は、万葉集歌を扱う。今から1300年ほど前を生きた万葉びとが詠んだ歌を、時代背景・作歌状況・作者の個性・習俗・ことば等々を踏まえながら、一首一首深く読み解く読解トレーニングを行う。特に柿本人麻呂の歌を扱う。	メッセージ
	到達目標	

学びの準備	
-------	--

学びの実践	学びのヒント 授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む) 第1回 『万葉集』と柿本人麻呂 (概説) 第2回 人麻呂作歌(1) 第3回 人麻呂作歌(2) 第4回 人麻呂作歌(3) 第5回 人麻呂作歌(4) 第6回 人麻呂作歌(5) 第7回 人麻呂作歌(6) 第8回 人麻呂作歌(7) 第9回 人麻呂歌集歌(1) 第10回 人麻呂歌集歌(2) 第11回 人麻呂歌集歌(3) 第12回 人麻呂歌集歌(4) 第13回 人麻呂歌集歌(5) 第14回 人麻呂歌集歌(6) 第15回 人麻呂歌集歌(7)
	テキスト・参考文献・資料など 『万葉集』本文篇 (埴書房) 伊藤博『万葉集釋注』 (集英社)、澤瀉久孝『万葉集注釋』 (中央公論社)
	学びの手立て
	評価 授業態度 30 + レポート点 70 = 評価点

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本古典文学特論ⅡA	前期	土4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	葛綿 正一	1年	kuzuwata@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 中世・近世の説話や歌謡を取り上げ、注釈をつけながら、日本の中世・近世文学の特質について考える。また、南島の説話や歌謡との比較も試みたい。	メッセージ テキスト注釈の楽しみを知ってほしい。
	到達目標 先行研究を踏まえ、緻密なレポートを作成する。	

学びの準備	到達目標 先行研究を踏まえ、緻密なレポートを作成する。

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	日本文学における中世と近世	プリントによる学習
	2	説話の注釈1	プリントによる学習
	3	説話の注釈2	プリントによる学習
	4	説話の注釈3	プリントによる学習
	5	説話の注釈4	プリントによる学習
	6	説話の注釈5	プリントによる学習
	7	歌謡の注釈1	プリントによる学習
	8	歌謡の注釈2	プリントによる学習
	9	歌謡の注釈3	プリントによる学習
	10	歌謡の注釈4	プリントによる学習
	11	歌謡の注釈5	プリントによる学習
	12	南島文学との比較1	プリントによる学習
	13	南島文学との比較2	プリントによる学習
	14	南島文学との比較3	プリントによる学習
	15	まとめ	プリントによる学習
16			

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など 適宜、指示する。
-------	----------------------------

学びの実践	学びの手立て 日本語大辞典、沖縄古語大辞典など大きな事典類を引くこと。
-------	--

学びの実践	評価 レポートによって成績を評価する。
-------	------------------------

学びの継続	次のステージ・関連科目 「日本古典文学特論ⅡB」でも先行研究を踏まえた緻密なレポート作成を学ぶ。
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本古典文学特論ⅡB	後期	土4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	葛綿 正一	1年	kuzuwata@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 中世・近世の説話や歌謡を取り上げ、注釈をつけながら、日本の中世・近世文学の特質について考える。また、南島の説話や歌謡との比較も試みたい。	メッセージ テキスト注釈の楽しみを知ってほしい。
	到達目標 先行研究を踏まえ、緻密なレポートを作成する。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	日本文学における中世と近世	プリントによる学習
	2	説話の注釈1	プリントによる学習
	3	説話の注釈2	プリントによる学習
	4	説話の注釈3	プリントによる学習
	5	説話の注釈4	プリントによる学習
	6	説話の注釈5	プリントによる学習
	7	歌謡の注釈1	プリントによる学習
	8	歌謡の注釈2	プリントによる学習
9	歌謡の注釈3	プリントによる学習	
10	歌謡の注釈4	プリントによる学習	
11	歌謡の注釈5	プリントによる学習	
12	南島文学との比較1	プリントによる学習	
13	南島文学との比較2	プリントによる学習	
14	南島文学との比較3	プリントによる学習	
15	まとめ	プリントによる学習	
16			
	テキスト・参考文献・資料など 適宜、指示する。		
	学びの手立て 日本国語大辞典、沖縄古語大辞典など大きな事典類を引くこと。		
	評価 レポートによって成績を評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 先行研究を踏まえた緻密なレポート作成の能力は修士論文作成に役立つはずである。
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	比較社会文化特論 I	前期	水 7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	桃原 一彦	1年		

学びの準備	ねらい	メッセージ
	到達目標	

学びの準備	
-------	--

学びの実践	学びのヒント 授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む)
	テキスト・参考文献・資料など
	学びの手立て
	評価

学びの実践	
-------	--

学びの実践	
-------	--

学びの実践	
-------	--

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	比較社会文化特論Ⅱ	後期	水7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	桃原 一彦	1年	講義終了後またはメール等で問い合わせください。	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>本科目は、ドキュメント分析、会話分析、聞き取り調査、参与観察など質的調査の方法に依拠したフィールドワークを行うためのトレーニングを目的とする。とくに、新聞・雑誌記事、資料文書などのデータの分析法（内容分析等）を習得するとともに、聞き取り調査、参与観察法、ドキュメント分析、ライフストーリー分析などに関する基本的理解を踏まえながら、実践的な学習を行う。</p>	<p>学部で学んだ質的社会調査の方法を修士論文レベルで考え、使用し、マスターするための科目です。本科目は専門社会調査士資格の認定科目です。資格取得を目指す大学院生は、必ず履修してください。</p>
到達目標	社会調査における質的方法の知識と技能をマスターし、修士論文の研究方法に使用できるようにする。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス：参考資料等の配布	質的調査の種類を調べる
	2	問題発見と問題構成（質的調査とその分析の意義・目的-仮説検証と仮説発見・構成の相違）	質的調査の事例を集める
	3	質的データ分析の一般理論的基礎①：ミルズ「類型的語彙」論	発話行為の社会学的意味を考察する
	4	質的データ分析の一般理論的基礎②：ガーフィンケル「エスノメソドロジー」	発話行為の社会学的意味を考察する
	5	質的データ分析の一般理論的基礎③：ゴフマン「行為の演技論」	身振りの社会性を考察する
	6	質的データ分析の一般理論的基礎④：現象学的社会学における「間-主観性」と調査の主・客問題	主観と間-主観の違いを調べる
	7	質的データ分析の実践①：内容分析（新聞・雑誌記事、資料文書等）	ドキュメント分析資料の収集
	8	質的データ分析の実践②：ドキュメント分析（記録日誌、日記、手紙等の分析）	ドキュメント分析の実践
	9	質的データ分析の実践③：聞き取り調査によるデータ収集の問題（インタビュー空間の設定と臨床性）	聞き取り調査の実践
	10	質的データ分析の実践④：ライフストーリー分析（日常的経験世界と「語られる」経験世界の境界）	生活史法の事例を集める
	11	質的データ分析の実践⑤：様々な観察法I（参与観察と非参与観察の境界）	参与観察法の事例を集める
	12	質的データ分析の実践⑥：様々な観察法II（組織的観察法と非組織的観察法など）	観察方法の要点をまとめる
	13	学生の個別テーマに則した質的調査法と分析法の討議①	研究論文での質的調査の応用
14	学生の個別テーマに則した質的調査法と分析法の討議②	研究論文での質的調査の応用	
15	まとめとふりかえり	研究論文での質的調査の応用	
16	補習	ふりかえりと修士論文指導	
実践	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>佐藤郁哉『質的データ分析法—原理・方法・実践』、新曜社、2008年。谷富夫編『ライフストーリーを学ぶ人のために』、世界思想社、1996年。 適宜紹介する。</p>		
学びの手立て	<p>大学院教育の目標である修士論文の調査研究を前提とした講義になる。研究テーマの具体的な論理展開の参考にできるように心がけてください。</p>		
評価	<p>提出物（論文・レポートなど）、平常点（出席回数、発表やディスカッションへの取り組み姿勢）</p>		

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>南島社会文化特殊研究Ⅰ・Ⅱ</p>
-------	---

※ポリシーとの関連性 「南島文化」をより深く理解するためには、周辺地域との比較という視点もまた重要である。本科目の存在意義はそこにある。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	東アジア文化人類学特論 I A	前期	火 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	石垣 直	1年	nishigaki@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい この授業の主眼は、東アジアの諸社会・文化に関する基礎的な理解を深めることにある。この目標を達成するため、今年度前期は中国とくに「漢民族」（漢族）の親族・社会組織について講義するとともに、主要著作・論文を複数取り上げて輪読する。	メッセージ 前半の数回において「文化人類学」および「東アジア」に関する基礎的知識を講義し、それ以降は担当を決め、各履修者の発表ならびに質疑応答を通じて内容の理解を深める。取り上げる著作・論文は授業の際に改めて提示する。
	到達目標 中国・台湾社会を事例としながら、東アジア社会の親族・社会組織に関する基礎的な理解を得ることができる。その理解のプロセスにおいて、(周辺の)異文化・社会との対比において、各自が属する社会・文化を比較文化的あるいは文化人類学的視点から捉え直すことができるようになる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画	
	回	テーマ
	1	ガイダンス
	2	文化人類学概論(1)
	3	文化人類学概論(2)
	4	人類学と東アジア研究
	5	漢族社会とタテのつながり
	6	漢族社会とヨコのつながり
	7	文献資料読解(1)
	8	文献資料読解(2)
	9	文献資料読解(3)
	10	文献資料読解(4)
	11	個人発表(1)
	12	個人発表(2)
	13	個人発表(3)
	14	個人発表(4)
	15	まとめ
	16	
	時間外学習の内容	
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・テキストは特になし。 ・主要参考文献は次の通り。 <p>川昌久2004『中国社会の人類学——親族・家族からの展望』世界思想社 瀬川昌久・西澤治彦(編訳)2006『中国文化人類学リーディングス』風響社</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その他の関連文献については授業の際に随時紹介する。 	
	<p>学びの手立て</p> <p>中国・台湾地域の事象ならびに広く文化人類学全般の議論を紹介するが、それらの視座・分析手法・論理構成を各自の修士論文にどのように活用できるかを常に意識しながら授業に臨んでほしい。</p>	
	<p>評価</p> <p>授業への出席および積極的な授業態度を重視する。その上で、学期末に提出してもらったレポート(テーマは学生が主体的に選択。各自の修士論文に関わるもので構わない)の内容を踏まえ、総合的に評価する。</p>	

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>日本・沖縄の文化は勿論のこと、アジア地域に関する他領域の科目(基礎知識が乏しい場合は学部の授業も含む)なども積極的に履修してほしい。</p>
-------	--

※ポリシーとの関連性 「南島文化」をより深く理解するためには、周辺地域との比較という視点もまた重要である。本科目の存在意義はそこにある。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	東アジア文化人類学特論 I B	後期	火 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	石垣 直	1年	nishigaki@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい この授業の主眼は、東アジアの諸社会・文化に関する基礎的理解を深めることにある。	メッセージ 前半の数回において「漢族の年中行事」および「儒教・仏教・道教」に関する基礎的知識を講義し、それ以降は担当を決めて各履修者が担当の著作・論文の内容を発表し、質疑応答を通じて理解を深める。取り上げる著作・論文は授業の際に改めて提示する。
	到達目標 中国・台湾社会を事例としながら、東アジアの社会・文化に影響を与えてきた漢族の宗教に関する基礎的な理解を得ることができる。その理解のプロセスにおいて、(周辺の)異文化・社会との対比において、各自が属する社会・文化を比較文化的あるいは文化人類学的視点から捉え直すことができるようになる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス	
	2	中国の年中行事	
	3	中国の思想と宗教(1)——儒教	
	4	中国の思想と宗教(2)——仏教	
	5	中国の思想と宗教(3)——道教	
	6	中国の思想と宗教(4)——民俗宗教の世界	
	7	文献資料読解(1)	
	8	文献資料読解(2)	
	9	文献資料読解(3)	
	10	文献資料読解(4)	
	11	個人発表(1)	
	12	個人発表(2)	
	13	個人発表(3)	
	14	個人発表(4)	
	15	まとめ	
	16		
	テキスト・参考文献・資料など		
	<ul style="list-style-type: none"> ・テキストは特になし。 ・主要参考文献は次の通りである。 五十嵐真子2006『現代台湾宗教の諸相——台湾漢族に関する文化人類学的研究』人文書院 川口幸夫・瀬川昌久(編)2013『現代中国の宗教——信仰と社会をめぐる民族誌』昭和堂 渡邊欣雄1991『漢民族の宗教——社会人類学的研究』第一書房 <ul style="list-style-type: none"> ・その他の関連文献については、授業の際に随時紹介する。 		
	学びの手立て		
	中国・台湾地域の事象ならびに広く文化人類学全般の議論を紹介するが、それらの視座・分析手法・論理構成を各自の修士論文にどのように活用できるかを常に意識しながら、授業に臨んでほしい。		
	評価		
	授業への出席および積極的な授業態度を重視する。その上で、学期末に提出してもらったレポート(テーマは学生が主体的に選択。各自の修士論文に関わるもので構わない)の内容を踏まえ、総合的に評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 日本・沖縄の文化は勿論のこと、アジア地域に関する他領域の科目(基礎知識が乏しい場合は学部の授業も含む)なども積極的に履修してほしい。
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	東アジア文化人類学特論Ⅱ	前期	水6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-津波 高志	1年	tsuhatt@gmail.com	

学びの準備	ねらい 奄美諸島から八重山諸島までの琉球弧全域の民俗文化を見渡す。特に、琉球弧の地域ごとの文化変化に配慮しつつ、家族・親族・村落などの社会的単位と関連づけて民俗宗教を捉える。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	講義全体の概要	
	2	琉球弧の歴史と言語	
	3	民俗文化とは	
	4	村落の歴史と景観	
	5	平民系村落と土族系村落	
	6	家族と世帯	
	7	親族と出自	
	8	シャーマンと司祭	
	9	村落の祭祀	
	10	家族・親族の祭祀	
	11	シャーマニズム	
	12	琉球弧の文化変化（1）	
	13	琉球弧の文化変化（2）	
	14	琉球弧の文化変化（3）	
	15	講義のまとめ	
	16	レポート提出	
	テキスト・参考文献・資料など 講義中に文献を挙げる。		
	学びの手立て 講義全体は4部構成、すなわち第Ⅰ部が「基本的知識」、第Ⅱ部が「村落と家族・親族」、第Ⅲ部が「民俗宗教」、第Ⅳ部が「琉球弧の文化変化」なので、それを意識しながら受講することが必要である。		
	評価 レポートで評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	東アジア文化人類学特論Ⅲ	後期	水6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-津波 高志	1年	tsuhatt@gmail.com	

学びの準備	ねらい 沖縄側から奄美諸島の文化をいかに理解すべきかという点を中心に講義を行う。特に、現在の文化の研究であっても、その背後にある時間的な深みに配慮することが如何に大切であるかについて学生に意識させたい。	メッセージ 津波高志『沖縄側から見た奄美の文化変容』（2012, 第一書房）をテキストとして用いるが、講義はパワーポイントで映像資料を補充しながら行う。
	到達目標	

到達目標	
------	--

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	奄美の文化変容	
	2	奄美の葬制と墓制（1）	
	3	奄美の葬制と墓制（2）	
	4	奄美の葬制と墓制（3）	
	5	奄美の葬制と墓制（4）	
	6	奄美の立ち会い相撲（1）	
	7	奄美の立ち会い相撲（2）	
	8	奄美の立ち会い相撲（3）	
	9	奄美の立ち会い相撲（4）	
	10	奄美における女性神役の継承（1）	
	11	奄美における女性神役の継承（2）	
	12	奄美における女性神役の継承（3）	
	13	奄美における女性神役の継承（4）	
	14	琉球弧の葬制と墓制	
	15	琉球弧の女性神役	
	16	レポート提出	
	テキスト・参考文献・資料など 津波高志『沖縄側から見た奄美の文化変容』（2012, 第一書房）		
	学びの手立て 近現代・近世・古琉球という具合に、琉球史の時代区分に沿いながら、各論を展開する。		
	評価 レポートで評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	文化財保存特論	後期	月6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上原 静	1年	研究室5-417 E-mail sizuka@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 人類の歴史のなかで営為により残された遺産の中でもとくに物質的な文化財を中心に、その特質や変遷などについて学び、現代社会において、どのように保護し、活かしていくのか考える。とくに現在の文化財行政で実践されている埋蔵文化財や史跡、名勝、記念物、建造物などの調査・研究、保存技術などの成果を学び、復元整備と観光等における活用の実情や課題などを具体的に紹介し考察する。	メッセージ
	到達目標 現代社会において、文化財の保護がどの様になされ、活用されているかを理解し、また、課題を考えてもらう。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） 基本的には講義型式をとる。 内容は文化財保護法、文化財の指定、保存と整備、活用のあり方についてとりあげる。
	テキスト・参考文献・資料など 特に指定しない。講義の中で、随時紹介する。
	学びの手立て 文化財は地理、歴史的環境と密接に関係していることを認識すること。事前に推薦する参考文献、資料を読むことを薦める。
	評価 授業参加の度合い、レポートの提出で評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目 関連科目として「南島先史学Ⅱ」「南島考古学Ⅰ・Ⅱ」「考古学特講Ⅰ・Ⅱ」「アジア考古学」「考古学概論Ⅱ」がある。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	アジア文化特論	前期	木6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-津波 高志	1年	授業終了後に教室にて受付	

学びの準備	ねらい 韓国の文化について、濟州島の事例を通して理解する。	メッセージ 現地調査で蒐集した資料や映像をパワーポイントを用いて紹介する。
	到達目標 国全体と一地域との関係を文化の側面から理解することを目指す。	

学びの準備	到達目標 国全体と一地域との関係を文化の側面から理解することを目指す。
-------	--

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	講義全体の概要	
	2	分断国家の現状	
	3	韓国の歴史（1）	
	4	韓国の歴史（2）	
	5	韓国の言語と文字（1）	
	6	韓国の言語と文字（2）	
	7	濟州島の家族と親族（1）	
	8	濟州島の家族と親族（2）	
	9	濟州島の祖先祭祀（1）	
	10	濟州島の祖先祭祀（2）	
	11	濟州島の村落（1）	
	12	濟州島の村落（2）	
	13	濟州島の村落祭祀（1）	
	14	濟州島の村落祭祀（2）	
	15	まとめ	
16	テスト		

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など 参考文献として、論文の抜き刷りを配布する。
-------	---

学びの実践	学びの手立て 講義への出席状況もテストと同程度に評価する。
-------	----------------------------------

学びの実践	評価 韓国における地方文化と国レベルの文化のギャップについての理解が測られる。
-------	--

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英語学特論	後期	水5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	里 麻奈美	1年	開講前はm.sato@okiu.ac.jpで、開講中は授業終了後に教室で受け付けます。	

学びの準備	ねらい この講義では、『ことばと思考』をテーマに取り扱う。認知言語学における最新の英語論文を、じっくり丁寧に読み上げることで、研究の進め方（研究手法・分析方法）ならびに論文の書き方を学び、個人の研究テーマを見いだすきっかけにしたい。受講者の希望に応じ、講義内容を変更する場合もある。	メッセージ
	到達目標 この講義を受講し理解した学生は、研究を進める上で必要なロジックや研究手法、ならびに英語の論文を書く為に必要な「批判的思考」を身につけることができる。また、個人の研究テーマの足がかりを見つける事ができる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	イントロダクション	講義内で適宜指示する
	2	認知言語学とは	講義内で適宜指示する
	3	ことばと思考① 【精読： テーマと結果】	講義内で適宜指示する
	4	ことばと思考① 【精読： 研究手法】	講義内で適宜指示する
	5	ことばと思考① 【ディスカッション・発展的研究の模索】	講義内で適宜指示する
	6	ことばと思考② 【精読： テーマと結果】	講義内で適宜指示する
	7	ことばと思考② 【精読： 研究手法】	講義内で適宜指示する
	8	ことばと思考② 【ディスカッション・発展的研究の模索】	講義内で適宜指示する
9	色彩語が視覚に与える影響 【精読： テーマと結果】	講義内で適宜指示する	
10	色彩語が視覚に与える影響 【精読： 研究手法】	講義内で適宜指示する	
11	色彩語が視覚に与える影響 【ディスカッション・発展的研究の模索】	講義内で適宜指示する	
12	言語がモノ認知に与える影響 【精読： テーマと結果】	講義内で適宜指示する	
13	言語がモノ認知に与える影響 【精読： 研究手法】	講義内で適宜指示する	
14	言語がモノ認知に与える影響 【ディスカッション・発展的研究の模索】	講義内で適宜指示する	
15	個別研究テーマについてのディスカッション①	講義内で適宜指示する	
16	個別研究テーマについてのディスカッション②	講義内で適宜指示する	
実践	テキスト・参考文献・資料など 講義内にて適宜配布するので、テキストの購入は必要ありません。		
	学びの手立て 履修の心構えとして、以下注意してください。 ・常に疑問を持ち、アクティブに考え、講義に参加して下さい。 ・お互いに実りのあるディスカッションができるような風通しの良いクラス作りを心がけて下さい。		
	評価 【平常点：30点】 講義内での質問・発言などを含む受講姿勢や態度 【課題：30点】 【発表：40点】		

学びの継続	次のステージ・関連科目 「社会言語学特論」
-------	--------------------------

科目 基本 情報	科目名	期 別	曜日・時限	単 位
	英語教育学特殊研究 I	通年	月 4	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	李 イニッド	1 年	By appointment only. e. lee@okiu.ac.jp	

学 び の 準 備	ねらい	メッセージ
	<p>The goal of this course is to help students prepare for a master's thesis in English language teaching. Through reading and discussing current research, students will develop an awareness of the contemporary research and acquire the basic skills to conduct individual research projects.</p>	<p>This course will be taught in English and/or Japanese depending on the ability and confidence of the students. Suggested readings may vary according to students' interests and needs. Students are expected to begin library research and make necessary revisions of their thesis proposals as their knowledge and research skills increase.</p>
	到達目標	
	<p>As a result of this course, students should have a clearer idea about the nature of academic research and writing. They will also have prepared a more developed research plan for their master's thesis and a research schedule.</p>	

学 び の 実 践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む)</p> <p>Week 1 Introduction Weeks 2-4 Overview Weeks 5-13 Selected topics: theory & research Weeks 14-15 Research questions & hypotheses Weeks 16-19 Research methodology Weeks 20-22 Reporting the language data Weeks 23-27 Data analysis & discussion Weeks 28-30 Individual conferences Weeks 31-32 Oral presentations</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>To be announced in class.</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>Regular class attendance and active participation are essential. All students are expected to comply with classroom rules, participate in class activities and discussion, and turn in homework assignments on time. Failure to do so will result in poorer grades, possibly zero points.</p>
	<p>評価</p> <p>Attendance and Class Participation (50%). Assignments & Research project (50%)</p>

学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>「英語教育学特殊研究II」</p>
-----------------------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英語教育学特論 I	前期	火 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	クレイグ K ジャコブソン	1年	Office: 5-421 mail: jacobsen@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい This class is an introduction to English teaching with a special emphasis on teaching English as an international language.	メッセージ Students should do their best but not be too troubled if they are unable to understand everything in the readings.
	到達目標 Students should do the readings and answer the questions in the reading guide before coming to class.	

学びの準備	到達目標 Students should do the readings and answer the questions in the reading guide before coming to class.
-------	---

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	Course Introduction and Registration	
	2	English as an international language	
	3	English as an international language	
	4	Bilingual users of English	
	5	Bilingual users of English	
	6	The native/non-native dichotomy	
	7	The native/non-native dichotomy	
	8	Standards for English as an international language	
	9	Culture in teaching English as an international language	
	10	Culture in teaching English as an international language	
	11	Culture in English language textbooks	
	12	Language learning and identity	
	13	Language learning and identity	
	14	Teaching methods and English as an international language	
	15	Teaching methods and English as an international language	
16	Student presentations and course evaluation		

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など McKay, S. L. (2002). Teaching English as an International Language. Oxford: Oxford University Press. Other readings provided by the instructor. Papers should conform to the APA Publication Manual
-------	--

学びの実践	学びの手立て Students should try to develop a research paper topic related to their thesis topic.
-------	--

学びの実践	評価 Students will be evaluated based on attendance, participation and a research paper.
-------	---

学びの継続	次のステージ・関連科目 英語教育学特論II
-------	--------------------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英語教育学特論Ⅱ	後期	火6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	津波 聡	1年	satoshi@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい To learn theories and methods of English teaching	メッセージ
	到達目標 (1) To acquire the knowledge of theories and methods of English teaching (2) To improve English proficiency through in- and out-of-class assignments in English	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	Orientation	
	2	Textbook reading & Discussion	
	3	Textbook reading & Discussion	
	4	Textbook reading & Discussion	
	5	Textbook reading & Discussion	
	6	Textbook reading & Discussion	
	7	Textbook reading & Discussion	
	8	Mid-term Exam	
	9	Textbook reading & Discussion	
	10	Textbook reading & Discussion	
	11	Textbook reading & Discussion	
	12	Textbook reading & Discussion	
	13	Textbook reading & Discussion	
	14	Textbook reading & Discussion	
	15	Textbook reading & Discussion	
	16	Final Exam	
	テキスト・参考文献・資料など Techniques and Principles in Language Teaching by Diane Larsen-Freeman (Oxford)		
	学びの手立て (1) Text must be read thoroughly before class. (2) Class will be conducted in English.		
	評価 Class Participation 50% Tests 30% Assignments 20%		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英語論文の書き方 I	前期	月 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	里 麻奈美	1 年	開講前はm.sato@okiu.ac.jpで、開講中は授業終了後に教室で受け付けます。	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	この講義は、英語の論文を書く為に必要な「批判的思考」と「論理的思考」を意識し、自分の主張を論述する方法の習得を目的とする。「なんとなく興味のある事」を「研究に値する課題」として設定する方法・仮説の立て方ならびに検証方法・文献の引用の仕方など、英語の論文を書くにあたって必要な知識をステップ毎に学ぶ。受講者の希望に応じ、講義内容を変更する場合もある。	
到達目標	この講義を受講し理解した学生は、英語の論文を書く為に必要な「批判的思考」と「論理的思考」を身につける事ができる。また、修士論文に必要な「課題設定・仮説設定・検証方法」などの知識が得られる。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	イントロダクション	講義内で適宜指示する
	2	英語論文の書き方概要	講義内で適宜指示する
	3	研究テーマの設定の仕方・書き方①	講義内で適宜指示する
	4	研究テーマの設定の仕方・書き方②	講義内で適宜指示する
	5	研究テーマの設定の仕方・書き方③	講義内で適宜指示する
	6	仮説の立て方・書き方①	講義内で適宜指示する
	7	仮説の立て方・書き方②	講義内で適宜指示する
	8	検証の仕方(検証・実験手法)・書き方①	講義内で適宜指示する
	9	検証の仕方(検証・実験手法)・書き方②	講義内で適宜指示する
	10	先行研究の見つけ方・引用の仕方・書き方	講義内で適宜指示する
	11	個人の研究テーマ・仮説・検証の仕方に関するディスカッション①	講義内で適宜指示する
	12	個人の研究テーマ・仮説・検証の仕方に関するディスカッション②	講義内で適宜指示する
	13	個人の研究テーマ・仮説・検証の仕方に関するディスカッション③	講義内で適宜指示する
14	研究テーマに関連する先行研究の検証(批判的思考と論理的思考の意識)③	講義内で適宜指示する	
15	研究テーマに関連する先行研究の検証(批判的思考と論理的思考の意識)②	講義内で適宜指示する	
16	研究テーマに関連する先行研究の検証(批判的思考と論理的思考の意識)③	講義内で適宜指示する	
	テキスト・参考文献・資料など		
	講義開始時に指示する。		
	学びの手立て		
	履修の心構えとして、以下注意してください。 ・常に疑問を持ち、アクティブに考え、講義に参加して下さい。 ・お互いに実りのあるディスカッションができるような風通しの良いクラス作りを心がけて下さい。		
	評価		
	【平常点：30点】 講義内での質問・発言などを含む受講姿勢や態度		
	【課題：30点】		
	【発表：40点】		

学びの継続	次のステージ・関連科目 「英語論文の書き方 II」
-------	------------------------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英語論文の書き方Ⅱ	後期	金 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	里 麻奈美	1年	開講前はm.sato@okiu.ac.jpで、開講中は授業終了後に教室で受け付けます。	

学びの準備	ねらい 「英語論文の書き方Ⅰ」に続き、英語の論文を書く為に必要な知識を習得する事を目的とする。分析方法の書き方、仮説に対する結果の書き方、結論・考察の書き方をステップ毎に学ぶ。受講者の希望に応じ、講義内容を変更する場合がある。	メッセージ
	到達目標 この講義を受講し理解した学生は、英語の論文を書く為に必要な「批判的思考」と「論理的思考」を身につける事ができる。また、修士論文に必要な「分析方法・結果報告のしかた・結果や考察の書き方」などの知識が得られる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	イントロダクション	講義内で適宜指示する
	2	英語論文の書き方概要	講義内で適宜指示する
	3	分析方法①	講義内で適宜指示する
	4	分析方法②	講義内で適宜指示する
	5	結果報告の仕方①	講義内で適宜指示する
	6	結果報告の仕方②	講義内で適宜指示する
	7	仮説に対する結果の書き方①	講義内で適宜指示する
	8	仮説に対する結果の書き方②	講義内で適宜指示する
9	結論・考察の書き方①	講義内で適宜指示する	
10	結論・考察の書き方②	講義内で適宜指示する	
11	個人の研究テーマに関するディスカッション①	講義内で適宜指示する	
12	個人の研究テーマに関するディスカッション②	講義内で適宜指示する	
13	個人の研究テーマに関するディスカッション③	講義内で適宜指示する	
14	研究テーマに関連する先行研究の検証(批判的思考と論理的思考の意識)①	講義内で適宜指示する	
15	研究テーマに関連する先行研究の検証(批判的思考と論理的思考の意識)②	講義内で適宜指示する	
16	研究テーマに関連する先行研究の検証(批判的思考と論理的思考の意識)③	講義内で適宜指示する	
	テキスト・参考文献・資料など 講義開始時に指示する。		
	学びの手立て 履修の心構えとして、以下注意してください。 ・常に疑問を持ち、アクティブに考え、講義に参加して下さい。 ・お互いに実りのあるディスカッションができるような風通しの良いクラス作りを心がけて下さい。		
	評価 【平常点：30点】講義内での質問・発言などを含む受講姿勢や態度 【課題：30点】 【発表：40点】		

学びの継続	次のステージ・関連科目 修士論文の書き方の基礎的知識を学んだ後は、各自のテーマに沿った卒業論文に取り組んで下さい。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英米演劇特論 I	前期	月 3	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	西原 幹子	1年		

学びの準備	ねらい 本稿では英米の作家によって書かれた劇作品の精読を通して、演劇というジャンルにおける表現形式の特徴を理解し、その読解に必要な基礎知識を習得することを目的とする。「英米演劇特論 I」では、W. シェイクスピアの悲劇と喜劇をそれぞれ一作品ずつ取り上げる。	メッセージ 受講生は毎回、指定された範囲についてまとめたレジュメを用意し、重要なせりふを和訳する。
	到達目標 演劇作品の読解に必要な基礎力を身に付けることを目標にする。英語を出来る限り正確に読む力を鍛えると同時に、イギリスにおける演劇の歴史的文化的背景について理解を深める。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画	
	回	テーマ
	1	講義説明・オリエンテーション
	2	作品①について概説
	3	作品①の精読
		時間外学習の内容
	4	作品①の精読
	5	作品①の精読
	6	作品①の精読
	7	作品①の精読
	8	先行研究論文の読解
	9	作品②について概説
	10	作品②の精読
	11	作品②の精読
	12	作品②の精読
	13	作品②の精読
	14	作品②の精読
	15	先行研究論文の読解
	16	レポート提出
	テキスト・参考文献・資料など The Riverside Shakespeare, ed. by G. Blakemore Evans (Houghton Mifflin, 1997), その他、初回の講義にて通知する。	
	学びの手立て 英和辞典、英英辞典を丁寧に引くように心がけること	
	評価 授業への貢献度と、学期末レポートによって評価する。	

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英米演劇特論Ⅱ	後期	月3	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	西原 幹子	1年		

学びの準備	ねらい 本稿では英米の作家によって書かれた劇作品の精読を通して、演劇というジャンルにおける表現形式の特徴を理解し、その読解に必要な基礎知識を習得することを目的とする。「英米演劇特論Ⅱ」では、アーサー・ミラーとテネシー・ウィリアムズの作品をそれぞれ一つずつ取り上げる予定である。	メッセージ 受講生は毎回、指定された範囲についてまとめたレジュメを用意し、重要なせりふを和訳する。
	到達目標 演劇作品の読解に必要な基礎力を身に付けることを目標にする。英語を出来る限り正確に読む力を鍛えると同時に、「英米演劇特論Ⅱ」では主として20世紀アメリカにおける演劇について理解を深める。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	講義説明・オリエンテーション	
	2	作品①について概説	
	3	作品①の精読	
	4	作品①の精読	
	5	作品①の精読	
	6	作品①の精読	
	7	作品①の精読	
	8	先行研究論文の読解	
	9	作品②について概説	
	10	作品②の精読	
	11	作品②の精読	
	12	作品②の精読	
	13	作品②の精読	
	14	作品②の精読	
	15	先行研究論文の読解	
	16	レポート提出	
	テキスト・参考文献・資料など 初回の講義で通知する。		
	学びの手立て 英和辞典、英英辞典を丁寧に引くように心がけること		
	評価 授業への貢献度と、学期末レポートによって評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英米詩特論 I	前期	月 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	西原 幹子	1年		

学びの準備	ねらい 本稿では英米詩の精読を通して、押韻や比喻の使い方など、詩の読解に必要な基礎知識を習得することを目的とする。「英米詩特論 I」ではイギリス・ルネッサンス期の詩を読む。	メッセージ 受講生は指定された内容について調べ、レジュメを用意したうえで授業に臨む。その際、辞書をしっかりと引いておくこと。
	到達目標 英米詩の読解に必要な基礎知識を身に付けることを目標にする。特に比喻表現においては一つの言葉に複数の意味が含まれるので、英語の辞書を丹念に調べ、多義的な解釈の可能性を踏まえつつ、英語を出来る限り正確に読む力を鍛える。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画	
	回	テーマ
	1	講義説明・オリエンテーション
	2	詩のコンベンション（約束事）について概説
		時間外学習の内容
	3	Christopher Marlowe 精読 (1)
	4	Christopher Marlowe 精読 (2)
	5	Christopher Marlowe 精読 (3)
	6	Christopher Marlowe 精読 (4)
	7	W. Shakespeare 精読 (1)
	8	W. Shakespeare 精読 (2)
	9	W. Shakespeare 精読 (3)
	10	W. Shakespeare 精読 (4)
	11	John Donne 精読 (1)
	12	John Donne 精読 (2)
	13	John Donne 精読 (3)
	14	John Donne 精読 (4)
	15	先行研究論文の読解
	16	レポート提出
	テキスト・参考文献・資料など Penguin Book of Renaissance Verse, ed. by David Norbrook (Penguin Classics, 1993)	
	学びの手立て	
	評価 授業への貢献度と、学期末レポートにより評価する。	

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英米詩特論Ⅱ	後期	月6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	西原 幹子	1年		

学びの準備	ねらい 本稿では英米詩の精読を通して、押韻や比喻の使い方など、詩の読解に必要な基礎知識を習得することを目的とする。「英米詩特論Ⅱ」では主としてアメリカの女流詩人を取り上げる。	メッセージ 受講生は指定された内容について調べ、レジュメを用意したうえで授業に臨む。その際、辞書をしっかり引いておくこと。
	到達目標 英米詩の読解に必要な基礎知識を身に付けることを目標にする。特に比喻表現においては一つの言葉に複数の意味が含まれるので、英語の辞書を丹念に調べ、多義的な解釈の可能性を踏まえつつ、英語を出来る限り正確に読む力を鍛える。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	講義説明・オリエンテーション	
	2	詩のコンベンション(約束事)について概説	
	3	Emily Dickinson の詩精読 (1)	
	4	Emily Dickinson の詩精読 (2)	
	5	Emily Dickinson の詩精読 (3)	
	6	Emily Dickinson の詩精読 (4)	
	7	作家とその時代について	
	8	先行研究の読解	
	9	Sylvia Plath の詩精読 (1)	
	10	Sylvia Plath の詩精読 (2)	
	11	Sylvia Plath の詩精読 (3)	
	12	Sylvia Plath の詩精読 (4)	
	13	作家とその時代について	
	14	先行研究の読解 (1)	
	15	先行研究の読解 (2)	
	16	レポート提出	
	テキスト・参考文献・資料など 初回の講義で通知する。		
	学びの手立て		
	評価 授業への貢献度と、学期末レポートで評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英米小説特論 I	前期	火 7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	素民喜 琢磨	1年		

学びの準備	ねらい 本講義は、「小説の読み方」に関する技術的な必須事項を修得することを目的とする。プロット、キャラクター、シンボリズム等に関して、実際の作品を読むことを通して学んでいくが、その最適な手段は、短編小説の精読であろう。そのため、本講義では、The Penguin Book of American Short Stories に収められている短編を読むこととする。個々の受講生は、各作品ごとに、あらずし、作品の	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） 上記 The Penguin Book of American Short Stories に収められている短編小説を読み進む。進度は、1作品につき、1回または2回の講義とする。
	テキスト・参考文献・資料など The Penguin Book of American Short Stories。他、必要に応じて適宜プリント教材を用いる。
	学びの手立て
	評価 毎回発表形式の講義形態をとるので、発表や発言等、講義への参加度と、作品講読後に課すレポート等により、総合的に判断する。

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英米小説特論Ⅱ	後期	火7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	素民喜 琢磨	1年		

学びの準備	ねらい 本講義は、前期開講の「英米小説特論Ⅰ」に引き続き、「小説の読み方」に関する技術的な必須事項を修得することを目的とする。講読作品としては、The Penguin Book of American Short Stories に収められている短編及び、その他の作品を読むこととする。個々の受講生は、各作品ごとに、あらすじ、作品のテーマや手法、その他の問題点などをまとめたレジюмеを作成し、講義に臨む。講義で	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） 上記 The Penguin Book of American Short Stories に収められている短編小説及び、その他の作品を読み進む。進度は、1作品につき、1回または2回の講義とする。
	テキスト・参考文献・資料など The Penguin Book of American Short Stories及びプリント教材。 上記講読作品の他、適宜紹介する。
	学びの手立て
	評価 毎回発表形式の講義形態をとるので、発表や発言等、講義への参加度と、作品講読後に課すレポート等により、総合的に判断する。

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英米批評特論 I	前期	火 6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	追立 祐嗣	1年		

学びの準備	ねらい	メッセージ
	到達目標	

学びの準備	到達目標
-------	------

学びの実践	学びのヒント 授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む)
	テキスト・参考文献・資料など

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など
-------	----------------

学びの実践	学びの手立て
-------	--------

学びの実践	評価
-------	----

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英米批評特論Ⅱ	後期	火6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	追立 祐嗣	1年		

学びの準備	ねらい	メッセージ
	到達目標	

学びの準備	到達目標
-------	------

学びの実践	学びのヒント 授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む)
	テキスト・参考文献・資料など

学びの実践	学びの手立て
-------	--------

学びの実践	評価
-------	----

学びの実践	評価
-------	----

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名 英米文化特論	期別 後期	曜日・時限 月6	単位 2
	担当者 クレイグ K ジェイコブソン	対象年次 1年	授業に関する問い合わせ Office: 5-421 mail: jacobsen@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい This course is designed to assist students in developing their skills in understanding and analyzing British and American culture with special consideration given to aspects of culture related to language and language teaching.	メッセージ If possible, students should choose a research topic related to their thesis.
	到達目標 Students should work independently on a research topic and bring any questions they might have to class.	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	Registration and Course Introduction	
	2	Defining Culture	
	3	Language and Culture	
	4	Origins of British Culture I	
	5	Origins of British Culture II	
	6	Modern British Culture I	
	7	Modern British Culture II	
	8	International Spread of British Culture	
	9	Origins of American Culture I	
	10	Origins of American Culture II	
	11	The Dominant American Culture	
	12	American Sub Cultures I	
	13	American Sub Cultures II	
	14	British and American Culture Returns Home	
15	Individual Consultation on Research Paper		
16	Student Presentations		
	テキスト・参考文献・資料など Readings provided by instructor. Students should prepare their written work in accordance with the APA Publication Manual.		
	学びの手立て		
	評価 Students will be evaluated on attendance, participation, a research paper and an oral presentation.		

学びの継続	次のステージ・関連科目 アジア文化特論
-------	------------------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	英米文学特論	集中	集中	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-山本 伸	1年	yamamoto@yokkaichi-u.ac.jp にて/授業終了後教室にて	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	ブルガリアの記号学者のツヴェタン・トドロフは、16世紀のアステカ文明征服の代償としてスペイン（ヨーロッパ）人が失った「ある種のコミュニケーション」が近代社会を構築する上で深刻な失点だったと述べています。トドロフのいう「ある種のコミュニケーション」とは一体なにか。それが持つ重要な意味とは何か。カリブと沖縄の歴史や文化、社会を通して考えていきます。	「木を見て森を見ず」にはならないように、現代世界全体における日本、そして沖縄を考えるためのあくまでひとつの素材としてカリブ文学を利用します。カリブ文学を理解することによって沖縄を理解し、現代世界を理解するのが目的ですので、受講者の沖縄の視点は極めて重要です。毎回、沖縄を常に意識しながら講義を進めていきたいと思っています。
到達目標	本専攻のポリシーの三本柱は、1. 実社会で通用する高度な英語力および日本語力を有し、自らの考えを発信する能力、2. 異文化理解に基づく多文化共生を可能とし、グローバル化する国際社会に対応できる能力、3. 他領域を横断した知識を備え、自らの専門分野で修得した学問や技術を社会に還元できる応用力であるので、まずは(1)自分の考えを十分に発信できたかどうか、次に(2)カリブという異文化を十分に理解できたかどうか、さらには(3)それらの発信力と理解を沖縄というローカリティおよび自己にいかにも還元して行けるのか（可能性の探究）、を明確に確認する。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス/授業説明/その他	
	2	カリブ海地域の歴史、社会、文化の概説①	
	3	カリブ海地域の歴史、社会、文化の概説②	トドロフ理論を知る
	4	トドロフ理論考察/カリブ文学におけるトドロフ理論的側面①	
	5	トドロフ理論考察/カリブ文学におけるトドロフ理論的側面②	多層的コミュニケーションについて
	6	コミュニケーションの多層性について/熊野の山里/牛井の「吉野家」①	
	7	コミュニケーションの多層性について/熊野の山里/牛井の「吉野家」②	ダンティカを原書で読む①
	8	ダンティカ原書講読①-1	
	9	ダンティカ原書講読①-2	ダンティカを原書で読む②
	10	ダンティカ原書講読②-1	
	11	ダンティカ原書講読②-2	ダンティカを原書で読む③
	12	ダンティカ原書講読③	
	13	ダンティカ原書購読の講評/まとめ	講義関連の自己テーマの発表準備
	14	課題の発表 & ディスカッション「見えないコミュニケーションの意味」①	
15	課題の発表 & ディスカッション「見えないコミュニケーションの意味」②		
16	まとめ & 試験		

実践	テキスト・参考文献・資料など テキスト：山本伸著『カリブ文学研究入門』（世界思想社）/配布プリント
----	--

学びの手立て	原書購読とありますが、ダンティカの英語はとて平易ですので心配はいりません。さらに、翻訳も併用しますので理解は深まるはず。ポイントは、カリブ海という異文化における「多層的なコミュニケーション（＝神や死者との対話、死生観、人間とは？ 生きるとは？）」を分析、理解しながら、沖縄に生きる今のこの自分というものを探求することです。授業では深みのある議論をおこなえればと思っていますので、積極的に発言できるようにご準備願います。
--------	---

評価	授業中の発言の積極性25%、自己テーマ発表25%、試験50%
----	--------------------------------

学びの継続	次のステージ・関連科目 修士論文に向けての総論的視点（より広い視野での現代世界観、他者との関連性を通しての自己、現代社会と沖縄、文化と社会、等々）を意識した研究姿勢へとつなげてほしいと思います。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	言語教育実習 I	後期	水 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	津波 聡	1年	satoshi@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい To improve teaching skills.	メッセージ
-------	------------------------------------	-------

到達目標	(1) To acquire basic knowledge of second language acquisition and English teaching. (2) To acquire basic teaching skills through class observations and teaching practicum. (3) To improve English proficiency through reading assignments and class discussions.
------	---

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>回</th> <th>テーマ</th> <th>時間外学習の内容</th> </tr> </thead> <tbody> <tr><td>1</td><td>Orientation</td><td></td></tr> <tr><td>2</td><td>Textbook reading & Discussion</td><td></td></tr> <tr><td>3</td><td>Textbook reading & Discussion</td><td></td></tr> <tr><td>4</td><td>Textbook reading & Discussion</td><td></td></tr> <tr><td>5</td><td>Textbook reading & Discussion</td><td></td></tr> <tr><td>6</td><td>Textbook reading & Discussion</td><td></td></tr> <tr><td>7</td><td>Textbook reading & Discussion</td><td></td></tr> <tr><td>8</td><td>Quiz</td><td></td></tr> <tr><td>9</td><td>Class observation & discussion</td><td></td></tr> <tr><td>10</td><td>Class observation & discussion</td><td></td></tr> <tr><td>11</td><td>Class observation & discussion</td><td></td></tr> <tr><td>12</td><td>Class observation & discussion</td><td></td></tr> <tr><td>13</td><td>Workshop</td><td></td></tr> <tr><td>14</td><td>Teaching Practice 1</td><td></td></tr> <tr><td>15</td><td>Teaching Practice 2</td><td></td></tr> <tr><td>16</td><td>Reflection</td><td></td></tr> </tbody> </table> <p>テキスト・参考文献・資料など Success in English Teaching by P. Davies & E. Pearse (Oxford)</p> <p>学びの手立て Students must read assigned chapters before the class.</p> <p>評価 Class participation 50% Quizzes 20% Assignments 30%</p>	回	テーマ	時間外学習の内容	1	Orientation		2	Textbook reading & Discussion		3	Textbook reading & Discussion		4	Textbook reading & Discussion		5	Textbook reading & Discussion		6	Textbook reading & Discussion		7	Textbook reading & Discussion		8	Quiz		9	Class observation & discussion		10	Class observation & discussion		11	Class observation & discussion		12	Class observation & discussion		13	Workshop		14	Teaching Practice 1		15	Teaching Practice 2		16	Reflection	
回	テーマ	時間外学習の内容																																																		
1	Orientation																																																			
2	Textbook reading & Discussion																																																			
3	Textbook reading & Discussion																																																			
4	Textbook reading & Discussion																																																			
5	Textbook reading & Discussion																																																			
6	Textbook reading & Discussion																																																			
7	Textbook reading & Discussion																																																			
8	Quiz																																																			
9	Class observation & discussion																																																			
10	Class observation & discussion																																																			
11	Class observation & discussion																																																			
12	Class observation & discussion																																																			
13	Workshop																																																			
14	Teaching Practice 1																																																			
15	Teaching Practice 2																																																			
16	Reflection																																																			

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	言語教育実習Ⅱ	後期	月4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	尚 真貴子	1年	syo@okiu.ac.jp 研究室 5410	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	初・中・上級の日本語教科書を教材研究し指導案を作成していく。そして、教材作成の方法や評価方法他を学んでいく。その後、模擬授業を経て、教壇に立つ。教壇実習は、本学で開講されている日本語クラスや夏期日本語研修プログラムか海外で行う。その場合は、台湾の東海大学か中国の福建師範大学、あるいはタイのパンヤーンピワット経営大学で、3週間の実習を行うことになる。	教壇実習が修士論文の内容と繋がるように実施していきましょう。
到達目標	初・中・上級の日本語教科書を教材研究し、指導案の作成ができるようになる。教壇に立ち、留学生のための日本語クラスで実習を経験し、将来は、日本国内外でも働ける人材として活躍できるようになる。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション（講義概要の説明等）	
	2	外国語教授法の復習	
	3	初級クラスの指導法及び指導案作成	
	4	初級クラスの模擬授業	
	5	中・上級クラス（文法）の指導法及び指導案作成	
	6	中・上級クラス（読解）の指導法及び指導案作成	
	7	中・上級クラス（作文）の指導法及び指導案作成	
8	中・上級クラス（聴解・会話）の指導法及び指導案作成		
9	中・上級クラス（日本/沖縄事情）の指導法及び指導案作成		
10	中・上級クラスの模擬授業		
11	年少者のための指導法（他府県の事例）		
12	年少者のための指導法（沖縄県の事例）		
13	生活者のための日本語教育（他府県の事例）		
14	生活者のための日本語教育（沖縄県の事例）		
15	初級実習		
16	中・上級実習		
テキスト・参考文献・資料など	授業開始時に指示する。 ・津田塾大学言語文化研究所（2006）『第二言語学習と個別性—ことばを学ぶ一人ひとりを理解する—』春風社 ・土屋千尋編著（2005）『つたえあう日本語教育実習 外国人集住地域でのこころみ』明石書店 ・畑佐由紀子編（2008）『外国語としての日本語教育—多角的視野に基づく試み—』くろしお出版		
学びの手立て	事前に日本語教育の関する文献及び資料を熟読する。課題に関して文献調査しまとめ、必要に応じて教育現場等を訪問し、参考にする。教壇実習の前に、本学で開講されている初・中・上級クラスの授業観察もすると効果的である。		
評価	出席率・授業への貢献度・課題への取り組み・模擬授業・教壇実習などから総合的に評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 実習の経験を修士論文に活かしまとめていく。県内の日本語学校で経験を積んで行くことも、次のステージへの手助けとなるうる。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	言語とメディア	後期	水6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	兼本 敏	1年	研究室5-501 メール ; kanemoto@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい この講義は所謂マス・メディアを通じた言語を取り上げるのではない。視覚、聴覚を刺激するメディアを通して語学が学習される過程を理解し効果的な学習教材を実際に作成してもらうワークショップ型の講義となる。前半は既存の語学試験問題の分析を行う。後半は習得項目に適した教材を作成してもらう。教材は言語理論に基づき作成し、その有効性を検証する。	メッセージ 日頃から過去に自分が遭遇した言語習得に関する多種多様な測定法(テスト)に注意を向けて欲しい。
	到達目標 言語習得度を測るテストの形式が、何を測定しようとしているのか、その妥当性と補完すべき側面を推測できる洞察力を養い、実際にウェブ上で使用可能な試験を作成しデータ収集と分析に活用できる技能を習得する。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	参考文献の精読
	2	世界の言語テストの紹介と分析	参考文献の精読
	3	日本の言語テストの概要と解説	参考文献の精読
	4	日本の言語テストの概要と解説	言語テストの実際を調べる
	5	外国語の学習について	言語テストの実際を調べる
	6	外国語の学習について (対象言語を事例とする)	プロジェクトの模索
	7	e-Learning教材の紹介 既存の教材と言語学習理論の分析	試験教材の実施と分析
	8	e-Learning教材の紹介 既存の教材と言語学習理論の分析	
9	音韻・語順・語用に関するテスト問題の作成と評価・分析	対象言語のケーススタディー	
10	読解問題の作成と評価・分析	対象言語のケーススタディー	
11	ディスカッション	対象言語の選定	
12	プロジェクト(課題)の選定と方法論 ※以降、プロジェクト作成を開始する。	テスト問題の設計	
13	プロジェクト作成		
14	プロジェクト作成	プレゼンの練習	
15	完成課題のプレゼンテーションとディスカッション	プレゼンの練習	
16	完成課題のプレゼンテーションとディスカッション		
	テキスト・参考文献・資料など 講義の初日に紹介する。講義でも適宜紹介する。 関連項目は資料を配布する。 参考書籍 『世界の言語テスト』国立国語研究所編(くろしお出版) 『ことばの力学ー応用言語学への招待』白井恭弘(岩波新書) 『外国語学習の科学ー第二言語習得とは何か』白井恭弘(岩波新書)		
	学びの手立て エクセルやワードの基本的操作を必要とする。可能であればデータベースの作成ソフトや活用方法に興味を持ってもらいたい。		
	評価 作成した教材の有効性が50% 論理性と結果分析が50%		

学びの継続	次のステージ・関連科目 ウェブの利点を活用し測定試験を作成・公開し、データの収集・分析へと発展してもらいたい。 統計処理につなげてもらうことが望ましい。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	社会言語学特論	後期	木4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	李 イニッド	1年	研究室を訪問するときは必ず事前に予約を取る。e.lee@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 本講義では、社会言語学の諸分野に関する基礎知識、理論及び研究方法を学び、研究実践に繋げることを目的とする。	メッセージ ①使用言語：日本語・英語。②講義内容は受講者の興味やニーズによって変更する可能性がある。③受講者は課題として与えられた文献を精読し、レジュメにまとめて授業で発表する。論文要旨や疑問点などについてディスカッションを行う。
	到達目標 ①指定論文の輪読・発表・ディスカッションを通じて、学術論文を正確に読む・書く能力を養い、論理的・批判的思考力を育成する。 ②学んだ知識とスキルを自由な発想に基づき応用展開させる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画	
	回	テーマ
	1	Introduction イン트로ダクション
	2	What is Sociolinguistics? 社会言語学とは
	3	The Mirco-Macro Distinction ミクロ社会言語学とマクロ社会言語学
	4	Language Choice 言語の選択
	5	Variation & Change バリエーション・変化
	6	Gender & Age ジェンダー・年齢
	7	Ethnicity & Region 民族・地域性
	8	Social Class & Attitudes 社会階層・言語意識
学びの実践	9	Style, Context & Register スタイル・コンテクスト・レジスタ
	10	Language Contact 言語接触
	11	Language Maintenance, Shift & Endangerment 言語の維持・シフト・消滅危機
	12	Language Policy and Planning 言語政策と計画
	13	Applied Sociolinguistics (1) 応用社会言語学 (1)
	14	Applied Sociolinguistics (2) 応用社会言語学 (2)
	15	Research Project (1) 研究計画 (1)
	16	Research Project (2) 研究計画 (2)
テキスト・参考文献・資料など 配布資料 (英語・日本語)		
学びの手立て ①課題提出期限の厳守。②毎回課題論文を読んだ上で議論に積極的に参加する。自分なりの意見をもって授業に挑むための準備を行うことが必要。③学期末レポートの発表と提出があるので、早めに準備を行い、先行研究を調べておくことを強く勧める。		
評価 出席率及び授業参加態度(50%)、レポート及び口頭発表(50%)により総合的に評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 「マルチリンガル教育特論」、 「英語学特論」、 「日本語学特論」
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	多文化間教育特論	前期	水 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-伊佐 雅子	1年	isa@ocjc.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	異文化コミュニケーションの基礎概念と理論を学び、異文化摩擦の事例を通じて、家庭・学校・職場・地域社会・外国で日常的に起こりうる異文化間の誤解や摩擦を超えて、多文化社会で生きる上で必須となる実践的な対話力・人間関係力を養成する。	新聞や本を読み、国内や海外での多文化共生の問題を自分のこととして考えられる想像力が大事です。授業では考える力をつけるために、異文化の事例分析をし、またテーマに関する論文を読みます。

到達目標
1. 異文化背景をもつ人とのコミュニケーションに影響を与える基礎概念と理論を学ぶことができる。 2. 自分とは異なる常識やコミュニケーション・スタイルを認識できる。 3. 異質な他者との対話型コミュニケーションに必要な知識・スキル・態度を培う。

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	多文化社会に生きる上で、なぜ異文化コミュニケーションが必要か。	シラバスをよく読むこと
	2	コミュニケーションと文化	資料を読む
	3	言語と会話スタイル①言語	テキスト第1章を読む
	4	言語と会話スタイル②会話スタイル	テキスト第1章を読む
	5	非言語コミュニケーション	テキスト第2章を読む
	6	心理的要因（社会的認知、ステレオタイプ、偏見と差別）	テキスト第3章を読む
	7	カルチャーショック：留学生の異文化適応と帰国文化適応の問題	テキスト第3章を読む
	8	価値観	テキスト第4章を読む
	9	スキーマ理論と異文化コミュニケーション	テキスト第6章を読む
	10	文化とアイデンティティ：国際結婚	論文を読む
	11	グローバル化と英語教育－異文化コミュニケーションにおける言語選択	論文を読む
	12	多様な言語文化観を持った英語教員の育成	論文を読む
	13	インターカルチュラル教育としての日本語教育：多文化共生のコミュニケーション	論文を読む
	14	共文化コミュニケーション（世代間、性的マイノリティ、障がい者）	論文を読む
15	沖縄における多文化共生の問題（アメラジアン、海外につながる子どもの教育）	論文と本を読む	
16	未来をつくる教育（ESD）：ESDにおける共生（課題提出）	論文を読む	

実践	テキスト・参考文献・資料など ◎久米昭元・長谷川典子『ケースで学ぶ異文化コミュニケーション』有斐閣 ◎西田ひろ子編『異文化コミュニケーション入門』創元社 伊佐雅子編『（改訂新版）多文化社会と異文化コミュニケーション』三修社
----	--

学びの手立て	(履修の心得) ・少人数のクラスなので、欠席する場合は連絡すること。 ・予習はしておくこと。 ・プレゼン担当の方は責任をもってやってくること。 ・課題レポートの提出期限を守ること。
--------	--

評価	・毎回、授業では課題の発表がありますので、プレゼンの準備と発表（30%）とディスカッション（20%）と、課題提出（50%）。
----	--

学びの継続	次のステージ・関連科目 本講義を履修した後は、言語教育学領域の専門科目（英語教育学、日本語教育学、社会言語学、マルチリンガル教育特論）を受講し、グローバル化する国際社会に対応できる能力を養う。
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本語学特論	前期	月4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	下地 賀代子	1年	5-401(研究室) kshimoji@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	この授業では、現代日本語の文法論における様々なカテゴリーについて理解を深めることを目的とします。現在の日本語文法は、学校教育現場と研究との間で生じているズレなど、その位置づけに関して様々な問題を孕んでいます。関連文献を精読し、それぞれのカテゴリーに関する議論の流れをふまえた上で、問題点についての報告とディスカッションを行います。	活発な議論を期待しています。

到達目標	・日本語文法論に関する学問的動向を理解し、専門的な知識を身に付ける。
------	------------------------------------

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p><u>授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む)</u></p> <p>おおむね以下のように進めていきます。</p> <p>ガイダンス 日本語文法論の基礎的事項の概説および確認 検討するカテゴリーの選択 文献の精読 以下の項目に関する報告 ・選択した内容に関する先行研究の分析 ・疑問点、問題点 報告内容に関するディスカッション レポートについて</p> <p>なお、受講人数によって報告の回数を決定します。</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>・テキストは使用しません。講義内において資料を紹介、または配布します。</p>

学びの手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・各自の興味関心に基づいて報告対象とするカテゴリーを決めていきます。修士論文に関わらせのもよいです。 ・受講人数によっては複数回の報告を求める場合があります。
--------	--

評価	報告およびレポートの内容、討議への参加態度を総合的に判断します。
----	----------------------------------

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本語教育学特殊研究 I	通年	火 3	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	大城 朋子	1年	tomokoo@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい まず、日本語教育分野の先行研究について基礎的知識から専門的見識まで見識を深めていく。そして、研究計画書に基づき、研究テーマ、目的、意義をしばり、先行研究を読み込み、研究を進めていく上で必要となる一連の手法を習得していく。その後、調査の方法を絞り予備調査の実施まで行う。	メッセージ まずは先行研究に多くを学んでください。その際には、批判的に読み、問題点や課題も読み取って行ってください。そして、調査は何度も行えるわけではないので、用意周到に目的や手法を整えた上で実施につなげてください。
	到達目標 ・日本語教育研究の基本図書や論文等を分析的に読み込み、テーマと研究方法を絞っていく。 ・研究や調査の実現性を確認し、独自性や有益性の検証を行い、予備調査まで行う。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画	
	回	テーマ
	1	オリエンテーション（本学期的目標や講義の進め方の確認他）
	2	研究目的・意義について討議し、研究テーマの確認を行い、研究計画書を作成する。
	3	日本語教育研究の基礎
	4	テーマに沿った参考文献、資料のリストの作成。
	5	先行研究の博捜と読み込み（報告）①
	6	先行研究の博捜と読み込み（報告）②
	7	先行研究の博捜と読み込み（報告）③
	8	先行研究の博捜と読み込み（報告）④
9	夏期休暇中の調査・研究の実施状況の報告	
10	テーマの再確認、修論提出までの作業計画や修論概要を作成する。	
11	構成を確認し、論旨の一貫性や論文の独創性について考える。	
12	研究手法の検討、必要とされるステップの把握と確認	
13	予備調査のための調査票を作成し実施	
14	予備調査の結果とまとめ	
15	学会発表の準備	
16	夏期休暇中の調査・研究計画を作成	
実践	テキスト・参考文献・資料など テーマに沿って博捜した論文各種をテキストとする。 竹内理・水本篤（2012）『外国語教育研究ハンドブッカー研究手法のより良い理解のために』松柏社 中井精一編（205）『社会言語学の調査と研究の技法 フィールドワークとデータ整理の基本』おうふう他	
	学びの手立て 研究を進めていくには、まず先人が成した研究を学ばなければなりません。そのためにも、専門書を数多く読み込むことで複眼的な視点を養い、研究を究めて行ってください。	
	評価 出席状況、論文の読み込み、本調査実施までの一連の手法の実施、報告やレポート等を総合的に判断して評価する。	

学びの継続	次のステージ・関連科目 後期には、構成を整え方法論を再確認にし、調査結果を導きだして行ってほしい。
-------	--

※ポリシーとの関連性 学術的な手法で社会に必要な専門的技術を高いレベルまで磨き、専門家として地域社会と交流し貢献できる人材を育成していく。

[/演習]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本語教育学特殊研究Ⅱ	通年	火4	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	大城 朋子	2年	tomokoo@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 専門的見識を深め、課題や問題点を発見しながら検証を重ね分析・考察を行い結論を導き出す。研究の意義、そして、独自性をしっかり意識しながら進めていく。	メッセージ 関連分野の論文や文献を更に分析的に読み進め、それを各自の論文で議論や比較検証を行い、結論・考察・まとめを導いていってください。社会貢献につながるような独創的で意義のある研究を完成させてください。
	到達目標 ・数多の先行研究で見いだされた研究結果と各自の調査研究手法や結論等とを複眼的に比較分析し、論理の一貫性等を検証していく。 ・課題や問題点の見直し・推敲を重ね、研究の独自性や有益性の検証を重ねた上で結論や考察を導き、まとめていく。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画	
	回	テーマ
	1	春期休暇中の調査・研究の実施状況の報告
	2	論文構成の吟味。論理的・一貫性、実証性、体系性を踏まえて論文の全体構成を再点検する。
	3	7月の発表に向けて研究成果をまとめていく。
	4	〃
	5	〃
	6	〃
	7	中間報告の批評・批判等を踏まえて課題を確認し、計画を再確認する。
	8	夏期休暇中の調査・研究計画の報告
学びの実践	9	夏期休暇中の調査・研究の実施状況の報告
	10	修論の作成を進め、章ごとに報告・提出する。
	11	内容の独創性、論理的一貫性の再確認及び書式の点検
	12	12月の講義終了までに修論を仮提出する。(指導教員及び論文審査担当教員に提出)
	13	修論の手直し
	14	本提出
	15	最終口頭試験に向けて
	16	学会誌への投稿
学びの実践	テキスト・参考文献・資料など 関連資料等は適宜配布し指導を行うが、基本的には各自が参考文献や論文を見だし、議論の場に提供する。	
	学びの手立て 専門書を数多く読み込み、専門教員の指導や同志との意見交換や議論から学び、複眼的な視点を持って検証・推敲を重ね結論を導いていってください。	
	評価 研究の内容や研究手法、そして結論を導き出すまでの論文執筆に関わる一連の取り組みを総合的に判断し評価する。	

学びの継続	次のステージ・関連科目 次のステージは、社会あるいは博士課程ということになるので、院で研究を深めた専門的内容をそれぞれの分野でのニーズや進展に応えられるよう貢献していってください。
-------	---

※ポリシーとの関連性

専門分野の知識やスキルに加え、他分野への関心や知識も取り入れることができる応用力をバランスよく備えた人材を育成する。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本語教育学特論 I	前期	月 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	李 ヒョンジョン	1年	hlee@okiu.ac.jp 講義の前後にも受け付ける。	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	この講義では、今日における「社会・言語・文化」の関連という観点から日本語教育とは何かを考えていく。教員による講義に加えて文献購読およびディスカッションを交えながら、日本語教育学を学ぶうえで必要とされる知識・態度について考察する。また、講義や文献などを通して自分なりの教育的視点をしっかり持つことで、日本語教育世界に対する意識を高めていくことを目指す。	多文化共生社会における日本語教育では、新たな教育観や新たな教師と学習者の関係作りなどが求められています。この講義を通して、学生に「伝授する・させる」ではなく、「共に見つける」教育を考えていきましょう！
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・文献購読とディスカッションを通して、日本語教育学の動向を把握する。 ・文献を批判的に読んで考察することで、自らの教育観を再認識する。 ・日本語教育の様々な領域における現状問題と課題を見つける。 	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス	
	2	言語とは、外国語とは、日本語教育とは？	レジュメ作成・報告準備
	3	日本語教育の世界	レジュメ作成・報告準備
	4	世界の日本語教育	レジュメ作成・報告準備
	5	ミニ発表①	
	6	外国語教授法の流れと現在	レジュメ作成・報告準備
	7	何を教えるか	レジュメ作成・報告準備
8	どう教えるか	レジュメ作成・報告準備	
9	どう評価するか	レジュメ作成・報告準備	
10	ミニ発表②		
11	学習リソース	レジュメ作成・報告準備	
12	日本語教師とリソース	レジュメ作成・報告準備	
13	日本語学習者とリソース	レジュメ作成・報告準備	
14	教師と学習者	レジュメ作成・報告準備	
15	ミニ発表③		
16	まとめ		
実践	テキスト・参考文献・資料など	随時プリントを配布する。 ・国語研究所 編 (2006) 『日本語教育の新たな文脈』アルク ・遠藤織枝 (2011) 『日本語教育を学ぶ - 第二版 - 』三修社 など	
	学びの手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・講義で扱う文献の他に、日本語教育学に関連する文献をできるだけ読み込むことで、日本語教育の全般における知識やスキルを把握しましょう。 ・関連研究会や学会などにも興味を持つことで、日本語教育の動向を把握しましょう。 ・講義を通して得た視点を、自分の研究内容および手法にしっかりつなげていきましょう。 	
	評価	文献購読と報告・ディスカッション (50%)、ミニ発表およびレポートなど (50%)	

学びの継続	次のステージ・関連科目 後期の「日本語教育学特論Ⅱ」も受講すること。
-------	---------------------------------------

※ポリシーとの関連性

専門分野の知識やスキルに加え、他分野への関心や知識も取り入れることができる応用力をバランスよく備えた人材を育成する。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本語教育学特論Ⅱ	後期	月5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	李 ヒョンジョン	1年	hlee@okiu.ac.jp 講義の前後も受け付ける。	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	「日本語教育学特論Ⅰ」に続き、今日における日本語教育とは何かについて考えていく。多文化共生時代の到来とともに変化しつつある今日、日本語教育世界でも従来とは異なる学習目標・環境および支援方法が求められている。この講義は、今日における日本語教育のあり方について考察していくことで、日本語教育学における新たな視点を持つことがねらいである。	多文化共生社会における日本語教育では、新たな教育観や新たな教師と学習者の関係作りなどが求められています。この講義を通して、学生に「伝授する・させる」ではなく、「共に見つける」教育を考えていきましょう！
到達目標	<ul style="list-style-type: none"> ・文献購読とディスカッションを通して、日本語教育学の動向を把握する。 ・日本語教育における多様性を認識し、現状問題と課題を新たな教育観で考察していく。 	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	ガイダンス	
	2	日本語・日本語教育とは何か	レジュメ作成・報告準備
	3	自らの言語教育観を持つ	レジュメ作成・報告準備
	4	多様化する日本語教育環境	レジュメ作成・報告準備
	5	ミニ発表①	
	6	今日における日本語教育事情	レジュメ作成・報告準備
	7	多文化共生と日本語教育	レジュメ作成・報告準備
8	構成主義の日本語教育	レジュメ作成・報告準備	
9	学習者主体と自律学習	レジュメ作成・報告準備	
10	ミニ発表②		
11	IT社会と日本語教育	レジュメ作成・報告準備	
12	日本語教育と日本語研究の関係	レジュメ作成・報告準備	
13	実践研究の方法	レジュメ作成・報告準備	
14	社会参加を目指す日本語教育	レジュメ作成・報告準備	
15	ミニ発表③		
16	まとめ		
テキスト・参考文献・資料など	<p>随時プリントを配布する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・佐々木倫子 他 (2007) 『変貌する言語教育-多言語・多文化社会のリテラシーとは何か-』くろしお出版 ・末田清子 編 (2011) 『コミュニケーション研究法』ナカニシヤ出版 ・蒲谷宏、細川英雄 (2012) 『日本語教育学序説』朝倉書店 など 		
学びの手立て	<ul style="list-style-type: none"> ・文献購読や講義などに留まらず、関連研究会や学会などにも興味を持つことで、日本語教育の動向を把握しましょう。 ・講義を通して得た視点を、自分の研究内容および手法にしっかりつなげていきましょう。 		
評価	文献購読と報告・ディスカッション (50%)、ミニ発表およびレポートなど (50%)		

学びの継続	次のステージ・関連科目
	<ul style="list-style-type: none"> ・「言語教育実習Ⅱ」を通して実践的スキルを養いましょう。 ・特殊研究を通して修士論文作成に力を入れていきましょう。

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本語論文の書き方 I	前期	金 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-高橋 美奈子	1 年	minakot@edu.u-ryukyu.ac.jp	

学びの準備	ねらい “この授業では、日本語で修士論文を書くために必要な知識・技能を習得することを目的とする。具体的に前期では、論文の定義や実質的条件を学び、その上で、論文の形式的条件、例えば、論文の組み立て方や論文を書くために知っておくべきルールを学ぶ。最終的には自身の修士論文のテーマに沿った論文構成の作成を目指す。”	メッセージ 修士論文の研究内容については、ゼミ指導教員の先生方にお任せしますが、論文の形式的な側面については、少しでも力になれたらと思っております。修士論文提出までがんばりましょう。
	到達目標 1. 論文と他の文章の違いを理解できる。 2. 論文執筆までの手順がわかる。 3. 論文の構成や体裁など、論文の形式的なルールについて理解できる。 4. 論文を書くために必要な文献収集や図書館の使い方などがわかる。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	
	2	論文とは何か	
	3	論文作成のための具体的な手順	
	4	論文の構成 1	
	5	論文の構成 2	
	6	論文を書くためのルール 1	
	7	論文を書くためのルール 2	
	8	論文を書くためのルール 3	
	9	論文を書くためのルール 4	
	10	文献・資料の収集法 1	
	11	文献・資料の収集法 2	
	12	文献・資料の収集法 3	
	13	論文構成の作成 1	
14	論文構成の作成 2		
15	論文構成の作成 3		
16	論文構成と論文執筆計画の提出		
実践	テキスト・参考文献・資料など “木下是雄 (1994) 『レポートの組み立て方』ちくま学芸文庫 斉藤孝 (1998) 『学術論文の技法』日本エディタースクール出版部 浜田麻里 他 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版 新堀聡 (2002) 『評価される博士・修士・卒業論文の書き方考え方』同文館 道田泰司・宮元博章 (1999) 『クリティカル進化論』北大路書房 細川英雄 (2008) 『論文作成デザイン』東京図書		
	学びの手立て 基本的に欠席連絡や講義の質問等、連絡事項はメールでお願いします。欠席する場合には、事前にメールで連絡してください。また、欠席当日が課題提出日の場合には、メールでその翌日までに提出してください。		
	評価 1. 平常点 (60点) : 各回の課題提出、議論、発表などの評価 2. 最終レポート (40点) : 修士論文の構想レジュメならびに「論文とは何か」のレポートの提出による評価		

学びの継続	次のステージ・関連科目 後期の「日本語論文の書き方II」はこの科目の継続科目です。「日本語論文の書き方II」では、前期に学んだことを実践していきますので、適宜、テキストや参考文献等をよく読み、復習をしておいてください。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	日本語論文の書き方Ⅱ	後期	火4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-高橋 美奈子	1年	minakot@edu.u-ryukyu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>この授業では、前期の「日本語論文の書き方I」に引き続き、日本語で修士論文を書くために必要な知識・技能を習得することを目的とする。具体的に前期で作成した論文構想に従って、論文の草稿（序論）を執筆することを目指す。さらに、修士論文の一部を研究会で発表あるいは紀要等の研究雑誌論文への投稿を目指す。</p>	<p>修士論文の研究内容については、ゼミ指導教員の先生方にお任せしますが、論文の形式的な側面については、少しでも力になればと思います。修士論文提出までがんばりましょう。</p>

学びの準備	到達目標
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 論文に必要な先行研究の収集ができる。 2. 論文の形式的なルール（引用の仕方、論文構成、注の書き方など）に従って、論文を書くことができる。 3. 論文の序論を書くことができる。 4. 研究会や学会等の発表要領、紀要等の研究論文執筆要領を理解し、それに従った申請書を書くことができる。

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	
	2	論文の構想発表	
	3	「研究テーマ」（テーマ設定の理由）を書いてみよう	
	4	「研究の目的と方法」を書いてみよう1	
	5	「研究の目的と方法」を書いてみよう2	
	6	「研究背景」（先行研究）を書いてみよう1	
	7	「研究背景」（先行研究）を書いてみよう2	
	8	「研究背景」（先行研究）を書いてみよう3	
	9	「はじめに」と「序論」をまとめてみよう1	
	10	「はじめに」と「序論」をまとめてみよう1	
	11	「はじめに」と「序論」をまとめてみよう1	
	12	扱うデータを紹介してみよう	
	13	データの分析をしてみよう1	
	14	データの分析をしてみよう2	
15	データの提示の仕方を工夫してみよう		
16	論文の「序論」の発表・提出		

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など
	<p>木下是雄（1994）『レポートの組み立て方』ちくま学芸文庫 斉藤孝（1998）『学術論文の技法』日本エディタースクール出版部 浜田麻里 他（1997）『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版 新堀聡（2002）『評価される博士・修士・卒業論文の書き方考え方』同文館 道田泰司・宮元博章（1999）『クリティカル進化論』北大路書房 細川英雄（2008）『論文作成デザイン』東京図書</p>

学びの実践	学びの手立て
	<p>基本的に欠席連絡や講義の質問等、連絡事項はメールでお願いします。欠席する場合には、事前にメールで連絡してください。また、欠席当日が課題提出日の場合には、メールでその翌日までに提出してください。</p>

学びの実践	評価
	<ol style="list-style-type: none"> 1. 平常点（60点）：各回の課題提出、議論、発表などの評価 2. 最終レポート（40点）：修士論文の「序論」および研究会発表要旨・紀要等への研究要旨の提出による評価

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>次なるステージは、やはり修士論文の執筆です。データの収集・分析・考察などかなり時間を要しますが楽しい作業です。がんばってください。</p>
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	米文学特殊研究 I	通年	水 6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	追立 祐嗣	1年		

学びの準備	ねらい 本演習では、まず修士論文執筆のための技術的な必須事項を確認した後、個々の受講生の論文テーマの設定、資料の収集、アウトラインの作成等の作業に対して指導を行う。また同時に、実際にアメリカ文学の作品を熟読し、作品のテーマや手法を中心に考察し、併せて作品に関する批評を検討する。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） 修士論文執筆に関する指導は、必要に応じて随時行う。実際の講義においては、アフリカ系アメリカ人の文学を中心に、「二重意識」の問題に焦点を当てた作品である、Richard Wright 著『Native Son』、Ralph Ellison 著『Invisible Man』、Toni Morrison 著『The Bluest Eye』等の講読を予定している。但し、受講生の修士論文執筆予定の分野からの作品講読も、個別に相談の上、検討する。
	テキスト・参考文献・資料など Richard Wright 『Native Son』、その他。 上記講読作品の他、適宜紹介する。
	学びの手立て
	評価 毎回発表形式の講義形態をとるので、発表や発言等、講義への参加度と、作品講読後に課すレポート等により、総合的に判断する。

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	マルチリンガル教育特論	前期	木4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	李 イニッド	1年	研究室を訪問ときは必ず事前に予約を取ること。e.lee@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>A general introduction to the study of multilingualism and multilingual education. Students will gain an understanding of the key perspectives that have been posed about multilingualism, issues surrounding the teaching and learning of a 2nd or 3rd language, and practices in diverse social and educational contexts around the world.</p> <p>到達目標</p> <p>①指定論文の輪読・発表・ディスカッションを通じて、学術論文を正確に読む・書く能力を養い、理論的思考力を高める。②学んだ知識とスキルを応用して何らかの実証研究を行うことができる。</p>	<p>①使用言語：日本語・英語。②講義内容は受講者の興味やニーズによって変更する可能性がある。③受講者は課題として与えられた文献を精読し、レジュメにまとめて授業で発表する。論文要旨や疑問点などについてディスカッションを行う。</p>

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	Introduction イン트로ダクション	各回の授業ごとに指示する。
	2	Terminological inconsistencies 用語の定義 (1)	”
	3	Becoming multilingual 多言語習得 (1)	”
	4	Becoming multilingual 多言語習得 (2)	”
	5	Staying multilingual 多言語能力の維持 (1)	”
	6	Staying multilingual 多言語能力の維持 (2)	”
	7	Acting multilingual 多言語使用・混用 (1)	”
8	Acting multilingual 多言語使用・混用 (2)	”	
9	Multilingual society & negotiation of identities 多言語社会とアイデンティティ (1)	”	
10	Multilingual society & negotiation of identities 多言語社会とアイデンティティ (2)	”	
11	Multilingualism in education 教育現場における多言語化の現状と課題 (1)	”	
12	Multilingualism in education 教育現場における多言語化の現状と課題 (2)	”	
13	Students and teachers in the multilingual classroom 多言語教室の実態 (1)	”	
14	Students and teachers in the multilingual classroom 多言語教室の実態 (2)	”	
15	Research topics 研究課題 (1)	”	
16	Research topics 研究課題 (2)	”	
テキスト・参考文献・資料など 配布資料 (英語・日本語)			
<p>学びの手立て</p> <p>①課題提出期限の厳守。②毎回課題論文を読んだ上で議論に積極的に参加する。自分なりの意見をもって授業に挑むための準備を行うことが必要。③学期末レポートの発表と提出があるので、早めに準備を行い、先行研究を調べておくことを強く勧める。</p>			
<p>評価</p> <p>出席率及び授業参加態度(50%)、レポート及び口頭発表(50%)により総合的に評価する。</p>			

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>「社会言語学特論」、「英語学特論」、「日本語学特論」</p>
-------	--

※ポリシーとの関連性 ヨーロッパ連合の形成によって、多言語、多文化の共生社会を求め
ていかなばならないヨーロッパを知ることは、異文化理解を促す。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	ヨーロッパ文化特論	後期	木6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-漆谷 克秀	1年	授業終了後の受け付ける。	

学びの準備	ねらい 「多様性の中の統一」という理念でヨーロッパ連合の試みが実行されている。戦争の世紀を経てきた反省から「対話」による平和の希求、「文化的多元性の尊重」、そのような理念を支える文化的、思想的、地域的基盤を考える。	メッセージ 現代社会は、議会制民主主義、市場経済にもとづく資本主義の枠組のうちに成立している。この枠組を形成し、先導してきたのがヨーロッパである。現在のヨーロッパの取り組みを考えることは、将来の日本の形成につながっていくと認識できるでしょう。
	到達目標 「多様性の中の統一」という理念によるヨーロッパ連合の形成は今も続いている。そのために、どのような努力が払われてきたか、また、現在もどのような努力が払われているか、を知る。其れを可能とした文化的、宗教的、地域的な基盤とその差異を併せて知るようになる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画	
	回	テーマ
	1	講義説明、オリエンテーション
	2	「ヨーロッパ」の概念の変遷、ヨーロッパを再考
	3	EUの歴史と現在
	4	ヨーロッパ諸言語の歴史的親近性
	5	EUにおける多言語主義
	6	ヨーロッパ諸文化の神話と民話
	7	近代ヨーロッパ社会における音楽と文学
	8	二大思想潮流から辿るヨーロッパ思想史①
9	二大思想潮流から辿るヨーロッパ思想史②	
10	ヨーロッパにおけるキリスト教の変遷	
11	キリスト教諸宗派の比較	
12	19世紀末からのヨーロッパのモダニズム芸術の誕生と変遷	
13	女性芸術家たち、ジェンダーの視点	
14	日欧交流史	
15	ヨーロッパとはなにか、EUの試みは成功するか	
16	レポート提出	
	テキスト・参考文献・資料など 『ヨーロッパ学入門（改訂版）』武蔵大学人文学部ヨーロッパ比較文化学科編（朝日出版）	
	学びの手立て 「なにか?」、「なぜか?」という知的な好奇心を持ってください。	
	評価 授業への貢献度、学期末のレポートで評価。	

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	学校臨床心理学特論	前期	月6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-牛田 洋一	1年	yushida@okiu.ac.jpあるいは講義後に教室にて	

学びの準備	ねらい 現在の学校における臨床心理学的支援は、スクールカウンセラーがその中心にいます。スクールカウンセラーは臨床心理士の活躍の場として大きな位置を占めています。本講座では学校臨床で問題なるテーマを取り上げ、すぐに役立つ実践家の知識を習得していくことを目指します。	メッセージ 自由で活発な議論の場を提供していきたいと思います。
	到達目標 講義の中では限定されたテーマで議論を重ねていきますが、テーマに対する理解だけではなく、各自がテーマに関する発表の準備と議論を重ねていく過程のなかで、今後の学校心理臨床実践の場で、すぐに役立つ人材になることを目指します。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション 学校臨床心理学とは	各自の課題を明確にしてくる
	2	学校臨床心理学の今日的課題：不登校	文献検索と発表準備
	3	学校臨床心理学の今日的課題：不登校	同上
	4	学校臨床心理学の今日的課題：いじめ	同上
	5	学校臨床心理学の今日的課題：いじめ	同上
	6	学校臨床心理学の今日的課題：緊急支援	同上
	7	学校臨床心理学の今日的課題：緊急支援	同上
	8	学校臨床心理学の今日的課題：ストレスマネジメント	同上
9	学校臨床心理学の今日的課題：アンガーマネジメント	同上	
10	学校臨床心理学の今日的課題：発達障害	同上	
11	学校臨床心理学の今日的課題：発達障害	同上	
12	学校臨床心理学の今日的課題：その他	同上	
13	事例検討（1）	議論のための準備	
14	事例検討（2）	同上	
15	学校臨床心理学総括	同上	
16	試験（口頭試問）	発表・議論を合わせて評価	
実践	テキスト・参考文献・資料など それぞれのテーマに沿って適宜紹介します。入手困難の文献については印刷配布します。また、各自が発表テーマに沿った文献を検索し、講義の中で紹介してください。		
	学びの手立て 各自がテーマに沿った知見を検索、検討しレジュメを作成し発表して頂きます。各自の発表に対して、受講者同士の積極的な議論を望みます。大学院では自ら積極的にテーマを追求していく姿勢が求められます。		
	評価 各自の発表・議論への参加（70%） 最終の口頭試問（30%）		

学びの継続	次のステージ・関連科目 学校臨床で役に立つ臨床心理の専門家となるためには、本講座でのテーマのみならず、臨床心理学、心理学全般の知識を広く身に付けていくことがいくことが必要となります。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	高齢者福祉特論	後期	月7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	保良 昌徳	1年		

学びの準備	ねらい	メッセージ
	到達目標	

学びの準備	
-------	--

学びの実践	学びのヒント 授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む)
	テキスト・参考文献・資料など

学びの実践	学びの手立て
-------	--------

学びの実践	評価
-------	----

学びの実践	次のステージ・関連科目
-------	-------------

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	社会心理学特論	前期	水6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-加藤 潤三	1年	jkato@ll.u-ryukyu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>本授業では、社会心理学的研究に必要な一連の知識、具体的には、社会心理学における理論から、研究方法（調査法、実験法など）や心理統計について、総合的に学ぶことを目的とする。なお個別的にどのようなテーマを扱うかについては、受講生それぞれの研究テーマに応じて、設定することとする。</p>	<p>社会心理学一般の学修のみならず、自身の研究テーマについて考えていってください。</p>
到達目標	<p>”①社会心理学的な研究法、理論について理解し、研究に応用できる。 ②心理統計に関する知識を身につけ、研究に応用できる。 ③自身の研究に関する知識や考察を深め、研究テーマを発展的に展開することができる。”</p>	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	
2	社会心理学における諸理論		
3	社会心理学的な研究法		
4	心理統計		
5	学生による発表	レポート・レジュメの作成	
6	学生による発表	レポート・レジュメの作成	
7	学生による発表	レポート・レジュメの作成	
8	学生による発表	レポート・レジュメの作成	
9	学生による発表	レポート・レジュメの作成	
10	学生による発表	レポート・レジュメの作成	
11	学生による発表	レポート・レジュメの作成	
12	学生による発表	レポート・レジュメの作成	
13	学生による発表	レポート・レジュメの作成	
14	学生による発表	レポート・レジュメの作成	
15	まとめ		
16			
	テキスト・参考文献・資料など 適宜指示する		
	学びの手立て 自律的な研究姿勢が必要です。		
	評価 ”発表およびレジュメ：70% 到達目標1・2・3の評価 ディスカッションへの参加：30% 到達目標1・2・3の評価”		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	社会福祉原理特論	通年	月6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	保良 昌徳	1年	講義の中で受け付ける オフィスアワーの活用を歓迎する	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>本講義では、現在の社会福祉政策や社会福祉実践に関わる基本的な部分に目を向け、福祉学の現状と今後の展望等について考察する。特に、社会福祉全体を支える基本的視点や実践の原理的な側面について、批判的に捉え直すとともに、福祉学に関わる諸理論への理解を深め、新たな地平の模索を試みる。</p>	<p>各課題について、日頃から関心を持ち、自主的に文献や資料の収集に努め、自分なりの視点の確立に心がけることが望ましい。</p>

到達目標	<p>① 講義修了後には、それぞれの課題について、事実やデータ、理論等に基づいたプレゼンテーションができるようになること</p> <p>② 特に、社会福祉の理論史、政策のながれと関連させながら説明ができるようになること</p>
------	---

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>一年を大きく5つに分け、以下のテーマに取り組む</p> <ol style="list-style-type: none"> 福祉学の学問的な位置づけと今後の展望 <ul style="list-style-type: none"> 学問とは何か、その成立要件とは何か等について考察する。 人間や社会に関わる諸学問ながれ、現状や課題等について理解する。 福祉学の学問的構造・位置づけ等について、自らのまとめを試みる。 社会福祉学の代表的理論の位置づけと課題について <ul style="list-style-type: none"> 日本における社会福祉学理論のながれと現状を理解する。 欧米における人間・社会に関する主な理論等と福祉学との関連を理解する。 諸理論と福祉学との関連においてまとめを試みる。 福祉国家の国際動向と日本のあり方 <ul style="list-style-type: none"> 福祉国家論の概要（ながれ・現状・課題等）を理解する。 いくつかの福祉国家の政策原理の課題等について考察する。 福祉国家の展望や課題等についてまとめを試みる。 社会福祉実践理論を今後の課題 <ul style="list-style-type: none"> 社会福祉施策の対人実践の基本原則・理念等について理解する。（日本） 地域・社会に対する福祉施策理念等について理解する。 ソーシャルワークの本質・原理等について理解する。 社会福祉援助・ソーシャルワーク等の関連性等についてまとめを試みる。 21世紀の日本の社会福祉の動向と展望 <ul style="list-style-type: none"> 日本の戦前から戦後、また戦後の社会福祉政策の基本的視点等について理解する。 特に90年代等から現在に至る改革の変遷及びその基本的視点について理解する。 今後の日本の福祉国家として将来像・あり方等についてまとめを試みる。
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>*必要に応じて提示する。</p> <p>*必要に応じて提示する。</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>講義中に提示された文献や資料を精読すること</p> <p>講義中の討論に積極的に参加すること</p>
	<p>評価</p> <p>*出席状況、レポートの提出状況とその内容、討論への参加とその内容および最終報告書の内容等をもとに総合的に評価する。</p>

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>講義の中で提示する</p>
-------	-------------------------------------

※ポリシーとの関連性

この科目では「個人や社会の福祉問題に関する適切な研究活動」の
土台となる見識や技法の一端を提供するものである。

[/一般講義]

科目 基本 情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	社会倫理学特論	前期	木4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	小柳 正弘	1年	mkoyanagi@okiu.ac.jp	

学 び の 準 備	ねらい 社会倫理学とは、人間のありようについて社会との関わりで哲学的な考察をおこなうものである。この授業では、「ひととひととがともにあることで実現される幸福」もしくは「ひととひととがともにあることで幸福を実現すること」としての「社会福祉」の原理と倫理について、テキストの批判的読解と受講者の議論により、多面的かつ根底的な検討を試みる。	メッセージ ともに考えることへの主体的な取り組みを求める。
	到達目標 「ライフストーリー」概念についての多面的な理解をふまえて、ライフストーリーが人間にとってもつ意味について、自身なりの考えをコンパクトに述べられるようになる。	

学 び の 実 践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） □授業は以下のような段取りでおこなう。 ・文献について受講者が交替で分担してレジュメ（A4、1～2枚、40字×30行）をつくり、概要を報告する。 ・報告担当者以外の受講者は批判的コメント（A4、1枚、40字×10行程度）を準備する。 ・概要とコメントふまえて全員で議論する。 □内容としては、援助やケアに関する各種の原理を批判的に考察するとともに、現場と理念を架橋する方法論を探索する。 今年度は、ライフストーリー・インタビューの批判的検討を行う。
	テキスト・参考文献・資料など ・山田富秋・好井裕明編『語りが拓く地平 ― ライフストーリーの新展開』せりか書房
	学びの手立て
	評価 報告、レジュメ、コメント、議論への貢献などを総合的に評価する。

学 び の 継 続	次のステージ・関連科目
-----------------------	-------------

※ポリシーとの関連性

障害学の研究成果について学び議論を深め、障害や障害の経験に関する研究活動を広げる機会とします。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	障害者福祉特論	後期	火6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	岩田 直子	1年	毎回の講義終了後に受け付けます。	

学びの準備	ねらい 国内外の障害者施策の歴史的発展プロセスを踏まえた上で、障害学の研究成果を学び、議論を深める。受講生の関心に合わせた文献も取り扱う。	メッセージ 障害・障害者の理解に向けて学術的取組みをする。
	到達目標 障害学に関する主要論文を多数読むことができる。障害学の視点から社会を問い直すことができるようになる。	

学びの準備	ねらい 国内外の障害者施策の歴史的発展プロセスを踏まえた上で、障害学の研究成果を学び、議論を深める。受講生の関心に合わせた文献も取り扱う。	メッセージ 障害・障害者の理解に向けて学術的取組みをする。
	到達目標 障害学に関する主要論文を多数読むことができる。障害学の視点から社会を問い直すことができるようになる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） 講義のオリエンテーション時に示す
	テキスト・参考文献・資料など 随時、論文、資料、文献を紹介していく ①コリン・バーンズ他著杉野昭博他訳『ディスアビリティ・スタディーズ～イギリス障害学概論』、明石書店。 ②杉野昭博(2007)『障害学～理論形成の射程～』、東京大学出版会。 その他

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など 随時、論文、資料、文献を紹介していく ①コリン・バーンズ他著杉野昭博他訳『ディスアビリティ・スタディーズ～イギリス障害学概論』、明石書店。 ②杉野昭博(2007)『障害学～理論形成の射程～』、東京大学出版会。 その他
	学びの手立て 障害学に関する文献および論文を多数紹介するので、それをしっかり読みましょう。障害学や障害者福祉に関する研究会に積極的に参加しましょう。

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など 随時、論文、資料、文献を紹介していく ①コリン・バーンズ他著杉野昭博他訳『ディスアビリティ・スタディーズ～イギリス障害学概論』、明石書店。 ②杉野昭博(2007)『障害学～理論形成の射程～』、東京大学出版会。 その他
	学びの手立て 障害学に関する文献および論文を多数紹介するので、それをしっかり読みましょう。障害学や障害者福祉に関する研究会に積極的に参加しましょう。

学びの実践	評価 ①事前学習課題の取り組み、②講義時の積極的参加の状況、③レポート内容を総合的に評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目 次のステージ：学内外の情報保障の実践の場に積極的に関わり、演習で学んだことを活かしましょう。 関連科目：障害者に対する支援と障害者自立視線制度、障害学、相談援助の理論と方法、教職課程の諸科目。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	障害児（者）援助特論	後期	火5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	知名 孝	1年		

学びの準備	ねらい この講義では、将来臨床心理士を希望する大学院生を対象に、「地域支援」や「ケースワーク・ソーシャルワーク実践」について、実践的な理解をすすめていくことを目的とする。精神科医療、児童福祉、障害福祉、発達障害児者支援、ひきこもり支援など、さまざまな分野において臨床心理士によるケースワーク・ソーシャルワーク具体的な実践の方法と知識について掘り下げていきたい。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	心理臨床とソーシャルケースワーク (1)	
	2	心理臨床とソーシャルケースワーク (2)	
	3	心理臨床とソーシャルケースワーク (3)	
	4	資源を学ぶ (障害福祉サービス) 1	
	5	資源を学ぶ (障害福祉サービス) 2	
	6	資源を学ぶ (学校教育福祉)	
	7	資源を学ぶ (精神保健福祉法に関わる資源)	
	8	資源を学ぶ (ひきこもり支援・児童福祉)	
	9	心理臨床としての地域支援・ケースワーク実践 (発達障害)	
	10	心理臨床としての地域支援・ケースワーク実践 (発達障害)	
	11	心理臨床としての地域支援・ケースワーク実践 (精神保健福祉)	
	12	心理臨床としての地域支援・ケースワーク実践 (ひきこもり介入)	
	13	心理臨床としての地域支援・ケースワーク実践 (児童福祉)	
14	心理臨床としての地域支援・ケースワーク実践 (触法少年)		
15	法人をつくる、資源をつくる		
16			
テキスト・参考文献・資料など 特定のテキストは設定していない。それぞれのテーマに添ったテキストを授業のなかで周知していく。 『ADHDの明日に向かって』（田中康雄著・星和書店） 『統合失調症を持つ人への援助論』（向谷地生良著・金剛出版）			
学びの手立て			
評価 1) 出席 2) 講義中のディスカッションへの参加（講義では学生とのやりとりを前提とする） 3) 講義中の課題の提出 4) 期末テストないしレポートの提出（どちらにするかは講義のなかで連絡する）			

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	心理学研究法特論	後期	木5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	泊 真児	1年	研究室：5号館534 stomari@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	臨床心理学を専攻する大学院生が、修士論文作成の中で用いることが多い心理学の研究法に焦点を当てる。文献の検索・収集・批判的検討から、研究デザインの策定、データの収集と解析、結果の考察と論文執筆、そして発表に至るまで、一連の科学的実証研究のプロセスを体得することを目指す。講義の中で、修士論文のデザインをブラッシュアップしていくことも目的の1つである。	講義形態は、いわゆる「授業」ではなく、「アクティブ・ラーニング」を重視したやり方とする。よって、卒業研究や修士論文研究デザインの発表、講義における意見表明や質問、対話や討論など、能動的な関与を求める。
到達目標	①「科学」および「心の科学」とは何かについて、自分なりの見識を持つことができる。 ②心理学研究の主要な方法論について理解し、その要点を人に説明することができる。 ③研究論文をクリティカルに読む方法の基礎が身につけられる。 ④講義内でのプレゼンと討議を通して、修士論文の研究デザインを洗練させることができる。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション・授業契約	次回講義内容の予習
	2	科学的(的)とは何か?について考える～定義・要件・心の科学論～	予習と復習・次回のレジュメ作成
	3	心理学の方法論(1)：実験法	同上
	4	心理学の方法論(2)：質問紙調査法	同上
	5	心理学の方法論(3)：面接法	同上
	6	心理学の方法論(4)：質的研究法	同上
	7	研究論文を批判的に読む(1)～クリティカル・リーディング入門～	同上
	8	研究論文を批判的に読む(2)～クリティカル・リーディング演習～	同上
	9	研究成果発表会(1)：卒業研究のプレゼンテーション	レジュメ作成・コメント内容の検討
	10	研究成果発表会(2)：卒業研究のプレゼンテーション	同上
	11	修士論文プレデザイン発表・検討会	同上
	12	修論作成に関わる主要論文の批判的検討(1)	同上
	13	修論作成に関わる主要論文の批判的検討(2)	同上
14	修論作成に関わる主要論文の批判的検討(3)	同上	
15	修士論文プレデザイン発表会	同上	
16	予備日		
テキスト・参考文献・資料など	テキストは特に指定しない。毎回の配布資料を中心に講義する。以下に参考書籍を示す。 宮本聡介・宇井美代子 編 2014 質問紙調査と心理測定尺度 サイエンス社 村井潤一郎 2012 Progress & Application心理学研究法 サイエンス社 浦上昌則・脇田貴文 2008 心理学・社会科学研究のための調査系論文の読み方 東京図書		
学びの手立て	実習や学外ボランティア等、やむを得ない事情で遅刻や欠席をする際は、なるべく事前に担当教員に連絡を入れること。難しい場合は、事後速やかに連絡すること。出欠状況は言うまでもなく、講義への主体的な関与度を評価します。 講師や他の受講生の話をうのみにせず、いったん自分の頭でクリティカルに考えてから咀嚼すること。 自分なりの視点と意見を持つように心がけること。		
評価	1. 講義への出欠状況と講義における意見表目、質疑応答、討論への積極的な参加が60% 2. プレゼンテーションや課題が40% 上記の1と2をもとに、総合的に評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 ・心理統計法特論を履修すると、データ解析法と研究法の関連性が理解しやすくなるだろう。 ・次のステージとして、臨床心理学特殊研究での修士論文作成に活かしてほしい。
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	心理統計法特論	前期	木5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	泊 真児	1年	研究室：5号館534 stomari@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>本講義では、実証研究を行う上での有力な手法である統計的データ解析法について、演習中心に学んでいく。目指すのは、受講生が可能な限り独力で、一通りの主要なデータ解析法が扱えるようになることである。受講生各自の研究デザインやデータとなるべく関連づけながら授業を展開し、実際にサンプルデータを用いてコンピュータと統計パッケージ(SPSS・Amos等)を用いたデータ解析を行う。</p>	<p>受講生のデータ解析法の知識やスキルを把握した上で、授業計画を若干調整したいと思います。“習うより慣れろ”で、まずやってみることが大切です。</p>
到達目標	<p>①心理学の研究でよく用いられる実験研究型のデータと調査研究型のデータを、一通り独力で分析できる。 ②収集されたデータの特徴に合わせて、適切な解析手法を適用できるようになる。 ③修士論文の研究で統計的なデータを収集した際に、本科目で身につけたデータ解析法を活用することができる。</p>	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	1週目：履修登録・オリエンテーション：本講義の進め方の説明等、心理学の研究法とは？	次回テーマについての予習
	2	2週目：研究デザインとデータ解析の関係 & 変数の分類と尺度水準	次回テーマの予習と今回の復習
	3	3週目：度数の違いの検定～ χ^2 乗検定と残差分析～	同上
	4	4週目：平均値の差の検定(1)～1要因分散分析～	同上
	5	5週目：2要因分散分析における主効果と交互作用とは？	同上
	6	6週目：平均値の差の検定(2)～2要因分散分析：実験参加者間計画～	同上
	7	7週目：平均値の差の検定(3)～2要因分散分析：実験参加者内計画～	同上
	8	8週目：2変数間の関係性の分析～相関分析と回帰分析～	同上
	9	9週目：因果モデルに基づく説明と予測のための方法～重回帰分析とパス解析～	同上
	10	10週目：多くの変数を少数の指標にまとめる方法～主成分分析と因子分析～	同上
	11	11週目：変数間の背後にある要因を探る方法～因子分析演習～	同上
	12	12週目：潜在変数を用いたデータ解析法～共分散構造分析(1)～基礎編	同上
	13	13週目：潜在変数を用いたデータ解析法～共分散構造分析(2)～応用編	同上
	14	14週目：実験・調査データの解析：総合演習	同上
15	15週目：データ解析総合演習：学期末課題演習	全学習内容の復習と課題作成	
16	16週目：予備日		

テキスト・参考文献・資料など	<p>教科書は特に指定せず、毎回の配付資料を中心に講義を進める予定です。下記は参考書籍です。</p> <p>古谷野 亘 (1988). 数学が苦手な人のための多変量解析ガイド 川島書店 小塩真司 (2005). 研究事例で学ぶSPSSとAMOSによる心理・調査データ解析 東京図書 小塩真司 (2011). SPSSとAMOSによる心理・調査データ解析 [第2版] 東京図書</p>
----------------	---

学びの手立て	<p>毎回の講義内容を積み上げ式に習得していくことが大切です。遅刻や欠席をすると理解が困難になることがありますので、ご注意ください。学部レベルの統計学の知識は、自学自習で身につけておくことが望ましいです。</p>
--------	--

評価	<ul style="list-style-type: none"> 成績評価は、平常点45%、学期末課題55%の内訳で、これらを総合して評価する。ただし、いずれも6割以上の成績を残すことが単位認定の条件となる。 平常点は、遅刻や欠席の状況、演習課題への取り組み状況を中心に評価する。 学期末課題は、参考書等の持込みを「すべて可」として実施する予定。
----	--

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <ul style="list-style-type: none"> 心理学研究法特論を履修すると、研究法とデータ解析法関連性が理解しやすくなるだろう。 次のステージとして、臨床心理学特殊研究での修士論文作成に活かしてほしい。
-------	--

※ポリシーとの関連性

人間福祉専攻学生が履修できる。臨床心理の実践力を身につけるための専門科目である。受講には臨床心理の基礎知識が必要。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	心理療法特論	集中	集中	2
	担当者 -古賀 聡	対象年次	授業に関する問い合わせ	
		1年	世話役教員平山まで (atsushi@okiu.ac.jp)	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>アルコール使用障害（依存症）をはじめとした嗜癖問題への心理臨床的支援の実践を理解する。防衛性や否認性の問題を抱え心理支援を受け入れることが難しい多様な対象者に対して、どのように介入を配慮していくのかを学ぶ。その実践方法としてアクション・メソッドを中心にその理論と方法論を体験的に学ぶ。</p>	<p>動作法、心理劇といったアクションメソッドの実習体験も予定しています。言語面接に加え、アクション・メソッドを習得することで、様々な対象への支援の幅が広がります。受講者の臨床心理学の知識や臨床心理学的技法の経験を考慮しながら講義・実習の進め方を修正する可能性があります。</p>
	到達目標	
	<p>精神科臨床においてはアルコール使用障害者への支援は重要である。沖縄県内のアルコール使用障害は多い。しかし、彼らのなかには治療に対する動機づけが難しい患者も多く存在する。また、高齢のアルコール使用障害者や発達障害や統合失調症等の精神疾患を合わせもつ患者に対しては言語的、認知的介入のみの支援には限界がある。本講義を通して、アクション・メソッドの理論や技法を習得し、そのエッセンスを生かした心理臨床上の工夫を臨床現場で活用できるような視点や発想、技術を身につけることを目的とする。</p>	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション 嗜癖者の心理と世代間連鎖	基礎知識の予習・復習
	2	社会心理学と学習心理学からの嗜癖行動の理解	基礎知識の予習・復習
	3	投映法を用いた嗜癖者の査定（ロールシャッハ・テストを中心に）	基礎知識の予習・復習
	4	嗜癖臨床と自助グループ（酒害体験者の語り）	基礎知識の予習・復習
	5	嗜癖臨床の実際① 認知行動療法 -なぜ・どのような時に飲んだのか？	基礎知識の予習・復習
	6	嗜癖臨床の実際② 解決志向アプローチ -飲まなかった時に何をしていたのか？	基礎知識の予習・復習
	7	嗜癖臨床の実際③-1 臨床動作法（講義・事例検討）	基礎知識の予習・復習
	8	嗜癖臨床の実際③-2 臨床動作法（実習）	実習体験を振り返ってミニレポート
	9	嗜癖臨床の実際④-1 ロールレタリング（講義・事例検討）	基礎知識の予習・復習
	10	嗜癖臨床の実際④-2 ロールレタリング（実習）	実習体験を振り返ってミニレポート
	11	嗜癖臨床の実際⑤-1 心理劇（心理劇の理論と事例検討）	基礎知識の予習・復習
	12	嗜癖臨床の実際⑤-2 心理劇（心理劇実習：ソシオドラマ）	実習体験を振り返ってミニレポート
	13	嗜癖臨床の実際⑥-3 心理劇（心理劇実習：サイコドラマ）	実習体験を振り返ってミニレポート
14	文学から学ぶ嗜癖（山頭火とレイモンド・カーヴァーの人生と作品から）	参考図書の読解	
15	統合的嗜癖治療プログラムの構築（試案） 虚しさに寄り添う・向き合う	講師の試案に対するミニレポート	
16	まとめとディスカッション	最終レポート	
	テキスト・参考文献・資料など		
	<p>心理劇や動作法についての基礎知識がない方は事前に読んでおくことが望ましい。 参考文献①「サイコドラマの技法」 高良聖 岩崎学術出版社 参考文献②「臨床動作法への招待」 鶴光代 金剛出版 参考図書③「Carver's dozen—レイモンド・カーヴァー傑作選」 レイモンド・カーヴァー著 村上春樹翻訳 中公文庫</p>		
	学びの手立て		
	<p>講義の中で受講生が支援者役—被支援者役でのロールプレイング、グループ体験の実習も取り入れる。積極的に取り組んでほしい。 学びを深めるために、沖縄県内で開催されている動作法の研修会、心理劇の研究会に参加することができる。</p>		
	評価		
	各講義時間における議論・実習への参加（50%）、ミニレポート（20%）、最終レポート（30%）		

学びの継続	次のステージ・関連科目
	臨床心理基礎実習および臨床心理実習 グループアプローチ特論

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	児童福祉特論	後期	火7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	比嘉 昌哉	1年	比嘉研究室：5-418 mahiga@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>「児童福祉特論」では、今日の子どもを取り巻く環境等を踏まえた上で主として学齢期における子どもの抱える諸課題について学び、さらに本人やその保護者を含む家族への支援について理解を深める。特に、スクールソーシャルワーク(以下、SSW)や社会的養護の現場に焦点をあて、同領域における子どもの権利、専門職のあり方等について理論を踏まえて実践過程について学ぶ。スクールソーシャ</p>	<p>学齢期における子どもの抱える諸問題について焦点をあてるため、平日頃より社会でどのような問題があるのか関心をもってほしい。その際、子どもやその家庭のニーズは何か、支援者として何をすべきか考えること。</p>
到達目標	<p>社会で生じている児童家庭福祉に関する諸問題を多角的視点から捉えることができる。また福祉現場の中核となる専門職として、新人職員等を指導できる力を身につける。</p>	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画(テーマ・時間外学習の内容含む)</p> <p>①オリエンテーション 授業の目的等 ②子どもを取り巻く現代的課題 その1(子どもの貧困) ③子どもを取り巻く現代的課題 その2(児童虐待) ④SSW理論 その1 ⑤SSW理論 その2 ⑥SSW実践 その1 ⑦SSW実践 その2 ⑧社会的養護：施設養護 その1 ⑨社会的養護：施設養護 その2 ⑩社会的養護：家庭的養護 その1 ⑪社会的養護：家庭的養護 その2 ⑫子どもの権利擁護システム その1 ⑬子どもの権利擁護システム その2 ⑭子ども支援者へのスーパービジョン その1 ⑮子ども支援者へのスーパービジョン その2 ⑯まとめ</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>必要に応じ適宜示すこととする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・門田光司(ほか)(2014)：『スクールソーシャルワーカーのスーパービジョン研究-日本・アメリカ・カナダ・韓国での調査報告-』科研費基盤研究B。 ・山下英三郎(2012)：『修復的アプローチとソーシャルワーク』、明石書店。 ・藤岡孝志(2008)：『愛着臨床と子ども虐待』、ミネルヴァ書房。
	<p>学びの手立て</p> <p>自らの関心や修士論文テーマとの関連で、本科目の内容を理解するように努めること。また、図書館等を活用し、関連する論文等を積極的に収集し、講読すること。加えて、学内外で行われる講演会・研修会等にも積極的に参加すること。</p>
	<p>評価</p> <p>授業態度、出欠状況、プレゼンテーション及び課題等を総合して評価する。</p>

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>他の講義・演習科目との関連を意識し、修士論文作成にむけて取り組むこと。</p>
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人格心理学特論	集中	集中	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-堀毛 一也	1年	授業終了後、適宜教室で受け付けます	

学びの準備	ねらい 人間のパーソナリティの特質や、把握のしかたについて、自然科学、人間科学、社会科学、それぞれの最新の知見やアプローチのしかたについて概説します。	メッセージ 集中講義なので、受講される側も大変だと思いますが、頑張ってください
	到達目標 パーソナリティにおける遺伝と環境の関連や、進化との関連について説明できること（自然科学）、人間性心理学や物語論的立場からのパーソナリティ理解について説明できること（人間科学）、動機や目標、また社会一認知的なパーソナリティの理解のしかたについて説明できること（社会科学）を目標とします。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	パーソナリティ研究の歴史と方法（イントロダクション）	第1～5週：自然科学的接近
	2	特性論の基盤	テキスト1・2・5・6章を読む
	3	ビッグ・ファイブ研究の展開	
	4	行動遺伝学的アプローチ	
	5	進化と人間性	
	6	ポジティブ心理学とポジティブな特性	第6～10週：人間科学的接近
	7	気質と自我の発達	テキスト3・4・7章を読む
	8	愛着理論の発展	
9	人間性主義的アプローチ		
10	物語論的アプローチ		
11	ポジティブ感情と動機付け	第11週～15週：社会科学的接近	
12	社会一認知的論の基盤	テキスト8～11章を読む	
13	特性論批判とCAPS理論		
14	状況・文化とパーソナリティ		
15	主観的well-beingの心理学		
16			
	テキスト・参考文献・資料など 教科書：榎本博明・安藤寿康・堀毛一也（共著） 2009 パーソナリティ心理学：人間科学、自然科学、社会科学のクロスロード 有斐閣アルマ ¥1900+税 ISBN978-4-641-12377-9 参考書は講義内で紹介します		
	学びの手立て 履修の心構え：これまでに受講してきた、パーソナリティ心理学に関連する知識を再度確認してきてください 学びを深めるために：事前に教科書に目を通してきてください。教科書に書かれている以外のことについても話をするので、事後学習で知識を深めてください		
	評価 毎回の出席を前提として、それぞれの日の講義内容について、レポートを書いていただきます（60点）。最終日には授業内容について総合的なレポートを提出していただきます（40点）。		

学びの継続	次のステージ・関連科目 本講義の内容を基盤として、臨床や福祉など、それぞれの専門領域の研究の展開に役立ててください
-------	--

※ポリシーとの関連性

本領域のカリキュラム・ポリシー「臨床心理査定・臨床面接・臨床心理学的地域援助の実践力を高める」ための専門科目に相当する。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	精神医学特論	後期	水6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	オムニバス	1年	世話役教員(井村弘子) h.imura@okiu.ac.jp 5号館424-2研究室 (098-893-3710)	

学びの準備	ねらい 精神医学の歴史と現状、医学における位置づけと領域、精神疾患の基礎知識(疾患の歴史と概念、疫学、成因、症状と経過、診断と治療、予後等)について学び、精神医学的援助と臨床心理学的援助の比較、協働していくための要点を修得することを目的とする。	メッセージ 精神科病院・クリニックで活躍されている精神科医師を招聘し、精神医学領域の諸問題について学ぶことができる貴重な講義である。
	到達目標 精神医学に関する専門的な知識を得る。 地域が抱える精神医学的な課題について、臨床心理学的な視点も交えて考察する。	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画(テーマ・時間外学習の内容含む)</p> <table border="0"> <tr> <td>第1回 統合失調症(1)</td> <td>第2回 統合失調症(2)</td> <td>第3回 気分障害(1)</td> </tr> <tr> <td>第4回 気分障害(2)</td> <td>第5回 発達障害(1)</td> <td>第6回 発達障害(2)</td> </tr> <tr> <td>第7回 発達障害(3)</td> <td>第8回 身体疾患と精神療法(1)</td> <td>第9回 身体疾患と精神療法(2)</td> </tr> <tr> <td>第10回 思春期・青年期の精神障害</td> <td>第11回 高齢者の精神障害</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第12回 不安障害</td> <td>第13回 パーソナリティ障害</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第14回 アルコール問題と精神障害</td> <td>第15回 ギャンブル問題と精神障害</td> <td></td> </tr> <tr> <td>第16回 精神医学と臨床心理学との協働</td> <td></td> <td></td> </tr> </table>	第1回 統合失調症(1)	第2回 統合失調症(2)	第3回 気分障害(1)	第4回 気分障害(2)	第5回 発達障害(1)	第6回 発達障害(2)	第7回 発達障害(3)	第8回 身体疾患と精神療法(1)	第9回 身体疾患と精神療法(2)	第10回 思春期・青年期の精神障害	第11回 高齢者の精神障害		第12回 不安障害	第13回 パーソナリティ障害		第14回 アルコール問題と精神障害	第15回 ギャンブル問題と精神障害		第16回 精神医学と臨床心理学との協働		
	第1回 統合失調症(1)	第2回 統合失調症(2)	第3回 気分障害(1)																			
	第4回 気分障害(2)	第5回 発達障害(1)	第6回 発達障害(2)																			
	第7回 発達障害(3)	第8回 身体疾患と精神療法(1)	第9回 身体疾患と精神療法(2)																			
第10回 思春期・青年期の精神障害	第11回 高齢者の精神障害																					
第12回 不安障害	第13回 パーソナリティ障害																					
第14回 アルコール問題と精神障害	第15回 ギャンブル問題と精神障害																					
第16回 精神医学と臨床心理学との協働																						
<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>講義資料は随時配布する。 石丸昌彦・仙波純一著 「精神医学特論」 (財)放送大学教育振興会 ほか</p>																						
<p>学びの手立て</p> <p>外部講師(精神科医師)を招聘して行われる講義なので、遅刻・欠席は厳禁。 貴重な機会なので、講師への質問、ディスカッションを積極的に行うこと。</p>																						
<p>評価</p> <p>出席状況、講義への参加態度、学期末試験(レポート)等で評価する。</p>																						

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>「臨床心理事例検討実習」「臨床心理基礎実習」「臨床心理実習」等の実習科目と関連するので、修士1年で履修することが望ましい。</p>
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	投映法特論	前期	金 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-稲田 梨沙	1年	稲田梨沙 <r.inada@okiu.ac.jp>	

学びの準備	ねらい 心理検査の中でも投映法検査について取り上げる。主にロールシャッハ・テストの適切な実施方法、結果の整理、解釈の基本的な考え方について体験的に学習した上で、検査報告書の書き方、テストバッテリーの組み方、心理的援助に結びつく総合所見の書き方などを身につけることを目的とする。	メッセージ 演習の一環として事前に必ず被験者体験をし、データを手元に用意すること。投映法検査について、各検査の成り立ち、目的、構成、手順、測定方法などについて各自整理しておくこと。
	到達目標 “投映法検査を臨床場面で実際に活用するには、さらなる研修が必要であるが、その基礎を学ぶ機会になればと考える。この科目を履修することによって主にロールシャッハ・テストの実施と結果整理ができるようになる。その分析や解釈方法については、事例を通して理解を深めることができるようになる。” ”	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	臨床心理学における心理査定について	臨床心理学の査定について調べる
	2	投映法被験者体験を振り返る	被験者体験後感想をまとめておく
	3	投映法検査概論	投映法検査の種類について調べる
	4	ロールシャッハ・テストの歴史と実施方法	ロ・テの歴史と実施 テキスト予習
	5	ロールシャッハ・テストの結果整理の方法	ロ・テの結果整理 ”
	6	ロールシャッハ・テストのスコアリング方法	ロ・テのスコアリング ”
	7	ロールシャッハ・テストの分析・解釈の方法	ロ・テの分析・解釈 ”
	8	架空事例のスコアリング実習	スコアリングをすべてまとめる
	9	架空事例の結果整理実習	結果を最後まで整理する
	10	事例Aのスコアリング実習	スコアリングをすべてまとめる
	11	事例Aの結果整理実習	結果を最後まで整理する
	12	事例Aの見立てと所見の書き方	所見の書き方について調べ学習
	13	スコアリングの実践	スコアリングをすべてまとめる
	14	結果整理の実践	結果を最後まで整理する
15	所見のまとめ方実践	所見を仕上げる	
16	最終レポート作成・提出（到達度の確認）	最終レポート作成・提出	
	テキスト・参考文献・資料など テキスト：片口安史 「改訂新・心理診断法」金子書房		
	学びの手立て ①履修の心構え 欠席するとその後の理解に支障をきたすため、皆出席かつ遅刻厳禁。 ②学びを深めるために 臨床現場でのボランティア活動等を行うことを奨励する。”		
	評価 ”評価方法 発表、討論への参加、提出されたレポート等から総合的に評価する。 割合 平常点(出席状況等) 30% 課題レポート50% 最終レポート20% 上記の評価方法については、講義初日に詳細に説明する。”		

学びの継続	次のステージ・関連科目 ”関連科目 「臨床心理査定演習Ⅰ」「臨床心理査定演習Ⅱ」を受講することが望ましい。 次のステージ 「臨床心理基礎実習」「臨床心理実習」「臨床心理事例検討実習」などを受講する中で、事例を通してさらに理解できることが望ましい。”
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特殊研究 I A	通年	水 7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	保良 昌徳	1年		

学びの準備	ねらい 本講のねらいは以下の通りとする。① 各自の研究テーマについて明確にする。② 先行研究を収集・精読し、現状の研究の状況や到達点等を明確にする。③ 研究の現状等の中で、自らの研究を位置づけ明確にする。④ 量的研究・質的研究等、また信頼性・妥当性等について十分理解する。⑤ 以下、各自の進捗状況に応じて、研究計画の作成等に取り組む。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>前期</p> <p>第1週～第3週 講義の概要説明・研究計画等に関する確認</p> <p>第3週～第10週 先行研究の精読及び報告</p> <p>第11週～第12週 研究方法に関する検討</p> <p>第13週～第14週 研究計画の発表（中間報告会）</p> <p>第15週 研究計画の確定・計画書の提出</p> <p>夏季休暇</p> <p>各自、自分の研究計画に基づく基礎調査の実施・まとめ作業を行う</p> <p>後期</p> <p>第16週～第17週 夏季休暇中の基礎調査結果の報告</p> <p>第18週～第22週 研究テーマ・先行研究の再検証</p> <p>第23週～第25週 研究の動向・方法に関する再検証</p> <p>第26週～第28週 研究テーマの確定（第2回中間報告会）</p> <p>第29週～第31週 研究計画書のまとめ・再提出</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じ、資料・コピー等を配信又は配布する。 ・受講生は自らの研究に関連して、①最も重要であると判断する文献、②研究の方法に関する文献、③論文作成に関する文献を、それぞれ一冊ずつ指定し常に持参すること。 ・必要に応じ紹介する。
	<p>学びの手立て</p>
	<p>評価</p> <p>本講の評価は、以下の項目をもって行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 出席等は一定の方法に従って採点する。 ② レポート等の提出状況及び内容 ③ 中間報告会等の内容 ④ その他

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特殊研究 I B	通年	水 5	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	安次富 郁哉	1年	担当教員宛にメールしてください。 i.ashitomi@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 本授業は、2年間で完成させなければならない修士論文執筆のための準備期間として位置づけ展開する。具体的な展開方法としては、①研究に対する意識を高める、②研究方法、特に量的調査研究方法の基礎を修得する。③論文執筆に必要な先行研究の検索と精読、④研究テーマの明確化、⑤研究プロトコルの策定、⑥プレ調査の実施と本調査計画の6点ある。	メッセージ 自身の研究に関する先行研究について精読する。
	到達目標 研究仮説を明確に示すことが出来、また、その仮説を説き明かすためのツールを十分に使いこなせるようになること。	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む)</p> <p>1週目 オリエンテーション</p> <p>2週目－3週目 保健・医療・福祉領域における研究テーマの紹介</p> <p>4週目－5週目 社会調査の概要：質的調査、量的調査 倫理と個人情報：学内倫理委員会 審査手続き等</p> <p>6週目－7週目 研究に対する意識：学会参加によって研究者としての意識を高める。</p> <p>8週目－10週目 研究領域の決定とテーマ及び仮説の明確化、先行研究の探索 及び精読</p> <p>11週目－15週目 修士論文執筆プロトコル検討及び夏季休暇中に研究対象フィールドの検討とプレ調査実施</p> <p>16週目－20週目 修士論文執筆プロトコル決定、本調査計画 (対象フィールド決定)、学内倫理委員会手続き</p> <p>21週目－22週目 本調査実施計画① 対象フィールド踏査</p> <p>23週目－30週目 本調査計画② 対象フィールドの特性を踏まえて調査計画を立案</p> <p>31週目 口頭試験</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>特に指定しない。</p> <p>①「道具としての統計学」ルイ・パストゥール医学研究センター・奥田千恵子著、金芳堂出版</p> <p>②「SPSSで学ぶ統計分析入門」馬場浩也 東洋経済新報社</p> <p>③その他の参考図書については、講義の中で随時紹介する</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>量的調査を主とする論文指導をおこなうため、統計手法には慣れておく必要がある。また、論文執筆には先行研究論文が重要であるため、多くの論文の精読をこころがける。</p>
	<p>評価</p> <p>出席・課題提出状況・口頭試験・討論への発言状況等を総合的に評価する。</p>

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>特殊研究 II をみすえてのプロトコルの作成、先行研究などの情報収集が必要となる。</p>
-------	---

科目 基本 情報	科目名	期 別	曜日・時限	単 位
	人間福祉特殊研究 I C	通年	水 5	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	小柳 正弘	1 年	mkoyanagi@okiu.ac.jp	

学 び の 準 備	ねらい 修士論文作成に必要とされる研究上の予備的作業を行う。	メッセージ
	到達目標 修士論文の構成、所要の調査の設計、先行研究の整理が終了し、自身の修士論文の目的、方法、意義について明確な説明ができるようになる。	

学 び の 実 践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>下記の手順で演習を進め、随時、発表・報告を行わせる。</p> <p>第1セメスター</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 問題意識の整理→研究計画書・学部卒業論文の吟味 2. 関連先行研究の概観→参考文献の収集とリストの作成 3. テーマの決定→基本文献の選定・問題の具体化・結論の展望 4. 研究手法の検討→必要とされる準備の把握・予備調査等の実施 5. 夏季休暇中の研究計画とセメスターのまとめを提出 <p>第2セメスター</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 参考文献の読みこみ→研究動向概要の作成 7. 研究上の位置づけ・意義の検討→研究テーマの再検討 8. 基本文献の読解／本調査の実施 9. 論点の整理→論文構成概略の作成 10. 春季休暇中の研究計画とセメスターのまとめを提出
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>なし。</p> <p>授業中に適宜、紹介する。</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>年度当初に入学までの研究実績（論文、レポート、研究計画、その他）のコピーを提出すること。</p>
	<p>評価</p> <p>論文作成のための予備的作業の進捗状況を中心に、授業への実質的なかわり、提出物の内容、発表・報告におけるプレゼンテーションなどを総合的に評価する。</p>

学 び の 継 続	次のステージ・関連科目
-----------------------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特殊研究ⅠD	通年	木5	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	岩田 直子	1年	授業終了後に教室で受け付けます。	

学びの準備	ねらい 社会福祉学研究全体の動向を理解した上で、自身の関心分野の研究動向を確認します。研究の進め方を理解し、研究計画を作成、検討します。受講生の研究テーマに寄り添いながら主要参考文献を発表し議論を深めます。	メッセージ 受講生の研究活動を応援します。
	到達目標 研究計画を立て、研究活動のプロセスを確立します。	

学びの準備	到達目標 研究計画を立て、研究活動のプロセスを確立します。
-------	----------------------------------

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p><第1セメスター></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 社会福祉学研究の概要を理解する。 2. 研究の進め方を理解する。 3. 問題意識の整理、参考文献の収集とリストの作成 4. 主要参考文献を精読、発表する。 5. 夏季休暇中の研究計画とセメスターのまとめを提出 <p><第2セメスター></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 主要参考文献を精読、発表する 2. 研究計画に沿って調査を実施する。 3. 春季休暇中の研究計画とセメスターのまとめを提出
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>随時紹介します。特定のテキストはありません。</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>学会や研究会に積極的に参加しましょう。他の学生の研究にも関心を持ち議論を深め視野を広げましょう。</p>
	<p>評価</p> <p>研究内容（70%）、研究の主体的取り組み状況（30%）</p>

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>次のステージ：人間福祉特殊研究Ⅱにつなげていきます。</p>
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特殊研究IE	通年	水6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	ドナルド クレイグ ウィロックス	1年		

学びの準備	ねらい 本授業のねらいは以下のとおりとする。 1. 研究方法に関する理解 2. 各自の研究テーマの確定 3. 専攻研究まとめと研究の位置づけの明確化 4. 研究計画(調査方法・時期、分析方法など)の確定 5. 基礎調査等の実施	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画(テーマ・時間外学習の内容含む)</p> <p>・授業と個別指導を取り混ぜながら行う。・前期では、研究の意味や基本的視点、研究に必要な情報検索・調査・分析に関する一般的な方法論、倫理等について再確認する。・論文購読、学会参加、実際の研究活動や発表に参加を通して研究活動についての理解を深める。・研究フィールドの確定と現場への参加を通して、実践例・事例等への接触と観察、基礎的な資料の作成を行う。・学会や研究会への参加を通して研究活動に取り組む。・講義終了までには、研究計画を完成させる。</p> <p><前期> 第1回：オリエンテーション 第2回：各自の研究テーマの紹介。 第3回：研究課題とフィールドの明確化。 第4～8回：研究の意味と基本的視点、情報検索・調査・分析に関する一般的な方法論、倫理等について再確認。 第9～10回：検索、方法の実際、論文購読。個別指導。 第11～14：中間報告(1回目)個別発表、全体検討、課題の明確化、個別指導。 第15回：前期のまとめ。 夏季休暇中：学会参加を奨励。 <後期> 第16～18回：中間報告会(2回目)個別発表、全体検討、課題の明確化。 第19～24回：先行研究・個別研究指導。 第25～28回：中間報告会(3回目)個別発表、全体討議、課題の明確化。 第29～30回：まとめ、提出、報告。</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>【テキスト】 沖縄で学ぶ 福祉老年学 (学文社) 金城 一雄・国吉 和子・山城 寛 編著 2009年 健康長寿の条件：元気な沖縄の高齢者たち (株式会社ワールドプランニング) 崎原 盛造・芳賀 博 2002年 【参考文献】 適宜、論文等を紹介する。</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>出席状況、講義への積極的な取り組み、提出物、課題など総合的に判断する</p>
	<p>評価</p> <p>①出席、レポート提出。②クラス討論、授業内での発表。③研究テーマの確定および取組状況。④研究発表報告の内容と達成度。 出席およびレポート提出状況を重視する。</p>

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特殊研究Ⅱ	通年	水6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	保良 昌徳	2年	講義の中で受け付ける オフィスアワーの活用を歓迎する	

学びの準備	ねらい これまでの調査・分析の結果を再検討し、論文を仕上げる 先行研究・自分の研究領域の位置づけを明確に説明できる 研究方法・信頼性・妥当性等について明確に説明ができる 自分の研究成果の意義について明確に説明ができる	メッセージ 類似の内容や方法の先行研究を精読理解し、自分の研究の方法・ 意義・成果等について説明ができるように常に意識すること
	到達目標 修士論文の完成	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	講義の中で提示する
	2	これまでの研究の進捗状況の確認	同上
	3	テーマについて再確認	同上
	4	先行研究と研究領域の現状について	同上
	5	研究分野における自分の研究の位置づけ	同上
	6	期待される成果・限界	同上
	7	研究の方法の確認	同上
	8	研究計画の再検討と今後の活動計画	同上
	9	補足調査等への取り組み①	同上
	10	上記取り組み	同上
	11	研究活動の再確認・検証・助言等	同上
	12	個別指導①	同上
	13	個別指導②	同上
	14	中間報告・発表準備	同上
	15	中間報告・指導・課題等の提示	同上
	16	夏期休暇中の研究の進捗状況について	同上
	17	進捗助教と補足指導	同上
	18	作業状況の確認・指導①	同上
	19	作業状況の確認・指導②	同上
	20	作業状況の確認・指導③	同上
	21	論文の仮提出	同上
	22	中間報告会・指導	同上
	23	提出論文の修正・指導①	同上
	24	提出論文の修正・指導②	同上
	25	提出論文の修正・指導③	同上
	26	完成論文としての提出	同上
	27	提出論文の再確認・指導	同上
	28	最終発表の準備①	同上
29	最終発表の準備②	同上	
30	最終発表	同上	
31			

学 び の 実 践	<p>テキスト・参考文献・資料など 必要に応じて指示又は資料やコピー等を配布する。 自らの研究に関連する論文・関連する文献等 論文作成に関する文献 上記の具体的内容は講義の中で提示する</p>
	<p>学びの手立て 学会での類似研究の動向に関心を持ち、情報収集に努めること 開催される学会には可能な限り参加し発表に触れること 発表の機会は可能な限り活用し、自分の研究への助言を多く得ること</p>
	<p>評価 作成された修士論文の完成度（80%）＋受講態度(20%)</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特殊研究ⅡA	通年	水6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	保良 昌徳	2年		

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>本講のねらいは以下のとおりとする。① これまでの2回のセメスターや調査の結果をもとに、最終的な修士論文を仕上げる。② 先行研究の状況、そこにおける自分の研究領域の位置づけを明確に説明できる。③ 自分の研究方法、特に調査法及びその信頼性・妥当性について、明確に説明ができる。④ 論文の構成・形式等について、十分な理解し、作成ができること。⑤ 自</p>	
	到達目標	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>本講の展開は以下のとおりとする。</p> <p>前期（第3セメスター）</p> <p>1週目－2週目 オリエンテーション・研究状況の報告</p> <p>3週目－4週目 個別指導（研究内容・進め方等の再確認）</p> <p>5週目－13週目 個別指導、修論ドラフトの提出</p> <p>14週目－15週目 中間報告会、まとめ</p> <p>後期</p> <p>1週目－2週目 オリエンテーション、論文の再確認</p> <p>3週目－10週目 個別指導（論文の添削指導）</p> <p>11週目－13週目 論文の仕上げ・最終校正、プレゼンの準備開始</p> <p>14週目－15週目 まとめ、要約作成、論文の提出</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要に応じて指示又は資料やコピー等を配布する。 ・受講生は自らの研究に関連して、①最も重要であると判断する文献、②研究の方法に関する文献、③論文作成に関する文献を、それぞれ一冊ずつ指定し常に持参すること。 ・講義の中で必要に応じて指示する。
	<p>学びの手立て</p>
	<p>評価</p> <p>本講の評価は以下の点を参考に行う。</p> <p>① 出席状況（学則に則る）</p> <p>② 支持された報告書等の提出状況</p> <p>③ 中間報告会の内容及び第三者の評価</p> <p>④ 論文の整い方や最終発表の内容</p>

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特殊研究ⅡB	通年	水6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	安次富 郁哉	2年	担当教員宛にメールしてください。 i.ashitomi@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	人間福祉研究ⅡBは、修士論文執筆の完成年度として、人間福祉研究ⅠBに引き続き開講される科目である。研究プロトコルに基づき量的調査あるいは質的調査を実施し、集計・解析してまとめ、修士論文を執筆する。したがって、本講義では、修士論文中間報告、修士論文提出、最終試験までの各プロセスにおける指導を重点的におこなうことを目的とする。	他研究者の論文を批判的視点から精読する。また、自身の研究に関する先行研究については、多くの論文を精読する必要がある。
到達目標	到達目標は伊阿寒通りである。①研究仮説を明確に示すことができる。②プロトコルに基づき、研究をすすめることができる。③研究仮説を明確に実証するために、専攻研究論文等を活用し、論理的に展開することができる。	

学びの実践	学びのヒント
	<p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>第1週目：オリエンテーション及び研究テーマ・研究仮説・研究方法等確認 第2週目から第5週目：研究プロトコルの確認と実際の研究の進め方 第6週目から第16週目：執筆指導及び中間報告内容確認・発表指導 第17週目から第27週目：中間報告指導及び提出論文指導 第28週目から第31週目：提出論文指導</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>テキストは特に指定しない。毎回の講義の資料については原則教員が準備して配布する。 参考図書・論文については、講義の中で随時紹介する。</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>論文執筆には先行研究論文が重要であるため、多くの論文を集め精読すること。</p>
評価	出席状況、課題提出状況及び課題等を総合的に評価する。

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>修士論文執筆を視野にいれた、論文精読が必要になる。他者の論文を批判的・客観的・建設的に読むようこころがける。</p>
-------	--

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特殊研究ⅡC	通年	木5	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	小柳 正弘	2年	mkoyanagi@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 修士論文を作成し、完成させる。	メッセージ
	到達目標 修士論文を完成し、その目的、方法、意義について、コンパクトに説明できるとともに、必要に応じて、詳細な補足説明ができるようになる。	

学びの準備	到達目標 修士論文を完成し、その目的、方法、意義について、コンパクトに説明できるとともに、必要に応じて、詳細な補足説明ができるようになる。
-------	--

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>下記の手順で演習を進め、随時、発表・報告を行わせる。</p> <p>第3セメスター</p> <p>①基本文献の読解／本調査の結果に関する考察 ②論文構成の吟味→論理的一貫性の検討 ③論文概要の作成→修士論文中間発表の準備 ④論文全体の草稿を作成 ⑤夏季休暇中の研究計画とセメスターのまとめを提出</p> <p>第4セメスター</p> <p>⑥内容の独創性・論理的一貫性の再検討 ⑦文献読解・調査手法などの妥当性の点検 ⑧書式の点検 ⑨論文の完成→最終試験・最終発表会の準備</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>【テキスト】 なし。 【参考文献】 授業中に適宜、紹介する。</p>

学びの実践	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>【テキスト】 なし。 【参考文献】 授業中に適宜、紹介する。</p>
-------	---

学びの実践	<p>学びの手立て</p> <p>年度当初に前年度までの研究実績（論文、レポート、その他）のコピーを提出すること。</p>
-------	---

学びの実践	<p>評価</p> <p>修士論文作成の進捗状況を中心に、授業への実質的なかわり、提出物の内容、発表・報告でのプレゼンテーションなど、修士論文完成の見込みを総合的に評価する。</p>
-------	---

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特殊研究IID	通年	木6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	岩田 直子	2年	授業終了後に教室で受け付けます。	

学びの準備	ねらい 特殊研究IIDの成果を踏まえながら研究を発展させる。先行研究を多角的に読み込み、研究の土台を築くと共に研究の独自性を追究する。研究成果を効果的に発表する技術を身につける。	メッセージ 論文を完成させ、研究成果を発表できるように応援します。
	到達目標 修士論文を完成させる	

学びの準備	
-------	--

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） <前期> 1. 調査の結果に関する考察 2. 論文構成の吟味 3. 中間発表の準備 4. 夏季休暇中の研究計画とセメスターのまとめを提出 <後期> 1. 内容の独創性・研究目的との整合性の検討 2. 文献読解・調査手法などの妥当性の点検 3. 論文まとめ 4. 最終試験・最終発表会の準備
	テキスト・参考文献・資料など 随時紹介します。特定のテキストはありません。
	学びの手立て 学会や研究会に積極的に参加しましょう。他の学生の研究活動にも関心を持ち議論を深め視野を広げましょう
	評価 研究内容（70%）、研究の主体的取り組み状況（30%）

学びの継続	次のステージ・関連科目 次のステージ：研究活動の経験を大学院終了後も続けることを期待します。
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特殊研究ⅡE	通年	水7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	ドナルド クレイグ ウィルコックス	2年		

学びの準備	ねらい 特殊研究Ⅰでの成果を基本に、各自の専門領域の確定と研究者としての自覚・技術を養いながら、理論・仮説の点検、調査実施方法の準備を行う。そして、調査実施・調査結果の整理等を行いながら、研究の精度を高め修士論文の完成を目指す。修士論文完成後の発表会においては、学会発表の行い方についても学ぶ。一連の作業過程を通して研究者としての基礎を築いていく。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 クラスでの報告、全体討論、個別指導を通して研究の指導を行う。 2 調査方法を確立し、調査資料の整理方法、統計資料としての処理方法等も進める。 3 調査を実施し、資料の処理を行う。 4 修士論文の作成を開始し、11月末前には修士論文の素案を提出。最終指導を開始する。 5 学会発表形式に準じた発表の方法・内容について学ぶ。 <p>第1回：講義の進め方に関する説明 第2回～5回：中間報告会①（研究活動の報告と討論、研究の進め方の指導） 第6回～11回：論文の構成・作成手順等の再確認。 調査における信頼性妥当性への配慮、分析方法への再確認を行う。 第12回～14回：中間報告会②（調査日程、分析方法） 第15回：前期のまとめ 第16回：後期の進め方に関する説明 第17回～26回：修士論文の提出へ向けて論文作成指導 第27回～30回：修士論文発表へ向けての指導</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>【テキスト】 特に指定はない。必要であれば指示をする。 【参考文献】 必要に応じて指示をする。</p>
	<p>学びの手立て</p> <p>参考文献や資料等は、積極的に収集・読解・整理しておくこと。 講義中は積極的に発言や討論に参加すること。</p>
	<p>評価</p> <p>出席・レポート・受講態度（質疑など）・修士論文などを総合的に評価する。</p>

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

※ポリシーとの関連性

この科目は「個人や社会の福祉問題に関する適切な研究活動」の土台となる見識の一端を提供するものである。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	人間福祉特論	後期	木4	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	小柳 正弘	1年	mkoyanagi@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい この授業は、テキストの批判的読解と受講者との議論により、人間と福祉とのかかわりについて原理的な考察をおこなうものである。	メッセージ 「ともに考える」ことへの主体的な取り組みを求める。
	到達目標 伝統的支援原理としての「隣人愛」がどのような意味で「現場の理念」となりうるか、いくつかの可能性をコンパクトに述べるができるようになる。	

学びの準備	到達目標 伝統的支援原理としての「隣人愛」がどのような意味で「現場の理念」となりうるか、いくつかの可能性をコンパクトに述べるができるようになる。

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p><input type="checkbox"/> 社会福祉の原理と人間の倫理を架橋する「現場の理念」となりうるものを探索・検討する。 今年度は、伝統的支援原理の一つである「隣人愛」についての原理的検討を行う。</p> <p><input type="checkbox"/> 授業は以下のような段取りでおこなう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・文献について受講者が交替で分担してレジюме（A4、1～2枚、40字×30行）をつくり、概要を報告する。 ・報告担当者以外の受講者は批判的コメント（A4、1枚、40字×30行程度）を準備する。 ・概要とコメントふまえて全員で議論する。
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>テキスト・遠藤徹『〈尊びの愛〉としてのアガペー』教文館</p>

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など テキスト・遠藤徹『〈尊びの愛〉としてのアガペー』教文館
-------	---

学びの実践	学びの手立て
-------	--------

学びの実践	<p>評価</p> <p>報告、レジюме、コメント、議論への貢献などを総合的に評価する。</p>
-------	---

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名 認知心理学特論	期別 前期	曜日・時限 月 5	単位 2
	担当者 前堂 志乃	対象年次 1年	授業に関する問い合わせ 研究室：5-431 e-mail:mshino@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 認知心理学の主要テーマ（知覚、思考、言語、記憶、感情、注意と意識など）の知見や理論を学ぶ。また、認知心理学や認知科学の分野で蓄積されてきた脳とこころの働きについての研究法についても学ぶ。文献の講読や対話を通じ「日常の中の認知的活動」と「脳と認知的活動」の2つの視点を意識して学び、認知心理学的視座から、ひと（自己と他者）の認知のあり方を理解する力を高める。	メッセージ 授業内・外で、「ものごとを認識すること、理解すること、考えること」というこころの働き（認知過程・認知活動）について、文献を読み、対話し、考える機会を多く経験してほしい。日頃から自分や人々のこころの動きや働き、認識と感情と行動の関係を意識的に観察してほしい。目に見えない認知について「観察し、読み、話し、考える」ことを楽しみ、自他のこころの理解に繋げてほしい。
	到達目標 ①認知心理学の知識をもちいて人間のこころの働きや諸問題について理解と考察を深める、認知心理学的視点を身につけることができる。 ②認知心理学的視点をもちいて、人間のこころの働きや諸問題について、深く検討し、問題解決にあたることができる。 ③認知心理学的視点をもちいて、臨床心理学的実践力や臨床心理学的研究力を高めていくことができる。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション・認知心理学とは	シラバス等の内容理解/観察課題
	2	自己の認知活動について意識するワーク①	次回のワークの準備
	3	自己の認知活動について意識するワーク②	次回のワークの準備/次回の予習
	4	自己の認知活動について意識するワーク③/認知心理学の歴史とテーマ	次回の予習/今回の復習
	5	視覚認知/感性認知	次回の予習/今回の復習
	6	注意/ワーキングメモリ	次回の予習/今回の復習
	7	長期記憶/日常認知	次回の予習/今回の復習
	8	カテゴリー化/知識の表象と構造	次回の予習/今回の復習
	9	言語理解	次回の予習/今回の復習
	10	問題解決と推論/判断と意思決定	次回の予習/今回の復習
	11	認知と感情/認知進化と脳	次回の予習/今回の復習
	12	認知的発達/社会的認知	次回の予習/今回の復習
	13	文化と認知/メディア情報と社会認識	次回の予習/今回の復習
	14	メタ認知	次回の予習/今回の復習
	15	認知心理学的視点で自己の課題を考える/まとめ	次回の予習/今回の復習/期末課題
16	予備日		

学びの実践	テキスト・参考文献・資料など テキスト：箱田裕司他（著）（2013）． 認知心理学 有斐閣 ＊テキストは毎回の授業に使用する。各自準備し、持参すること。 参考文献：必要に応じて資料を配布する。以下の①～③の参考図書を参照するとよい。 ①森敏昭・井上毅・松井孝雄（2009）． グラフィック認知心理学 サイエンス社 ②森敏昭・中條和光（2007）． 認知心理学キーワード 有斐閣叢書 有斐閣 ③日本認知心理学会（編）（2013）． 認知心理学ハンドブック 有斐閣ブックス 有斐閣
-------	--

学びの実践	学びの手立て ・予習・復習において、テキスト精読とワークシートのまとめ、日常観察を課します。予・復習の内容にもとづいて授業内での小グループワーク（課題について対話をしながら考える）を行います。「ひとの認知」について「よく読み、よく観察し、よく話し、よく考える」ことに積極的に取り組んでください。 ・「臨床心理学系科目の学び」、「心理臨床の現場経験と課題」、「日常の心の動きや行動」と「認知心理学」の学びを、関連づけながら物事を捉え考えることを意識して習慣づけてください。
-------	---

学びの実践	評価 平常点（出席状況、授業内ワークへの参加態度、予・復習ワークシートの内容と提出状況）…50% 期末課題（ポートフォリオとレポート課題の内容）…50%
-------	--

学びの継続	次のステージ・関連科目 本講義の内容を基盤として、臨床や福祉など、それぞれの専門領域の研究や実践の展開に役立ててください
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	犯罪心理学特論	前期	木7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	山入端 津由	1年		

学びの準備	ねらい 非行・犯罪のある者に対する的確な鑑別診断技法の学習及び心理教育・臨床心理学的援助技法の習得を目指す。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） 1 非行・犯罪を理解する基礎を学ぶ 2 非行・犯罪理論と非行・犯罪臨床 3 社会と個人の相互作用過程と非行・犯罪 4 非行・犯罪臨床と刑事政策 5 資質鑑別事例研究1（財産犯・経済犯罪） 6 資質鑑別事例研究2（暴力犯罪） 7 資質鑑別事例研究3（性暴力犯罪） 8 資質鑑別事例研究4（犯罪深度・要保護性） 9 資質鑑別事例研究5（異常心理学と犯罪・精神鑑定） 10 非行・犯罪とカウンセリング 11 非行・犯罪のある人への心理教育及び心理臨床的援助法 12 薬物依存症者に対する集団精神療法 13 非行・犯罪臨床と被害者支援 14 非行・犯罪臨床と犯罪報道 15 まとめ 16 テスト
	テキスト・参考文献・資料など 特に指定しない。 ①犯罪心理学（大淵憲一・培風館） ②図解雑学 犯罪心理学（細江達郎・ナツメ社）
	学びの手立て
	評価 出席、レポート内容、授業での発言・発表内容等を総合的に評価する。

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	保健医療政策特論	通年	木6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	安次富 郁哉	1年	担当教員宛にメールして下さい。 i.ashitomi@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>本講義のねらいは2点である。①我が国における医療政策、保健政策の現状を理解し、問題点、今後の課題を探求する。②我が国の医療提供構造を理解する。特に、病院完結型医療から地域完結型医療への推進による「地域連携」のあり方について理解する。</p>	<p>本科目に関する論文の精読を中心として、講義を展開するため、常に我が国の保健医療政策に興味を示す必要がある。</p>
到達目標	到達目標は次の通りである。①我が国の保健医療政策について概要を説明することができる。②我が国の保健医療政策について、批判的、客観的にみることができる。③我が国の保健医療政策の問題点・課題について説明ができる。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	前期オリエンテーション（計画・調整）	
	2	我が国の医療の現状①医療資源（全般）	保健医療政策について調べる
	3	医療資源関連論文抄読（医療全般）	
	4	我が国の医療の現状②医療資源：人	
	5	医療資源関連論文抄読（医療従事者）	
	6	我が国の医療の現状③医療資源：物	
	7	医療資源関連論文抄読（医療施設）	
	8	我が国の医療の現状④医療資源：財	
	9	医療資源関連論文抄読（医療施設）	我が国の医療政策の動向について
	10	診療報酬・・・出来高から包括へ	
	11	DPC①制度導入経緯	
	12	DPC②DPCとは	
	13	DPC③DPCとは	
	14	DPC制度を巡る問題及び課題	
	15	DPC制度を巡る問題及び課題	
	16	前期振り返り	
	17	後期オリエンテーション（計画・調整）	地域完結型医療について
	18	医療提供構造①：平均在院日数短縮化	
	19	医療提供構造②：急性期型病院	
	20	医療提供構造③：クリティカルパス	
	21	医療提供構造③：医療連携（病・病）	
	22	医療提供構造④：医療連携（病・診）	
	23	医療提供構造⑤：医療連携（モール）	
	24	医療提供構造が変わる！？	地域包括ケアシステムについて
	25	地域医療計画①概論	
	26	地域医療計画②沖縄県	
	27	地域連携：医療の出口に福祉あり	
	28	病院完結型医療から地域完結型医療へ	
29	クリティカルパス①：院内パス		
30	クリティカルパス②：地域連携パス		
31	振り返り		

学	<p>テキスト・参考文献・資料など 特に指定しない。その都度資料を配布する。 「日本医事新法」（研究室定期購読）、「病院」（図書館所蔵雑誌）、厚生労働白書、国民衛生の動向など医療 関連雑誌・図書等</p>
び の 実 践	<p>学びの手立て 少なくともマスメディアで取り上げられる保健医療政策について熟知すること。</p>
	<p>評価 出席状況、課題提出、討論への参加について総合的に評価する。</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目 保健医療政策について学び、自身の修士論文の研究領域につなげる。関連科目は、人間福祉特殊研究ⅠB及びⅡB である。</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理学特殊研究 I C	通年	金 6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	井村 弘子	1年	5号館424-2研究室 (098-893-3710) h.imura@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 臨床心理学研究の基礎理論・研究方法等について学びながら、各自の研究テーマを設定し、修士論文作成に向けた具体的な研究計画を立て、研究に着手することを目的とする。	メッセージ 大学院での学業生活の集大成である修士論文に向け、研究課題・論文の構想を明確にするという目標に意欲的に取り組んでほしい。
	到達目標 臨床心理学的研究技法の修得 修士論文の構想	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	
	2	臨床心理学研究概論（1）臨床心理学の領域と研究法	
	3	臨床心理学研究概論（2）研究のプロセス	
	4	臨床心理学研究概論（3）研究倫理	
	5	臨床心理学研究方法論（1）量的研究法	
	6	臨床心理学研究方法論（2）質的研究法	
	7	臨床心理学研究方法論（3）データ収集と分析法	
	8	研究テーマ発表（1）テーマの概要	
	9	研究テーマ発表（2）テーマの論点	
	10	研究テーマ発表（3）テーマ設定と報告	
	11	研究文献発表（1）先行研究の概要	
	12	研究文献発表（2）先行研究の論点	
	13	研究文献発表（3）先行研究のまとめと報告	
	14	集団討議（1）テーマに関する批判的検討	
	15	集団討議（2）テーマの関する建設的提言	
	16	集団討議（3）テーマに関する個別報告	
	17	研究デザイン発表（1）デザインの概要	
	18	研究デザイン発表（2）デザインの独自性・課題・問題点	
	19	研究デザイン発表（3）デザインのまとめと報告	
	20	集団討議（4）デザインに関する批判的検討	
	21	集団討議（5）デザインに関する建設的提言	
	22	集団討議（6）デザインに関する個別報告	
	23	研究方法発表（1）研究方法の概要	
	24	研究方法発表（2）研究方法の論点	
	25	研究方法発表（3）研究方法のまとめと報告	
	26	集団討議（7）データ収集と分析に関する批判的検討	
	27	集団討議（8）データ収集と分析に関する建設的提言	
	28	修士論文構想発表（1）研究計画書の概要	
	29	修士論文構想発表（2）研究計画書の論点	
30	修士論文構想発表（3）研究計画書の作成と発表		
31	まとめ		

学 び の 実 践	<p>テキスト・参考文献・資料など 特に定めないが、各自の研究テーマにふさわしいものを随時紹介する。</p>
	<p>学びの手立て 常に問題意識を持ち、自ら学ぶ姿勢を確立すること。 教員・他の院生とのディスカッションに積極的に参加すること。</p>
	<p>評価 発表内容、研究進行状況、討議参加への姿勢や発言などを総合的に評価する。</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目 次年度は「臨床心理学特殊研究ⅡC」を履修し、専門的能力をさらに高めてゆく。</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理学特殊研究 I A	通年	金 6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上田 幸彦	1年		

学びの準備	ねらい 修士論文を書くことで、臨床における科学的見方を身につけ、将来の科学者－実践家モデルとなる下地を作ることをねらいとする。2年間で修士論文を書き上げるためには、1年時は準備期間となるが、この1年間で、臨床心理学における研究領域と研究方法、テーマ設定、仮説構築と検証方法、データ収集の方法、研究における倫理的配慮、統計的技法の選択、文献検索の方法、科学論文の書き方を	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>前期ではまず、各自の卒業論文の概要と関心のある領域・テーマについて発表・ディスカッションを行いながら、関心のある研究領域の拡大を行う。 次にその中から各自のテーマに関連する論文を読み、論点を整理し発表する。これを繰り返しながら各自の研究テーマと研究目的を絞り込んでいく。 後期において、研究目的を達成するための方法論の検討を行い、研究計画を立てる。</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>臨床心理学の研究の技法 下山晴彦 編 (福村出版)</p>
	<p>学びの手立て</p>
	<p>評価</p> <p>毎回の発表の内容と、取り組みの積極性、討議での積極性によって総合的に評価する。</p>

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理学特殊研究 I B	通年	金 6	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	山入端 津由	1年		

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>「実証に基づく臨床心理学」の考え方の基に、臨床実践における科学的思考の訓練が重視されている。臨床心理士となるためには、こうした科学者—実践家モデルを身につけることが強く要請される。このための教育のひとつとして、科学性のある心理学研究論文としての修士論文の作成課題が準備されている。これは2年間で完成することになっている。1年目は、文献調査を通して、臨床心理学の理</p>	
	到達目標	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 臨床社会心理学関連やポジティブ心理学関連の分野を可能な限り学ぶ (2) 各自、関心のある臨床心理学の理論や関連分野について発表し、集団討議を通して、理解を深める。 (3) 各自の関心のあるテーマを絞込み、関連する先行研究文献を熟読し、論点を整理する。 (4) 研究計画を立てる。
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>適宜、紹介する。</p>
	<p>学びの手立て</p>
	<p>評価</p> <p>発表内容、取り組みの姿勢と課題処理の進捗状況、討議行動など、総合的に評価する。</p>

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理学特殊研究ⅡC	通年	金 7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	井村 弘子	2年	5号館424-2研究室 (098-893-3710) h.imura@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 初年次で十分検討した各自の研究計画に基づき、調査・面接等によりデータを収集し、そのデータを心理学的手法を用いて分析する。そして、その結果を臨床心理学的論点から考察し、修士論文としてまとめることを目的とする。	メッセージ 修士論文作成に向け、前年度までの構想に基づき、早めに着手してデータを収集し、しっかりとまとめあげてほしい。
	到達目標 臨床心理学的研究技法の修得 修士論文の作成・執筆・最終発表	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	
	2	修士論文デザイン検討(1) テーマの論点と背景理論	
	3	修士論文デザイン検討(2) 研究方法	
	4	修士論文デザイン検討(3) 倫理的配慮と研究責任	
	5	修士論文デザイン検討(4) 臨床心理学的意義	
	6	集団討議(1) 修士論文デザインに関する批判的検討	
	7	集団討議(2) 修士論文デザインに関する建設的提言	
	8	集団討議(3) 修士論文デザインに関する個別報告	
	9	データ収集報告(1) データ収集の概要	
	10	データ収集報告(2) データ収集の確認	
	11	データ収集報告(3) データ収集の見直し	
	12	データ収集報告(4) データ収集の再確認	
	13	データ収集報告(5) 個別報告	
	14	集団討議(4) データ収集に関する批判的検討	
	15	集団討議(5) データ収集に関する建設的提言	
	16	集団討議(6) データ収集に関する個別報告	
	17	データ分析報告(1) データ分析の概要	
	18	データ分析報告(2) データ分析の確認	
	19	データ分析報告(3) データ分析の見直し	
	20	データ分析報告(4) データ分析の再確認	
	21	データ分析報告(5) 個別報告	
	22	集団討議(7) データ分析に関する批判的検討	
	23	集団討議(8) データ分析に関する建設的提言	
	24	論文執筆指導(1) 執筆方法の概要	
	25	論文執筆指導(2) 執筆計画の確認と見直し	
	26	論文執筆指導(3) 進捗状況に応じた指導	
	27	論文執筆指導(4) 個別報告	
	28	修士論文発表予演(1) 発表の概要	
29	修士論文発表予演(2) 発表の具体的準備		
30	修士論文発表予演(3) 最終発表に向けての予行演習		
31	まとめ		

学 び の 実 践	<p>テキスト・参考文献・資料など 特に定めないが、各自の研究テーマにふさわしいものを随時紹介する。</p>
	<p>学びの手立て 常に問題意識を持ち、自ら学ぶ姿勢を確立すること。 教員・他の院生とのディスカッションに積極的に参加すること。</p>
	<p>評価 発表内容、研究進行状況、討議参加への姿勢や発言などを総合的に評価する。</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目 前年度までに「臨床心理学特殊研究ⅠC」を受講していることが前提である。 また、関連科目である「心理学研究法特論」「心理統計法特論」を履修しておくことが望ましい。</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理学特殊研究ⅡA	通年	金7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上田 幸彦	2年	上田幸彦まで	

学びの準備	ねらい 修士論文を完成させることを通して、データ収集法、データ収集における倫理的配慮、データ整理、統計的手法、論文執筆における科学論文の構成、引用の仕方等をマスターする。修士論文完成後の発表会の前には、リハーサルを行い、プレゼンテーションの仕方、学会発表の仕方を身につけることをねらいとする。	メッセージ
	到達目標 修士論文を完成し、修士論文最終発表にては発表する。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	修士論文進捗状況（先行研究） 発表	
	2	”	
	3	”	
	4	”	
	5	修士論文進捗状況（方法・対象者） 発表	
	6	”	
	7	”	
	8	”	
	9	修士論文進捗状況（データ収集） 発表	
	10	”	
	11	”	
	12	”	
	13	修士論文進捗状況（データ分析） 発表	
	14	”	
	15	”	
	16	”	
	17	”	
	18	修士論文進捗状況（考察） 発表	
	19	”	
	20	”	
	21	”	
	22	”	
	23	”	
	24	”	
	25	”	
	26	修士論文完成版 発表	
	27	”	
	28	”	
	29	修士論文発表会 予演	
30	”		
31	”		

学	<p>テキスト・参考文献・資料など APA論文作成マニュアル アメリカ心理学会著 江藤裕之他訳 医学書院</p>
び の 実 践	<p>学びの手立て</p>
	<p>評価 提出された論文の内容から評価する。</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理学特殊研究ⅡB	通年	金 7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	井村 弘子	2年	5号館424-2研究室 (098-893-3710) h.imura@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 初年次で十分検討した各自の研究計画に基づき、調査・面接等によりデータを収集し、そのデータを心理学的手法を用いて分析する。そして、その結果を臨床心理学的論点から考察し、修士論文としてまとめることを目的とする。	メッセージ 修士論文作成に向け、前年度までの構想に基づき、早めに着手してデータを収集し、しっかりとまとめあげてほしい。
	到達目標 臨床心理学的研究技法の習得 修士論文の作成・執筆・最終発表	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	
	2	修士論文デザイン検討 (1) テーマの論点と背景理論	
	3	修士論文デザイン検討 (2) 研究方法	
	4	修士論文デザイン検討 (3) 倫理的配慮と研究責任	
	5	修士論文デザイン検討 (4) 臨床心理学的意義	
	6	集団討議 (1) 修士論文デザインに関する批判的検討	
	7	集団討議 (2) 修士論文デザインに関する建設的提言	
	8	集団討議 (3) 修士論文デザインに関する個別報告	
	9	データ収集報告 (1) データ収集の概要	
	10	データ収集報告 (2) データ収集の確認	
	11	データ収集報告 (3) データ収集の見直し	
	12	データ収集報告 (4) データ収集の再確認	
	13	データ収集報告 (5) 個別報告	
	14	集団討議 (4) データ収集に関する批判的検討	
	15	集団討議 (5) データ収集に関する建設的提言	
	16	集団討議 (6) データ収集に関する個別報告	
	17	データ分析報告 (1) データ分析の概要	
	18	データ分析報告 (2) データ分析の確認	
	19	データ分析報告 (3) データ分析の見直し	
	20	データ分析報告 (4) データ分析の再確認	
	21	データ分析報告 (5) 個別報告	
	22	集団討議 (7) データ分析に関する批判的検討	
	23	集団討議 (8) データ分析に関する建設的提言	
	24	論文執筆指導 (1) 執筆方法の概要	
	25	論文執筆指導 (2) 執筆計画の確認と見直し	
	26	論文執筆指導 (3) 進捗状況に応じた指導	
	27	論文執筆指導 (4) 個別報告	
	28	修士論文発表予演 (1) 発表の概要	
	29	修士論文発表予演 (2) 発表の具体的準備	
30	修士論文発表予演 (3) 最終発表に向けての予行演習		
31	まとめ		

学	<p>テキスト・参考文献・資料など 特に定めないが、各自の研究テーマにふさわしいものを随時紹介する。</p>
び の 実 践	<p>学びの手立て 常に問題意識を持ち、自ら学ぶ姿勢を確率すること。 教員・他の院生とのディスカッションに積極的に参加すること。</p>
	<p>評価 発表内容、研究進行状況、討議参加への姿勢や発言などを総合的に評価する。</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目 前年度までに「臨床心理学特殊研究 I B」を受講していることが前提である。 また、関連科目である「心理学研究法特論」「心理統計方特論」を履修しておくことが望ましい。</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理学特殊研究ⅡB	通年	金7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	山入端 津由	2年		

学びの準備	ねらい 臨床心理学特殊研究ⅠBで準備したことに基づき、理論・仮設の点検、調査実施方法の準備、そして、調査実施を行い、調査結果の整理等を経て修士論文の作成に取り組む。論文執筆過程において、科学論文の作成方法を体験的に学ぶ。また、修士論文完成後の発表会を通して、プレゼンテーションの仕方についても学ぶ。こうした一連の作業過程を通して、科学者—実践家モデルの基礎を築く。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	<p>学びのヒント</p> <p>授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む）</p> <p>(1) 研究実施計画の再点検を行う。先行研究の整理、仮設、検証方法等について、現実課題に沿っているかどうかのチェックを行う。その結果について中間発表を行う。</p> <p>(2) 調査方法を確立し、作成・準備を行う。つまり、予備調査、本調査形式をとるか、あるいは一時調査、二次調査という形式で行うかなど。その時点で調査資料の整理方法、統計資料としての処理法などもはっきりさせておく。</p> <p>(3) 調査を実施し、資料の処理を行う。</p> <p>(4) 修士論文の作成に着手する。仮説検証、先行研究の流れにおいて、調査結果の有する意味を明確にしながら、討議をきちんと書きあげ、修士論文を完成させる。</p> <p>(5) 完成後、スライドやパワーポイント等を用いた発表の準備、リハーサル等を行う。</p> <p>(6) 学会形式のような発表を行う。</p>
	<p>テキスト・参考文献・資料など</p> <p>適宜、紹介する。</p>
	<p>学びの手立て</p>
	<p>評価</p> <p>提出された修士論文について、主査と副査を中心に査読と口頭試問を行い、その結果を成績に反映させる。</p>

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

※ポリシーとの関連性

カリキュラム・ポリシー「臨床心理査定・臨床面接・臨床心理学的地域援助・臨床心理学的研究等の技能を高める」基礎科目に相当。

[/一般講義]

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理学特論Ⅰ	前期	月7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	井村 弘子	1年	5号館424-2研究室 (098-893-3710) h.imura@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい 臨床心理士を目指す学生の土台となる講義であり、臨床心理学の定義や歴史、日本・諸外国における臨床心理士資格制度、臨床心理学に基づく人間理解・援助の方法、さらに、今後の展望や倫理問題などについて学ぶ。	メッセージ 人間福祉専攻臨床心理学領域で学ぶための最も基礎となる科目であることを踏まえ、柔軟な発想を持ちつつ、堅実に学んでほしい。
	到達目標 臨床心理学の定義・歴史・資格制度・倫理に関する専門的知識を得る。 臨床心理学に基づく人間理解・支援の方法に関する基礎的知識を修得する。	

学びの実践	学びのヒント 授業計画（テーマ・時間外学習の内容含む） 第1回～第2回 : 臨床心理学の定義と独自性 第3回～第4回 : 臨床心理学の歴史と成立 第5回～第6回 : 臨床心理士の養成と課題 第7回～第8回 : 臨床心理学における人間理解の方法 第9回～第10回 : 臨床心理学に基づく援助の方法 第11回～第12回 : 臨床心理学に基づく実践活動・研究活動・専門活動 第13回～第14回 : 臨床心理士の職業倫理 第15回～第16回 : 臨床心理学の課題と展望
	テキスト・参考文献・資料など 下山晴彦（著）「これからの臨床心理学」東京大学出版会 大塚義孝（編）臨床心理学全書1「臨床心理学原論」誠信書房 下山晴彦・丹野義彦（編）講座臨床心理学1「臨床心理学とは何か」東京大学出版会
	学びの手立て 常に問題意識を持ち、自ら学ぶ姿勢を確立すること。 教員・他の院生とのディスカッションに積極的に参加すること。
	評価 出席状況、討論への参加態度や発言内容、提出されたレポート等から総合的に評価する。評価方法については、講義初日に詳細に説明する。

学びの継続	次のステージ・関連科目 専門的知識・技能を高めてゆくために、引き続き「臨床心理学特論Ⅱ」を履修すること。
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理学特論Ⅱ	後期	木6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-牛田 洋一	1年	yushida@okiu.ac.jpあるいは講義後に教室にて	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>・心理臨床の実践家あるいは研究者を志す大学院生に、比較的新しいパラダイムに基づく臨床心理学的支援の展開と、その基礎理論（認識論も含む）を紹介・検討していきます。また、今後ますます重要となってくる高齢者における心理臨床的課題についても検討します。</p>	<p>自由で活発な議論の場を提供していきたいと思います。</p>
到達目標	<p>講義の中では限定されたテーマで議論を重ねていきますが、テーマに対する理解だけではなく、各自がテーマに関する発表の準備と議論を重ねていく過程のなかで、今後の心理臨床実践、研究の手掛かりを得ていくことができることを目指します。</p>	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	各自の課題を明確にしてくる
	2	臨床心理学の基礎理論として：Bateson, G. の二重拘束理論について	文献検討と発表準備
	3	臨床心理学の基礎理論として：Bateson, G. の二重拘束理論について	同上
	4	臨床心理学の基礎理論として：コミュニケーションの語用論	同上
	5	臨床心理学の基礎理論として：コミュニケーションの語用論	同上
	6	臨床心理学の技法論：MRIのアプローチ	同上
	7	臨床心理学の技法論：BFTCのアプローチ	同上
	8	基礎理論・技法論の総括	同上
	9	高齢者臨床心理：総論	同上
	10	高齢者臨床心理：認知症疾病論	同上
	11	高齢者臨床心理：認知症疾病論	同上
	12	高齢者臨床心理：認知機能評価	同上
	13	高齢者臨床心理：認知症支援	同上
14	高齢者臨床心理：総括	同上	
15	その他、今後注目すべき臨床心理学のトピックの紹介	文献精査	
16	口頭試問による評価	発表・議論を合わせて評価	
テキスト・参考文献・資料など	<p>それぞれのテーマに沿って適宜紹介します。入手困難の文献については印刷配布します。また、各自が発表テーマに沿った文献を検索し、講義の中で紹介してください。</p>		
学びの手立て	<p>各自がテーマに沿った知見を検索、検討しレジュメを作成し発表して頂きます。各自の発表に対して、受講者同士の積極的な議論を望みます。大学院では自ら積極的にテーマを追求していく姿勢が求められます。</p>		
評価	<p>各自の発表・議論への参加（70%） 最終の口頭試問（30%）</p>		

学びの継続	<p>次のステージ・関連科目</p> <p>講義の中で扱うテーマだけではなく、それぞれが自身の心理臨床活動を実践していく上で、準拠していく理論的枠組みと出会えることが大切です。さまざまな理論と出会い、自分にフィットするものを見つけてください。</p>
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理基礎実習	通年	火6・7	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	平山 篤史・山入端 津由	1年	研究室 13-211 atsushi@okiu.ac.jp	

学びの準備	ねらい	メッセージ
	<p>学内外での臨床心理実習を行う為に必要となる、心理臨床の倫理や、臨床心理面接、臨床心理査定などの基礎的知識と基礎的技術の習得を目的とする。ロールプレイング、ディスカッションを通して体験的に学習する。</p>	<p>ディスカッションやロールプレイングを通して、心理臨床実践の基礎を身につけます。臨床実践の力は、話を聞くだけでは身につけません。主体的に、積極的にディスカッションや実習、課題に取り組んで下さい。臨床の実践家としてクリアすべき課題がこの講義を通して見つかるかもしれません。まずはそれに向き合い、受け入れることからスタートです。</p>
到達目標	<p>①心理臨床実践における倫理的態度を身につける。 ②マイクロカウンセリングの基本的かかわり技法を用いて面接ができる。 ③インテーク報告書が書ける。 ④客観的事実と内的な体験を区別した実習報告書が書ける。 ⑤スーパーバイザーや教員を使って自分自身や自分の面接を振り返ることができる。 ⑥これまで学んできた知識や経験をもとにしてディスカッションで自分の意見を述べることができる。</p>	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	前期オリエンテーション	調べ学習・レジメ作成・発表準備
	2	心理臨床実践の基本事項①	調べ学習・レジメ作成・発表準備
	3	心理臨床実践の基本事項②	調べ学習・レジメ作成・発表準備
	4	心理臨床実践の基本事項③	調べ学習・レジメ作成・発表準備
	5	心理臨床の面接の基本的態度	リフレクションシート作成
	6	心理臨床面接の応答技法①	リフレクションシート作成
	7	心理臨床面接の応答技法②	リフレクションシート作成
	8	心理臨床面接の応答技法③	リフレクションシート作成
	9	応答技法のロールプレイ	リフレクションシート作成
	10	インテーク面接について①	リフレクションシート作成
	11	インテーク面接について②	リフレクションシート作成
	12	インテーク面接ロールプレイ①	リフレクションシート作成
	13	インテーク面接ロールプレイ②	リフレクションシート作成
	14	学外基礎実習についてのオリエンテーション	配布資料の理解・実習目標設定
	15	インテークの記録と報告①	調べ学習・レジメ作成・発表準備
	16	インテークの記録と報告②	調べ学習・レジメ作成・発表準備
	17	後期オリエンテーション	実習報告準備
	18	学外基礎実習の報告①	リフレクションシート作成
	19	学外基礎実習の報告②	リフレクションシート作成
	20	心理臨床面接のロールプレイ①	リフレクションシート作成
	21	心理臨床面接のロールプレイ②	リフレクションシート作成
	22	プレイセラピーと箱庭療法について	リフレクションシート作成
	23	プレイセラピーのロールプレイ①	リフレクションシート作成
	24	プレイセラピーのロールプレイ②	リフレクションシート作成
	25	面接の進め方について	リフレクションシート作成
	26	面接の技法①	リフレクションシート作成
	27	面接の技法②	リフレクションシート作成
	28	面接の技法③	リフレクションシート作成
	29	面接の技法④	リフレクションシート作成
30	面接の技法⑤	リフレクションシート作成	
31	まとめ	まとめのレポート	

学 び の 実 践	<p>テキスト・参考文献・資料など 適宜紹介する 適宜紹介する</p>
	<p>学びの手立て 心理臨床実践の学びのためには、自分の認知・行動・感情を振り返り、言語化して表現するトレーニングが必要とされる。その際、乗り越えなければならない自分自身の課題も見つかると思うが、それに向き合い続けなければならない。心理的負担を伴う作業ではあるが、スーパーバイザーや教員を使い、支えを得ながら、取り組んでほしい。 学部講義のようにいくらまじめに取り組んでいても、受け身的な態度では実践力は身につかない。積極的に発言し、行動し、多くの経験を積んでほしい。</p>
	<p>評価 ①ディスカッション・ロールプレイング実習への取り組み方 ②リフレクションシート・課題の提出状況 ③学外の実習評価 を総合的に判断し評価する。</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目 「臨床心理実習」や附属心理相談室のケース陪席、ケース担当、学外のボランティア活動などで学んだことを実践し、常に振り返りを行う。</p>

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理査定演習 I	前期	火 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上田 幸彦	1年	上田幸彦まで	

学びの準備	ねらい 最近日本においても、臨床心理士に求められることが多い神経心理学的検査法について学ぶ。特に神経心理学的検査が必要とされる高次脳機能障害に対する基本的な神経心理学検査バッテリーの実施法を身につける。	メッセージ
	到達目標 神経心理学的検査結果から援助に役に立つ所見を書けるようになることを目指す。神経心理学的所見に基づく援助方法を考えることができるようにする。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	神経心理学査定概論	
2	認知機能概論①		
3	認知機能概論②		
4	認知機能概論③		
5	認知機能概論④		
6	WAIS-III①		
7	WAIS-III②		
8	WAIS-III③ プロフィール分析、結果の解釈と所見の書き方		
9	WMS-R①		
10	WMS-R②		
11	リーバ-ミード行動記憶検査		
12	注意機能検査①：TMT		
13	注意機能検査②：PASAT		
14	遂行機能検査 ウィスコンシンカードソーティングテスト		
15	神経心理学的報告書の書き方		
16			
	テキスト・参考文献・資料など 神経心理学的検査集成 レザック, M. D. 鹿島晴雄監修 創造出版		
	学びの手立て		
	評価 授業への出席状況とレポートによって評価する		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理査定演習Ⅱ	後期	月7	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	-稲田 梨沙	1年	稲田梨沙 <r.inada@okiu.ac.jp>	

学びの準備	ねらい 心理査定の専門技法である心理検査について、代表的な心理検査を取り上げる。検査の適切な実施方法、結果の整理、解釈の基本的な考え方について体験的に学習した上で、検査報告書の書き方、テストバッテリーの組み方、心理的援助に結びつく総合所見の書き方などを身につけることを目的とする。	メッセージ 演習の一環として事前に必ず被験者体験をし、データを手元に用意すること。各検査について、検査の成り立ち、目的、構成、手順、測定方法などについて各自整理しておくこと。
	到達目標 “この科目を履修することによって、心理検査を実施・所見作成し、同時に見立てと手立てを考える専門的な力を身につけることができる。”	

学びの実践	学びのヒント 授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	臨床心理査定概論	臨床における心理査定を調べ学習
	2	心理面接による臨床心理査定の実際	心理査定の方法について調べ学習
	3	心理面接による臨床心理査定の実際	心理検査の種類について調べ学習
	4	心理検査①-1 (質問紙法 実施法と理論的背景)	課題ワークシート (採点・分析)
	5	心理検査①-2 (質問紙法 所見のまとめ方)	課題ワークシート (所見のまとめ)
	6	心理検査①-3 (質問紙法 見立てと手立て)	課題ワークシート (解釈)
	7	心理検査②-1 (作業検査法 実施法と理論的背景)	課題ワークシート (採点・分析)
	8	心理検査②-2 (作業検査法 所見のまとめ方)	課題ワークシート (所見のまとめ)
	9	心理検査②-3 (作業検査法 見立てと手立て)	課題ワークシート (解釈)
	10	心理検査③-1 (投映法その1 実施法と理論的背景)	課題ワークシート (採点・分析)
	11	心理検査③-2 (投映法その1 所見のまとめ方)	課題ワークシート (所見のまとめ)
	12	心理検査③-3 (投映法その1 見立てと手立て)	課題ワークシート (解釈)
	13	心理検査④-1 (投映法その2 実施法と理論的背景)	課題ワークシート (採点・分析)
	14	心理検査④-2 (投映法その2 所見のまとめ方)	課題ワークシート (所見のまとめ)
15	心理検査④-3 (投映法その2 見立てとまとめ方)	課題ワークシート (解釈)	
16	最終レポート作成・提出 (到達度の確認)	最終レポート作成・提出	
実践	テキスト・参考文献・資料など “テキスト：必要に応じて資料を配布する。 参考文献： 竹内健児(編)「心理検査の伝え方・活かし方」金剛出版 日本臨床心理士会「臨床心理士の基礎研修」創元社 上里一郎(監修)「心理アセスメントハンドブック」西村書店”		
	学びの手立て “①履修の心構え 欠席するとその後の理解に支障をきたすため、皆出席かつ遅刻厳禁。高度に専門的な科目なので、「臨床心理査定演習Ⅰ」「投映法特論」を受講済みであることが望ましい。 ②学びを深めるために 臨床現場でのボランティア活動等を行うことを奨励する。”		
	評価 “評価方法 発表、討論への参加、提出されたレポート等から総合的に評価する。 割合 平常点(出席状況等) 30% 課題レポート50% 最終レポート20% 上記の評価方法については、講義初日に詳細に説明する。”		

学びの継続	次のステージ・関連科目 “関連科目「臨床心理査定演習Ⅰ」「投映法特論」を受講済みであることが望ましい。 次のステージ 「臨床心理基礎実習」「臨床心理実習」「臨床心理事例検討実習」などを受講する中で、事例を通してさらに理解できることが望ましい。”
-------	---

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理実習	通年	火6・7	0
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上田 幸彦・井村 弘子	2年	上田幸彦まで	

学びの準備	ねらい 本実習では、臨床心理学基礎実習の学習成果をふまえ、学内外での心理臨床活動の実際に触れながら、地域に根ざした心理臨床活動を展開するために必要な実践的知識や技法の習得をめざす。	メッセージ 毎週の学外実習と実習報告には、かなり時間とエネルギーを必要とする。体調管理も行いながら年間取り組むこと。
	到達目標 臨床心理学的な人間理解と援助方法を身につける。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	臨床心理基礎実習で修得した面接技法などについて確認し、学外での実習に向けた演習を行う。	
	2	〃	
	3	〃	
	4	〃	
	5	学外実習での実習成果をふまえ、実際の臨床場面での問題や課題について事例をもとに検討する。	
	6	〃	
	7	〃	
	8	〃	
	9	〃	
	10	〃	
	11	〃	
	12	〃	
	13	〃	
	14	〃	
	15	〃	
	16	前期の実習を振り返り、後期の実習課題を検討する。	
	17	〃	
	18	実習施設担当者による「心理臨床の現場と臨床心理士の役割と活動」に関する講義	
	19	〃	
	20	個別の事例について検討を行い問題点を探ると同時に、より適切な対応について検討する。	
	21	〃	
	22	〃	
	23	〃	
	24	〃	
	25	〃	
	26	〃	
	27	〃	
	28	〃	
	29	〃	
30	〃		
31	〃		

学 び の 実 践	テキスト・参考文献・資料など
	学びの手立て
	評価
学 び の 継 続	次のステージ・関連科目 授業において、随時紹介する。

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理事例検討実習 A	通年	水 7	1
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上田 幸彦・平山 篤史・井村 弘子・山入端 津由	1年	上田幸彦まで	

学びの準備	ねらい 一つ一つの事例を様々な視点から検討することを通して、心理的問題を抱える人の環境、歴史、特性に応じた援助が展開できるようにする。	メッセージ 生の事例に触れることで、臨床心理学的支援の実際に触れてほしい。その際に守秘義務の重要性についても学ぶこと。
	到達目標 来談者の個別性を理解し、その人への適切な援助を柔軟に展開できるようにする。	

到達目標	来談者の個別性を理解し、その人への適切な援助を柔軟に展開できるようにする。
------	---------------------------------------

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	
	2	事例検討①	
	3	事例検討②	
	4	事例検討③	
	5	事例検討④	
	6	事例検討⑤	
	7	事例検討⑥	
	8	事例検討⑦	
	9	事例検討⑧	
	10	事例検討⑨	
	11	事例検討⑩	
	12	事例検討⑪	
	13	事例検討⑫	
	14	事例検討⑬	
	15	事例検討⑭	
	16	事例検討⑮	
	17	事例検討⑯	
	18	事例検討⑰	
	19	事例検討⑱	
	20	事例検討⑲	
	21	事例検討⑳	
	22	事例検討㉑	
	23	事例検討㉒	
	24	事例検討㉓	
	25	事例検討㉔	
	26	事例検討㉕	
	27	事例検討㉖	
	28	事例検討㉗	
29	事例検討㉘		
30	事例検討㉙		
31			

学	テキスト・参考文献・資料など 適宜紹介する。
び の 実 践	学びの手立て
	<p>評価</p> <p>心理相談室で担当した事例を発表することが単位認定の条件となる（2年で3ケース以上を担当することがのぞましい。） 授業態度、事例報告および報告に対するコメントなどの総合的に判断し評価する。</p>
学 び の 継 続	次のステージ・関連科目

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理面接特論 I	後期	金 5	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	山入端 津由	1年		

学びの準備	ねらい	メッセージ
	到達目標	

学びの準備	
-------	--

学びの実践	学びのヒント 授業計画 (テーマ・時間外学習の内容含む)
	テキスト・参考文献・資料など

学びの実践	学びの手立て
-------	--------

学びの実践	評価
-------	----

学びの実践	
-------	--

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	臨床心理面接特論Ⅱ	後期	木6	2
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	上田 幸彦	1年	上田幸彦まで	

学びの準備	ねらい 近年世界的に最も用いられることが多い認知行動療法に関わる面接技法を中心に学習する。また精神分析的アプローチ、クライアント中心療法などの各派との違いと各派に共通するものを探り、最近の流れである心理療法の統合について理解していく。	メッセージ 毎回、積極的に質問・コメントをすること。
	到達目標 将来出会うであろう様々なクライアントに対して、最も有効なアプローチ法を見出せるようにする。	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	オリエンテーション	
	2	認知行動療法の基礎としての学習・問題行動・不適応行動	
	3	行動療法の主な技法：系統的脱感作、曝露反応妨害法、応用行動分析	
	4	認知行動療法基礎理論、抑鬱に対する認知行動療法①	
	5	抑鬱に対する認知行動療法②	
	6	” ③	
	7	” ④	
8	” ⑤		
9	他のアプローチとの比較：来談者中心療法		
10	” : 精神力動的アプローチ		
11	” : システムズ・アプローチ		
12	” : 折衷的アプローチ		
13	” : 動機づけ面接法		
14	慢性疾患、視覚障害者、高次脳機能障害者に対するアプローチ		
15	心理療法の統合：多理論統合モデル		
16			
	テキスト・参考文献・資料など		
	参考文献： 「心理療法の諸システム 多理論統合的分析」 プロチャスカ著 津田彰他監訳 金子書房 2010 「リハビリテーションにおける認知行動療法的アプローチ」 上田幸彦著 風間書房 2011 「高次脳機能障害のための認知リハビリテーション」 ソールバーク・マティアー著 尾関誠・上田幸彦監訳 協同医書出版社 2012		
	学びの手立て		
	評価 毎回の講義でのディスカッションへの参加状況とレポートによって評価する。		

学びの継続	次のステージ・関連科目
-------	-------------

科目基本情報	科目名	期別	曜日・時限	単位
	老年健康科学特論	通年	水5	4
	担当者	対象年次	授業に関する問い合わせ	
	ドナルド・クレイグ・ウィルコックス	1年		

学びの準備	ねらい 本授業は、健康・疾病および加齢に関する項目について学ぶことを目的とする。健康管理システムにおけるソーシャルワークの役割、健康と加齢に関する社会的要因、高齢者がもたらす社会経済的影響に対する政策について学ぶ。主に、健康増進とリスク除去の方策のほか、健康維持アプローチと高齢者特有の健康問題にも焦点を当てる。授業で扱うテーマとして以下5点を設定する。	メッセージ
	到達目標	

学びの実践	学びのヒント		
	授業計画		
	回	テーマ	時間外学習の内容
	1	前期オリエンテーション	
	2	健康長寿(Healthy Aging)の定義	
	3	健康長寿とソーシャルワーク	
	4	地域における保健活動と健康長寿	
	5	高齢者の健康に関わる社会的要因	
	6	高齢者の疾病について	
	7	加齢に伴う身体的健康問題	
	8	加齢に伴う精神的健康問題	
	9	長期介護について	
	10	介護者のストレスと健康	
	11	終末期ケアについて	
	12	スピリチュアリティと健康	
	13	ソーシャルワーク実践	
	14	健康増進と予防について	
	15	前期のまとめ	
	16	後期オリエンテーション	
	17	文化および民族と健康	
	18	世界の社会的弱者の健康について	
	19	高齢者の健康政策のマクロ的影響	
	20	沖縄における長寿の課題1	
	21	沖縄における長寿の課題2	
	22	沖縄における長寿の課題3	
	23	沖縄における長寿の課題4	
	24	沖縄における長寿の課題5	
	25	世界の健康長寿の課題1	
	26	世界の健康長寿の課題2	
	27	世界の健康長寿の課題3	
	28	世界の健康長寿の課題4	
	29	世界の健康長寿の課題5	
30	後期のまとめ		
31			

学 び の 実 践	<p>テキスト・参考文献・資料など 必要に応じて資料を配布する。 近藤克典『健康格差社会～何が心と健康を蝕むのか～』医学書院, 2005. Berkman B. 『Handbook of Social Work in Health and Aging』Oxford Univ Press, 2006. その他、適宜、論文等を紹介する。</p>
	<p>学びの手立て</p>
	<p>評価 出席・クラス討論・授業内での発表内容・授業終了時のレポートの内容。</p>
学 び の 継 続	<p>次のステージ・関連科目</p>